

2019 年度
ウガンダ海外実践教育プログラム報告書



鳥 取 大 学

ウガンダ海外実践教育プログラム概要

本プログラムは、学生の豊かなグローバルマインドの醸成を目的とし、将来、大きな発展が期待されるアフリカ・ウガンダにおいて、ウガンダ最大の国立大学であるマケレレ大学の協力のもと 2015 年から実施されています。アフリカが抱える課題と可能性を多様な視点から学ぶ内容となっており、マケレレ大学講師陣による英語での社会経済、文化、歴史、農業等の多岐にわたる分野の講義に加え、講義で得た知識を様々なフィールドワークを通じて深めることができます。本プログラムにはマケレレ大学の学生が TA（ティーチング・アシスタント；指導学生）として全日程同行しており、学生のコミュニケーション能力や異文化理解力・異文化交流力の大きな向上効果が期待されます。

フィールドワーク等での地球規模課題についての直接的な体験を通じ、これらの課題を自らのものとして捉え、身近なところから課題解決につなげる価値観や行動力とグローバルな倫理感の育成を目指しています。研修最終日には、参加学生が自分で関心を持ったテーマを選定し、課題解決についてのプレゼンテーションを英語で行います。プレゼンテーションではマケレレ大学関係者らによって採点が行われ、点数および修了証をもとに単位（成績）が認定されます。

本報告書には、2020 年 2 月 26 日から 3 月 21 日までの日程で本プログラムに参加した学生 14 名のウガンダでの気づき、学び、プレゼンテーションのテーマについての考察などがまとめられています。本プログラムを遂行するにあたり、在ウガンダ日本国大使館、JICA ウガンダ事務所および青年海外協力隊員の皆様、ネリカ米振興プロジェクトに参加されている JICA 専門家の皆様には毎年多大なご協力を賜っております。ここに感謝申し上げます。

目次

参加学生一覧	1
2019 年度プログラム日程	2
訪問先概要	3
学生報告書	
和田 佳恋	4
宮田 和瑚	12
北川 千晴	21
西田 澪司	28
足立 理子	35
中津 春	40
荒木 佑哉	47
楠本 ころろ	53
和田 純奈	57
澤根 正佳	63
石坂 知英里	68
芝 玲奈	74
寺田 晃盛	78
石破 さくら	83

参加学生一覧



和田 佳恋
農学部生命環境農学科 1 年



宮田 和瑚
農学部生命環境農学科 1 年



北川 千晴
農学部生命環境農学科 1 年



西田 滯司
農学部生命環境農学科 1 年



足立 理子
医学部保健学科看護学専攻 1 年



中津 春
地域学部地域学科
国際地域文化コース 2 年



荒木 佑哉
農学部生命環境農学科 2 年



楠本 こころ
農学部生命環境農学科 1 年



和田 純奈
農学部生命環境農学科 1 年



澤根 正佳
工学部
社会システム土木系学科 2 年



石坂 知英里
農学部生命環境農学科 2 年



芝 玲奈
農学部生命環境農学科 1 年



寺田 晃盛
農学部生命環境農学科 1 年



石破 さくら
医学部保健学科看護学専攻 1 年

2019 年度プログラム日程

日付・時間	行程・活動
2/26(水)	往路：鳥取→関空 → エンテベ 2月 27 日（木）着
2/28(金)	在ウガンダ日本国大使館：表敬（日本の対ウガンダ支援の概要） 亀田大使、高田専門調査員 JICA ウガンダ事務所：対ウガンダ援助の概要 深瀬豊所長、斉藤真一所員、今村真理子所員
2/29(土)	休日
3/1(日)	休日
3/2(月)	マケレレ大学：開講式 マケレレ大学：講義（ウガンダの教育制度）（Ms. Martha） マケレレ大学：キャンパスツアー
3/3(火)	マケレレ大学講義（ウガンダの歴史）（Ms. Kyazike Elizabeth） マケレレ大学講義（ウガンダの農業）（Ms. Lucy Mulugo）
3/4(水)	ウガンダの経済・産業（Elizabeth K. Balirwa）
3/5(木)	JICA コメ振興プロジェクト（PRiDE）視察・講義・実習（吉野専門家、 野坂専門家、宮本専門家）、現地農家と服部 JOCV 活動訪問
3/6(金)	赤道見学(Masaka Road)
3/7(土)	休日
3/8(日)	休日
3/9(月)	Independent Hospital を訪問し、ClinicMaster の医療サービス現場視察
3/10(火)	Kampala→Mbarara 移動、EcoSmart 視察（説明：Ms. Asimwe Lydia）
3/11(水)	Mbarara 病院と成田 JOCV 活動視察、Mbarara→Kampala 戻り
3/12(木)	マケレレ大学講義（ウガンダの自然保護）（Ms. Lucy Mulugo）
3/13(金)	Murchison Falls National Park 視察、Waterfront ecosystem (Boat cruise)
3/14(土)	Murchison Falls National Park 視察 Study on Land-based Natural Ecosystem（ガイドによる野生動物観察）
3/15(日)	Kennedy Secondary School 交流活動 校長：Bamuleseyo George、他教員、生徒（900 人）
3/16(月)	マケレレ大学講義（Effective Presentations）（Mr. Davies Rwabu）
3/17(火)	最終プレゼン準備
3/18(水)	最終プレゼン準備
3/19(木)	最終プレゼンテーション 在ウガンダ日本国大使館表敬、高田専門調査員への報告
3/20(金)	帰路：エンテベ→ドバイ→関西空港（3月 21 日）

訪問先概要

- 1) 在ウガンダ日本国大使館
国際協力の在り方や受け手となる途上国の姿勢などについて、大使のこれまでの経歴を交えながら丁寧に説明して頂きました。学生への希望として「情報をありのまま信じ受け入れるのではなく、自分の頭で考えて理解してほしい」というコメントがありました。
- 2) JICA ウガンダ事務所（深瀬豊所長、斉藤真一所員、今村真理子所員）
ウガンダの概要、JICA の理念やウガンダで現在扱っている案件について説明して頂きました。
- 3) マケレレ大学
アフリカで最も歴史が古く、ウガンダでは最大の国立大学。大学の講師陣によるウガンダの歴史、経済、農業、教育などについての講義を英語で受けます。
- 4) NaCRRI (National Crops Resources Research Institute; 国立作物資源研究所)
JICA のネリカ米振興プロジェクトを行う栽培試験圃場があり、毎年 JICA の専門家の方々によってプロジェクトに関する説明をして頂き、田植えから脱穀までの一連の流れを実際に体験しながら学んでいます。今年はコメを栽培している農家さんのコミュニティーを訪問させて頂き、服部隊員にお世話になりました。
- 5) Clinic Master
ウガンダでは医療カルテ等が紙で管理されている病院が多く、正確で効率の良い医療サービスを受けることが難しいという現状があります。Clinic Master 社はそういった課題を解決するため、様々な医療事務を一括管理できるソフトウェアの開発を行っています。今年は Clinic Master 社のソフトを導入している私立病院を訪問しました。
- 6) EcoSmart
ウガンダの一人分の生理用ナプキンの値段は、最低賃金月収の半分にもなります。そのため、低所得家庭や難民キャンプで暮らす女性はバナナの皮や葉、汚れた布などを代用品として使用し、重度の感染症を引き起こすこともあります。この課題解決のために、EcoSmart は低価格で再生可能な資源を利用したナプキンの開発を行っています。
- 7) ムバララ病院
ウガンダ西部にある国立の地域中核病院で、JICA のサポートによって地域中核病院を対象に 5S プロジェクトを実施しています (5S: 整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)。今年は、JICA 青年海外協力隊としてムバララ病院で働く成田隊員を訪問し、病院の見学や活動内容についての説明をして頂きました。
- 8) マーチソン・フォールズ国立公園
ウガンダでは最大の面積を持つ国立公園で、76 種の哺乳類動物が生息していると言われています。国立公園へ訪問する際マケレレ大学において、事前にウガンダが抱える環境問題や自然保護活動などについての講義を受けました。

ウガンダ実践教育プログラムをとおして

農学部生命環境農学科 1 年

和田 佳恋

目次

1. 志望理由
2. 私が実際に見たウガンダ
3. プレゼンテーション
4. エコスマート
5. マケレレ大学の講義
6. 多くの人との出会い
7. 最後に



このプログラムに参加して本当に良かった。

1. 志望理由

私はこのプログラムに本当に軽い気持ちで応募した。それは、「アフリカって一人じゃいけないから応募してみよう」というものだった。出国前にウガンダのことについては様々なうわさを聞いていた。朝、昼、晩、バナナを食べる。貧困。緑豊か。渋滞ひどい。実際に行ってみると、正しいこともあったが噂と違うこともたくさんあった。これから私がうわさで聞き、イメージしていたウガンダと私が実際に見たウガンダについて話そうと思う。

2. 私が実際に見たウガンダ

まずは、食事についてだ。私の中のイメージは、主食はキャッサバなどのイモ類が多く、お米は高級品でなかなか手に入らない。味付けは独特の香辛料が使われておりあまり口に合わない。実際に行ってみてまず驚いたのはお米が日常的に出てくることだ。高級品であり普及していないと思っていたが、ホテルではもちろん、学食でも普通に置いてあった。同時に主食としてマトケは置いてあったが、私たち日本人の口にはあまりあわないと思った。TA さんの話によると、マトケは柔らかく食べやすいため



50 代以上の人には好まれるが、若い人たちはあまり好まないらしい。最近では調理がしやすい点、保存がきく点からお米を食べる家庭も増えているらしい。ウガンダでは NaCRRI の施設を訪ね、お米の栽培や普及について様々な話を聞いた。ウガンダの米栽培は機械がほとんどなく手作業が主になっている現状をきいた。その労力と時間は想像を絶する。だからこそ付加価値がつくのかなとも思う。ウガンダは気候に恵まれているため、米を栽培するには適しているし、実際にお米を育てている農家のほうが、収入がよく、お米が農家の間で普及するメリットは大きいと思う。しかし、マトケとは違って収穫するまでの手間がかかる点や、栽培方法を雑にすると収量が大幅に減少する点など、始めるのが難しいのが現状だ。例えば機械を導入したとしても動かすための燃料費の問題や機械を正しく扱い、点検・整備することが必要だと思う。一筋縄ではいかないことを感じた。主食以外の料理では美味しいと感じるものが多かった。肉が焦げすぎていたり、砂が料理に混じったりなどはあったが、味付けが甘すぎるとか辛すぎるとかは特になく、ホテルでは

いろんな料理を楽しめた。食事をするにあたって面白かったのは、同じメニューでも日によって量や付け合わせなどがころころ変わることだ。例えば、ホテルのカルボナーラだ。使われているパスタの種類、量、上に乗っかっているもの（ネギやパクチーなど）が日によって全然違うのだ。パクチーはあまり好きでない人が多く、初めて料理に乗って出てきたときは、驚いて食べるのに苦労していた人が多かった。ほかのメニューも日によっていろんな形で提供されるため、ある意味飽きなかった。固定のレシピがなく、作る人やその日余った食材によって違うのかな？と思った。日本ではなかなかないことなのでとても新鮮だった。

私がウガンダで食事をするにあたって感じた問題点がひとつある。それは、食料廃棄の問題だ。アフリカを含む世界では人口増加に伴い、食糧危機の問題が深刻化している話はよく耳にする。私は今回主に首都のカンパラにいたので食糧不足を感じることは全くなかった。その一方で食料廃棄をたくさん目の当たりにした。ウガンダでの食事はホテル以外ビュッフェ形式が多かった。基本的に主食はマトケ、米、ポショなどたくさん用意されており好きなだけとれる。それから、肉の入ったスープを一種類選んでかけてもらうという形が多かった。何も係の人に



言わないと、基本大量にお皿に盛りつけられてしまうのでいつも少なめにとっていた。そのたびに、それで足りる？とか全然食べないねと現地の人から言われた。たしかに学食にいた現地の学生と比べると量が倍ぐらい違っていて、日本人は食べる量が少ないのかなと思った。しかし、実際に食べ終わってみると、もちろん全部食べている現地の人もいたが、多くの人が食事を残しているのが目についた。中には半分以上残している人がいたのが衝撃的だった。日本では小さいころから残すのはよくないこととする慣習があるが、ウガンダにはないのだろうかと思った。食糧不足や栄養失調の子が少なからずいると聞く一方で、食料廃棄の問題があるということは国の中の格差が浮き彫りになっているということだと思う。食堂などで廃棄されている食品について調査はできなかったが、ウガンダであるということはほかの国でもそういうことがあるのかなと思ったし、日本の食料廃棄の問題についても興味を持った。

次に環境のことについて話そうと思う。緑豊かな国と聞いていたが本当にそうだった。カンパラ市内でも緑がみられるところが多く、気候に恵まれていることが感じられた。また、マーチソン・フォールズ国立公園で見た景色には圧倒された。日本だと動物園でしか見られないような動物が実際に大地を駆け回っていたり、草を食べていたり、夢のような時間だった。そんな国立公園がたくさんあるウガンダはとてもすごい国だし、これからもその自然を守っていかなければいけないなと感じた。そんな自然豊かなウガンダだが、街中では道端のゴミが目立った。そこで生活している人はまるでそこにゴミがあるのが当たり前のように過ごしていた。スラムのほうではゴミが高く積み上げられているのを見た。見た目的にも衛生的にもよくはない。マケレレ大学の中や街のいたるところでそんな景色を見たため、ゴミが落ちているのが日常なことなのだと感じた。このプログラムに参加した人の中にゴミ問題を最終プレゼンテーションに取り上げている人が何人かいた。そこで、私はゴミの回収の頻度が少ないことや、分別という概念がないことなどを知った。日本ではごみは地域によって多少、差はあるが、何種類かに分別されており、毎週何回も回収される。分別も回収の仕方も国民にとっての日常や当たり前を変えないといけないものであり、国規模の問題になってしまう。そして、お金ももちろんかかる。私たちができること～などというが、結局は政府頼りになってしまうことが多く、無力さを感じた。

もう一つ私が気になった環境についての問題は、環境汚染だ。ウガンダのカンパラでは渋滞がよく起こるという話を渡航前によく聞いていた。そのため、実際に渋滞に巻き込まれてもあまり驚きはしなかった。ただ、大量のボダボダ（ウガンダのバイクタクシー）には驚いた。車の間を

無理やり通り抜けたり、時にはバスにぶつかったりする。乗客も不安定なはずなのに、ちゃんとつかまっている人がほとんどおらず、スマホをいじっていたのに衝撃を受けた。大量のボダボダは車の行く手を阻み渋滞を悪化させる。また、ウガンダでは環状交差点がよくあった。これは、交通量が少ない都市ではとても有効だが、交通量が多すぎるウガンダではかえって渋滞を生んでいた。一度入ると、車がひしめき合い、抜けだすときは無理やり、という言葉が正しいようなものだった。ここでも車の間をすり抜けようとするボダボダがたくさんあり、とても危険だった。日本では車の死角に入らないようになどあるが、そんなことはボダボダには関係なかった。ウガンダでは多くのマタツ（ワゴン車タイプの乗合いタクシー）も渋滞を作っていた。渋滞の時はもちろん、普段バスで市内を走っているときに感じたのは空気の汚さだ。最初は窓を開けていても市内に入るとたんに空気が悪くなるので、みんな一斉に窓を閉めた。私はこの空気の悪さが気になり、最終プレゼンテーションで大気汚染を取り上げることにした。この次からは私がプレゼンテーションで話した内容を書こうと思う。



3. プレゼンテーション

私はまず、ウガンダの大気汚染の現状について知ることからはじめた。JICAによると、カンパラ市のPM2.5の濃度はWHOの基準の6倍以上を占めている。また、ウガンダの丘が多い地形が空気を閉じ込め、大気汚染を深刻化させているという話も聞いた。私が今回プレゼンテーションをするにあたって利用したのは、世界の大気汚染をリアルタイムで測定し公表しているサイトだ。リアルタイム汚染度の指標とされているのはAQIスケールだ。AQI（大気汚染度指数）は、粒子状物質（PM2.5 およびPM10）、オゾン（O3）、二酸化窒素（NO2）、二酸化硫黄（SO2）および一酸化炭素（CO）排出物の測定値に基づいている。測定値は0～500の指数で表されており、6つの健康影響のカテゴリに分けられる。0～50（緑）…良い、50～100（黄色）…中程度、100～150（橙）…健康に悪い（過敏グループの場合）、150～200（赤）…不健康、200～300（紫）…非常に健康に悪い、300～500（黒）…危険な、とされている。150以上のレベルになると喘息などの呼吸疾患を有する人々は長時間の運動を避けなければならない、200以上の非常に健康に悪いレベルに達するとすべての人が野外活動を避けたほうがよい状況になる。ウガンダに注目しよう。写真1は、3月18日水曜日、朝8時のデータだ。見たらわかるようにウガンダは赤の不健康なレベルが多く、中には最も危険な黒色のレベルに達している部分もある。これだけで、ウガンダの大気汚染の汚染度が高いことが見て取れると思う。今回はこのデータの中から、カンパラにあるアメリカ大使館でとられた大気汚染データを使い、話を進めていく。

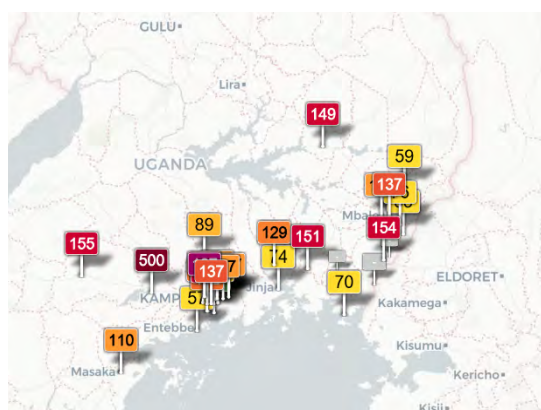


写真1

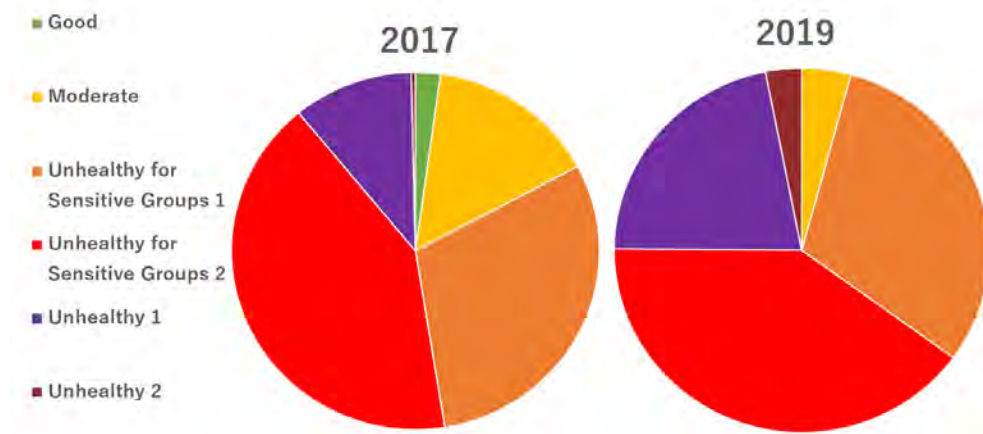


図1 一年間の各大気汚染レベルの一日の平均比率

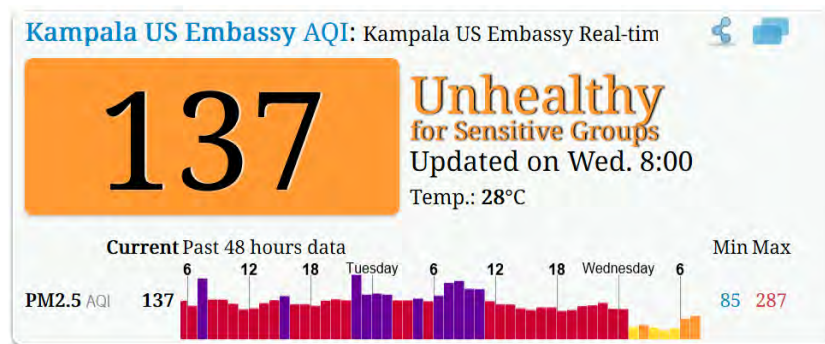


図2 3月18日水曜日午前8時から48時間の大气汚染レベル

私がまず注目したのは大気汚染度がここ数年でどのように変化しているかだ。図1の円グラフは、2017年と2019年の一年間の各大気汚染レベルの一日の平均の比率を示している。先ほど説明した大気汚染レベルのうちの健康に悪い（過敏グループの場合）と不健康のレベルが多かったためどちらも2つに分けた。円グラフを比較していただければわかる通り、緑や黄色の部分が減少し、赤や紫の部分が大幅に増えているのが分かる。ここから、大気汚染が二年間でひどくなったことが読み取れる。ひどくても、不健康というレベルでとどまっているため、大気汚染度があまり高くないように感じてしまうが、忘れてはならないのは、このデータがあくまで一日の平均をもとにしているという点だ。つまり、交通量が少ない時間帯なども含まれた結果だ。それにもかかわらず、不健康というレベルに達することがあるカンパラの交通量の多さや、空気がどれほど汚染されているか考えると恐ろしい。次に私が注目したのは一日あたりの大気汚染レベルの変化だ。この図2はデータを取った3月18日水曜日午前8時からさかのぼること48時間の大気汚染レベルの変化を表している。まずは全体の色を見てほしい。赤や紫がほとんどを占めているのが分かる。つまり、不健康、非常に健康に悪い、のレベルだ。次に時間帯に注目してほしい。図2の紫の非常に健康に悪い状態になっているのは、月曜から火曜にかけての夜遅い時間帯と火曜日の朝の時間帯だ。この時間帯は、帰宅・通勤ラッシュにより交通渋滞が起きやすい時間帯と一致する。このことから、交通渋滞と大気汚染は密接に関係していると推測できる。これは、水曜日のデータからも読み取れる。見てのとおり、水曜日は大気汚染のレベルが前2日間と比べ低いのが分かるだろう。これは、天気の影響だ。水曜日は晴れていたが、前2日間は雨だった。どうして大気汚染と天気が関連しているのだろうか。晴れの場合、人々は職場や学校まで徒歩で行くか、ボダボダを使用する人が多い。しかし、雨の日は歩いたり、ボダボダを使うと雨に濡れてし

まうため、人々は自分の車やマタツを使うことが多い。そのため、交通量が増え渋滞が起きやすくなる。そして、これによって大気汚染のレベルが上がってしまうのだ。

私は、これらのデータから大気汚染を改善するために2つの提案をした。1つ目は交通渋滞の改善だ。ずっと述べてきたように交通渋滞と大気汚染は密接に関係している。そのため交通渋滞を減らすことが大気汚染を改善する近道だと考えた。交通渋滞の改善のために私が提案したのは、大型バスの利用だ。日本ではごく普通に街を走っているバスだが、ウガンダではほとんど見かけなかった。大きくてもマタツ程度だ。もし、日本の市バスのような仕組みが導入されればたくさんの人々を一度に運ぶことができ、ボダボダやマタツの数が減り、渋滞が改善され则认为した。今考えてみると、市バスのような仕組みは新たな雇用を生むこともできるが、ボダボダの利用は減ってしまうため、それを収入源にしている人は職を失うことになってしまう。バイクは運転するのは簡単かもしれないが、バスを運転するにはバイク以上の運転技術が必要なうえ、あの交通量の中バスを運転するのは至難の業だ。2つ目に私が提案したのは、大気汚染について人々に知ってもらふことだ。私たちは比較的、空気がきれいな環境なところからウガンダを訪れたため、カンパラの空気はとても汚く、息苦しく感じた。しかし、現地の人々はその空気の中で生まれ育ち、日常的にその空気を吸っているため、多少汚いと感じていても私たちほど敏感ではないだろう。日常になりつつある大気汚染の現状や、いかに健康に悪いかをまずは知ってもらふことが大切だと思う。国民一人一人の少しの意識の変化が社会を変えるのだ。2つの提案をしたが、どちらも国や政府の協力が不可欠なものだ。ゴミの問題のところでも述べたが、結局は国が動くのが近道なのだ。しかし、これは同時に費用などの点から遠回りでもある。とても無力に感じる。

4. エコスマート

ウガンダで様々な施設を訪れた。企業の中で印象的だったのは、エコスマートという会社だ。この企業は女性の生理用品を開発している会社だ。ウガンダでは女性のドロップアウトが多い。これは、生理用品の値段が高く、手に入れることのできない女性が生理中、学校に通うことが難しくなるからである。この会社は、環境にやさしく、低コストの生理用品を開発することによって、女性の社会進出を手助けしようとしている会社だ。一般的な生理用品にはコットンが使用されているが、値段が高いため、コットンに代わるような、自然にやさしく、使いやすい材料を見つける必要があった。ソルガムやメイズなど様々な繊維を試したが、その中でサトウキビが一番適していたそう。使用するのはサトウキビを絞った後の皮だ。通常は廃棄される部分のため安く手に入る。これを粉碎し、黒くなるまで5時間かけて煮詰める。次にこれを白くするために6回かけて洗う。生理用品は清潔感が大事である。洗ったものにトイレットペーパーを2回に分けて混ぜる。このトイレットペーパーも、きれいなロールを作る際に切り落とした廃材を使うため安く手に入る。この混ぜたものを、木で作ったフレームに布を張ったものに厚さが均一になるように水の中で調整しながら、のせる。日本でいうと、和紙を作る工程とほぼ同じだと思ってもらふといい。フレームごと乾燥させ、紙のようになったところをもう一度粉碎する。この工程によってより肌触りがコットンに近くなるのだ。この繊維を機械にかけ成型する。表面に使うシートは中国からの輸入品だ。このシートを生姜の繊維から作ろうという話が持ち上がったこともあったが、しょうがの繊維は固い部分があり、生理用品に使うには危険と判断されたそう。



この会社にはいま直面している4つの問題がある。1つ目は機械の問題だ。私がこの会社で見た機械は小型のもので、日本の企業である「花王」から提供されたものもあった。機械があるといっても、人の手を使うものが多く、手作業の工程もある。そのため、どうしても生産に時間がかかってしまう。しかし、大型の機械を導入するには費用の問題はもちろん、電力の問題もある。

ウガンダの電力供給システムはとても安定しているとはいえず、一度に大きな電力を使うことはリスクを伴う。2つ目はサトウキビの皮の仕入れにある。この会社はウガンダの西部に位置しているが、仕入れ先はなんとそこから400キロも離れた東ウガンダの砂糖工場だった。5トンの廃材をトラックで一度に運ぶと、2,000,000UGX（約6万円）かかる。安い生理用品を作るにあたって、この出費は大きな痛手になる。3つ目は輸入しているシートに関する問題だ。現在コロナウイルスが流行しているため、中国の工場の生産がストップしていて、シートが手に入らないのだ。4つ目は支援に関する問題だ。エコスマートはまだウガンダ政府から直接支援を受けていない。スポンサー企業はいくつかあるが、花王は3月いっぱい契約が終わるなど、予算が足りないのが現状だ。今はまだ試験段階のため販売はしていない。どこに消費者がいて、どのようにして届けるか、市場調査をしている最中だ。販売価格の目標はひと箱1000UGX（約30円）である。もしこの価格が実現すれば、女性の社会進出の大きな助けとなるだろう。厳しい状況ではあるが、実際に女性に使ってもらい改善点を見つけ、パッケージもより手に取りやすいようにかわいくするなど、消費者優先、消費者目線を大切にしているところが印象に残った。

5. マケレレ大学の講義

このプログラムでは、マケレレ大学の先生のいくつか受ける機会があった。どれも興味深かったが、その中でも効果的なプレゼンテーションの講義を受けることができてとてもよかった。作り方の部分では、まずなぜプレゼンテーションをするのかを学んだ。なぜ作るのかについては考えてこなかったのが新鮮だった。聞き手を説得するためなのは予想がついたが、相手にインスパイアを与えるという視点はなかなか思いつかなかった。考えてみれば、人のプレゼンテーションを聞いているとき自分も無意識にいろんな刺激を受けているなと思い、不思議な気持ちになった。より良いものを作るには、不安をコントロールする、聞き手中心のものを作る、目的を達成する、自分と聞き手を楽しませる、時間を守る、の5つが大切だと知った。聞き手中心や時間を守るのは当たり前のことだが、不安のコントロールや楽しませるなど、精神面が大きく関わっているのが意外だった。プレゼンテーションは授業でやるが多かったのも、楽しませるという考えがあまりなかった。また、自分も楽しむことが大切だと聞いたのは驚いた。たしかに自分が話していてわくわくするものや、見ていて面白いと感じるプレゼンテーションを作らないとほかの人に楽しんでもらえない。プレゼンテーションを作る際、私はいつも内容ばかりを考えて作っていた。しかし、作る時にはいろんなことを最初に知る必要があると知った。ここでも聞き手を知ることが大事と先生がおっしゃっていた。何人いるかななどの基本情報だけでなく、相手の知識レベルやなぜその場に出席しているかなど深いところまで考えないといけないと学んだ。聞き手がいかにプレゼンテーションにおいて大切か感じた。聞き手重視という面では他に導入の大切さを学んだ。最初の挨拶や自己紹介の時にいかに短時間で自身のことを知ってもらい、好感を持ってもらえるかが大切だと。人は好きな人の話は聞く、と聞いてとても納得した。ユーモアを交えたり、小話を入れるのは、少しハードルが高いが、笑顔であいさつなどすぐ始められるものもあり、参考になった。話す際のふるまいも重要だ。前を見るのはもちろんだが、適度な身振り手振りをしたり、笑顔で話したりが挙げられる。私が聞いていて意外だったのは、適度に歩くことだ。棒立ちはもちろんよくないのは分かるが、歩くという発想が今までなかった。もちろん歩きすぎは良くないが、少し歩くことで、自分自身をリラックスさせる効果があるほか、相手に固まった印象をあたえない。この講義では見やすいプレゼンテーションの作り方についても学習した。人の視線の移動や、見やすい色味、デザイン、文字の大きさなどだ。とても具体的に話して下さったので、最終プレゼンテーションの時に実践しやすかった。

私がプレゼンテーションで最も苦手なのは質疑応答の時間だ。今回最終プレゼンテーションをして、また、ほかの人にも聞いていて思ったのは、プレゼンテーションを作る際に自分の意見を持つことが何よりも大切だということだ。多くの質問は知識の部分ではなく、本人の考えについてのものが多かった。プレゼンテーションを作る際に自分の考えを持たず、調べた情報に頼って

しまうと、質疑応答に対応できないし、効果的なプレゼンテーションができるとは思えない。質疑応答の際に、もう一つ大事な点は、自分に素直になることだ。大学でのプレゼンテーションは先輩や教授に向けてする機会が多々ある。その人たちは、自分よりもたくさんの知識や深い考えを持っており、時には問題点を指摘されたり、予想外の質問をされたりすることがあるだろう。その時にうろたえるのではなく、正直にわかりませんと言う勇気が大切である。もちろんすぐにあきらめるのは良くないが、自分に正直になることはとても大切である。この講義は私のプレゼンテーションに対する考え方を大きく変えてくれた。最終プレゼンテーションの時、教わったことをいくつも取り入れたことで、自然と自分のプレゼンテーションに自信を持つことができた。これから、プレゼンテーションする機会は増えるばかりで、不安や苦手意識がまだあるが、今回の講義でその奥深さを知ることができたのでより、効果的なプレゼンテーションを作ることができるように頑張りたい。講義の内容をどれだけこれから継続して実践できるかは分からないが、メモに残して、プレゼンテーションを作る際は意識して活用したい。

6. 多くの人との出会い

冒頭、私はこのプログラムに参加できてよかったと述べたが、その一番の理由は多くの人との出会いにある。ケネディセカンダリースクールでは、多くの子供たちと話した。みんな笑顔がかわいくて、たくさん話しかけてくれて、とても幸せな時間だった。ただ、一つ驚いたのが、子供たちが質問してくる内容だ。私の学部や将来の夢、日本の大統領などについて質問された。日本の食事など簡単な質問を予想していたので驚いた。隣の子は、小説を持っていて、内容を尋ねると、政治の話だった。ウガンダの子供たちは本当に勉強熱心だと思った。私は大学生だが、外国人にいきなり大統領を尋ねようとも思わない。将来の夢を子供たちは一人一人持っていて、目がキラキラして見えた。



このプログラムに共に参加した日本人メンバーとの出会いも私にとって、とても大切なものになった。私は参加前からの友達が多く、最初のほうは同じようなメンバーとばかり行動していた。だんだん、他の人達とも打ち解けていった。ウガンダでは楽しいことだけでなく、予想外の出来事もたくさんあった。同じ状況に立たされていても考え方の違いから、相手をよく思わないことも時々あった。だが、一緒に過ごす時間が長くなればなるほど相手のことを受け入れられるようになった。終わる頃には仲がとてもよくなった。短い大学生活の中で、私にとってとても大切な人間関係ができた。

私はまだ将来やりたいことが分からない。メンバーの中には好きなことや研究したいことがある人や、将来をととても細かく考えている人もいた。最初はその人たちの話を聞くと焦りばかり感じていた。でも、約3週間半の間に、たくさんの新しい景色を見て、些細なことでも意見を共有し、共感しあったことで多くの考え方に触れることができ、自然と自分の視野が広がったように思う。将来やりたいことはまだ見つかっていないが、面白そうだなと感じることや、自分なりの考えを持つことが増えた気がする。

多くの人と出会った中で、TAさんたちの存在が一番大きかった。初めての体験ばかりで不安なこともあったが、ずっとそばにいて助けてくれた。うまく英語が理解できない時も嫌な顔ひとつせず、分かるまで何度も説明してくれた。私たちが気持ちよく過ごせるように時間を守ってくれた。家が遠くて私たちより何時間も早く起きる大変な生活を送っていたのにも関わらず、朝会うと笑顔で話しかけてくれた。ウガンダのマナーを知らずに、食事中、会話してしまっていたが、何も言わずに受け入れてくれていた。今述べたことはTAさんが私たちにしてくれたことのほんの一部分でしかない。言葉では言い表せないほど感謝している。

TAさんたちはマケレレ大学という名門に通っているのもあり、知識量がすごかった。それぞ

れ専門分野があるはずだが、どの分野の質問をしても簡単に答えが返ってくる。ウガンダのことについての質問をすることが多かったが、どの TA さんもとても楽しそうに話していたのが印象的だった。ウガンダのことが好きということがとても伝わってきた。私は、日本の国の政治や経済について質問されてもまともに答えることができないと思う。もっと自分の国を知らなきゃなと思った。また、知識だけでなくその考え方にも驚いた。日本の大学では基本生徒は受け身の状態だが、ウガンダでの授業では、講義中に先生が投げかけた質問に答えるだけでなく、生徒が自ら意見を積極的に発言していた。そして、いいことや共感できることを述べた人がいたら、みんなで拍手を送る。参加していてとても面白い授業だったし、自分で考える力も付いた。そんな授業を当たり前を受けているからなのか、将来の夢もすごかった。院では学部と違うことを学び、お金がたまったら子供たちのための施設を建てたいと言っていた。いろんなことを貪欲に学ぼうとする姿勢や目標を実行に移したいという思いに心打たれた。とても同い年とは思えなかった。私もなにか夢中になれるものや目標を見つけないかと思った。TA さんたちとの交流は、私にいい刺激とたくさんの思い出を残してくれた。国や文化、宗教が違って、理解し合える、大切な友達だ。

7. 最後に

最後に、ウガンダまでついてきてくださった安藤先生、蕪木先生、このプログラムを企画し支えていただいた、鳥取大学、マケレレ大学の先生方、このプログラムへの参加を許してくれた両親、ともに 3 週間過ごした日本人メンバー、TA さんたちに心から感謝したい。このプログラムでの貴重な経験をこれからの大学生活に活かしていきたい。

ウガンダ実践教育を通して

農学部生命環境農学科 1 年
宮田 和瑚

目次

1. 参加動機
2. ウガンダのイメージと現状
3. プレゼン内容－経済的問題点と解決策の提案
4. 解決策の提案 2
5. 日本とウガンダの経済格差
6. ウガンダに見習うべきだと思ったこと
7. エコスマートを訪問して
8. プログラムを通して

1. 参加動機

私が今回、実践プログラムに申し込んだ理由は 2 つある。1 つ目はこの研修を通して将来を考えられたらいいなと思ったからだ。私は小さいころから親が国際交流を大事にしていることもあり、いろいろな国の人と出会ってきた。その中でも小学校 3 年生の時に会ったモンゴル人の女子高校生がきっかけで国際協力に興味を持った。なぜなら、その人が途上国と先進国というものがあること、日本は恵まれているということを教えてくれたからである。この時から私の夢はずっと貧しい国を支援することである。しかし、どうやって支援を行うのか、どういう支援が本当に必要なかわからず、国際支援をしたいと言いつつも具体的に何をしたいのか決まらず、何となく農学部に入ってしまった。だからこそ、大学 1 年生という早いうちに将来を考える必要があるなと思っていた。今までも将来何がしたいのか考えるために途上国を訪れボランティア活動を行ったことは何度かある。しかし、アフリカは旅行では行ってもその地域に住んでいる人と直接関わることはなかった。そのため今回のウガンダ研修は私の将来を決めるのに役立ちそうだった。2 つ目は視野を広げられたらいいなと思ったからだ。今までいろいろな国に行き、そのたびに日本の常識では考えられない様な文化に出会ってショックを受けたり、新しい気付きを得られたり、日本人にはない心の豊かさに出会ったりしたので、大学生のうちにもっとたくさんの国に行き視野を広げたいと思っていた。

2. ウガンダのイメージと現状

ウガンダに着いて思ったことは、予想よりはるかに発展しているということだ。アフリカといえば壊れそうな車に赤土の舗装されていない道路、家は土と藁で大家族というイメージだった。しかし、実際はきれいな舗装された道路に、今でも日本で走っているような車で、家も日本とあまり変わらないんじゃないかなと思うくらい立派なものでイメージとの差に驚いた。また、ホテルもクーラーが効いていてお湯も出るし、水も透明でエントランスもソファや机があってとてもきれいだった。着



いた日のウガンダに対しての印象は思っていたより裕福な国というものだった。しかし、経済の授業で数値的に経済状況を習い、GDP の低さなどの経済状況に驚かされた。日本に比べると 70 分の 1 ほどしか GDP がなく、1 か月あたり一人 6000 円にも届いていなかった。工事もたくさんしているのになぜなのか不思議に思った。また、一日 1.90 ドル未満で暮らしている人が多くいる

ことにも驚いた。農業に従事している人口は70%を超えるのに、農業の占めるGDPが24%しかないことはとても不思議に思った。残りの30%に満たない人で、GDPの75%を賄うことになる。農家さんの収入はいったいどの程度なのか気になった。一方で人口増加をしていて水資源があり自然条件に恵まれていて、経済成長率が大きい。国が経済成長をする条件も割とそろっているのではないかと思った。そこで私はウガンダの経済に興味を持ち、この留学期間、経済的な問題を探してみた。

カンパラでは、基本道路は整備されていて家や車もきれいなものが多い。一方で、NaCRRRIに行った際には、赤土むき出しのボコボコな道路で、バスでぼこぼこ道を通ると飛ぶことも何度かあった。道路が舗装されていないためバスの窓を開けると白いTシャツが茶色になった。



車も少なくカンパラのような渋滞はなかった。町から少し離れた場所に住んでいる人たちは、車やバイクを持っていないため農作物を町に持って行って売ることができず、見に来たエージェン트가買っていくため安く買われている可能性があると言っておられた。その地域の家はウガンダミュージアムで見たような土と藁で作られた昔ながらの家だった。日本では東京でも鳥取でも同じように舗装された道路で、家も同じようなものである。ウガンダは都市部と農村部で収入に格差があるという話は聞いていたが、道路や家までこんなに違うのかと驚いた。

一番衝撃を受けたのは、NaCRRRI であがった農村の人たちが英語を話せなかったことだ。ウガンダは公用語が英語なので、みんな話せるものだと思っていた。TAさんもウガンダでは小学生の時から授業は英語だと言っていた。そのため英語が話せない人たちは小学校に行けていなかったのかなと思った。農村部では農業を手伝うため学校へ行けない子供たちがいるというのを本で読んだことがあったので、そういったお手伝いのために学校へ行けなかったのかなと感じた。カンパラで出会ったマケレレ大学の生徒やケネディーセカンダリースクールの子供たちは、自分たちの国に対してとても詳しくて自分の専攻はもちろん専門外のことも質問したらわかりやすく教えてくれて、夢も持っていて賢い人たちがばかりだった。そういった私たちみたいな先進国から来た人たちよりもはるかに知識がある人たちがいる一方、公用語も話せない人たちがいるというのは都市部と農村部で大きな格差があるのだとショックを受けた。都市部と農村部で収入に2倍の差があると習ったが、こういう教育の機会の差も関係しているのだろうと感じた。



また、マーチソンフォールズ国立公園に行った際、バスから窓の外を見ていた。行きの道は一応舗装されている場所もあったが歩道のほうはガタガタで、道のわきにはゴミが大量に捨てられていた。家もカンパラのようにコンクリート造りでないものも多くあった。帰りの道はと



てもきれいだった。しかし、WFPのトラックが止まっていたり、水を汲みに行っている子供たちがいたり、頭にバナナなどを乗せて歩いている女性たちがいた。観光客が来る場所だからか道路

はきれいだったため、つつい発展している場所と勘違いしてしまっていたが国連の車を見てこの地域は貧困の人が多いのかも知れないということに気づかされた。

3. プレゼン内容－経済的問題点と解決策の提案

私はウガンダで滞在期間、経済問題に注目し調べ、特に問題だと思ったことが3つある。1つ目はGDPの低さである。ウガンダのGDPは307.7億米ドルで1人当たり約1か月6000円にも満たない。マケレレ大学の経済学の先生は日本で私たちの親が私たちに使っている金額がウガンダの大学の先生の給料と変わらないとも言っていた。また、ただGDPが低いのではなく、大きな格差があるうえでこのGDPの低さであるということが問題であると思った。男女で約2倍の差があり、農村部と都市部でも約2倍の差があると習った。GDPを収入として考えるとすると、単純計算で月2000円以下で暮らしている人がいるということになる。これと関係して問題だと思ったことが2つ目の問題である。

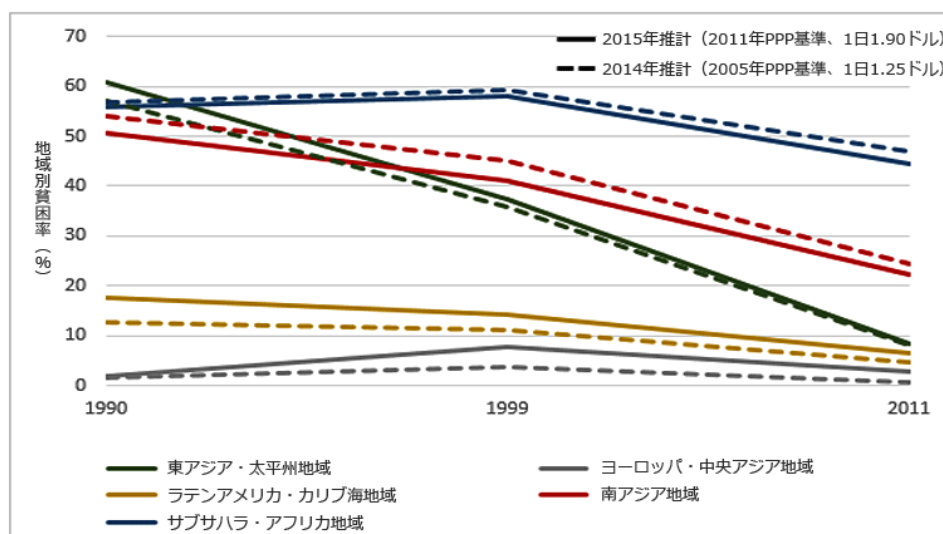


図 新旧国際貧困ラインを用いた各地域の貧困率比較
<https://www.ganas.or.jp/press/20151016po>

2つ目は1日1.90米ドル未満で暮らしている人がいるということである。この1.90米ドル未満というのは国際貧困ラインである。この国際貧困ライン未満で暮らしている人がウガンダには約1480万人いる。これは人口の約3分の1である。サブサハラ地域で見ると低いように感じるが、サブサハラ地域を除けばほとんどのところが10%以下で多いところでも20%以下である。そのため3分の1というのはとても高い貧困率であることが分かる。

3つ目は就職難である。ウガンダは日本と反対に人口が増え続けており平均年齢は10代である。それもあり就職が難しいという話を聞いた。マケレレ大学は日本でいう東大という話を聞いたが、マケレレ大学を卒業しても就職できない人がたくさんいると聞いた。日本では求人倍率が約1.5倍であり高卒でも何かしらの就職先は確保されている。まして東大卒なら大手企業にだって就職できる。もし、世界中のどこ

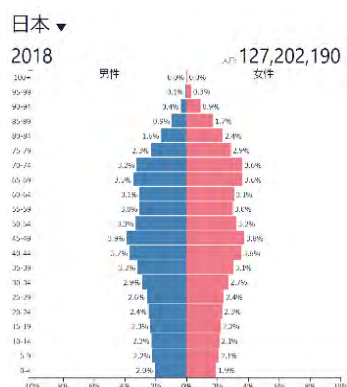


図 日本の人口ピラミッド
<https://www.populationpyramid.net/ja/日本/>

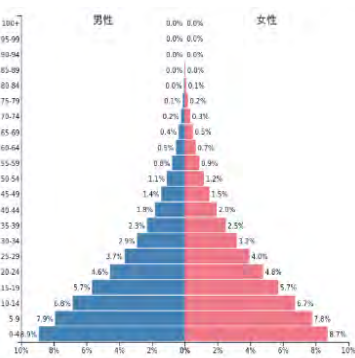
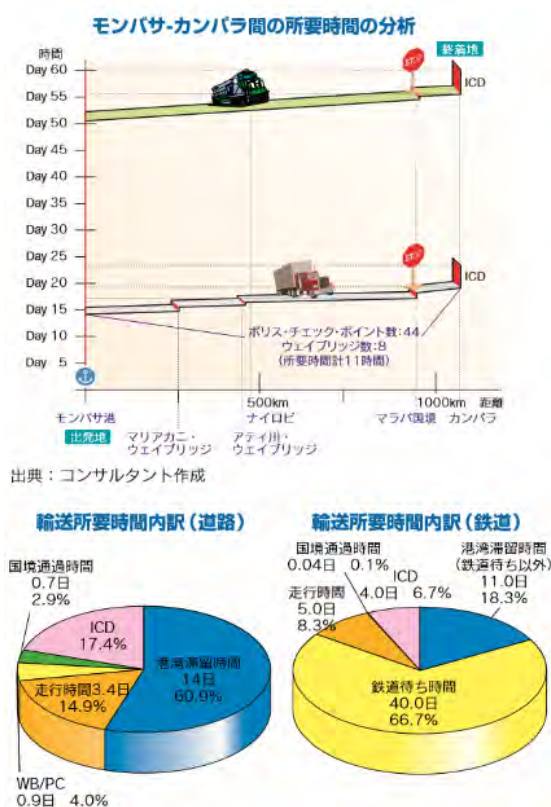


図 ウガンダの人口ピラミッド
<https://www.populationpyramid.net/ja/ウガンダ/2018/>

でも同じ条件で就職出来たら知識もあるし、いい職業に就けるだろうなと思った。一方で日本人はそうなったとき本当に知識のある人たちに負けそうだなと思った。また、この就職難が貧困を生むだろうなと感じた。就職率が上がったなら国際貧困ライン未満で暮らす人の人口はぐっと下がると思う。

これらの問題を解決するために必要だと思ったことは、雇用の増大と単価を上げることである。若い人が多く働き手が多いというのは、国が成長するのに有利だと思ったのにそれを最大限に生かせていないのはもったいないと思った。もし、もっとたくさん就職先があれば国の GDP は上がり貧困も減るのではないかな。また、農作物は1つ1つがとても安い。もっと高く売ることができたら第一次産業の生み出す GDP は上がり、現在所得の少ない農家さんの収入も上がるのではないかな。では、どのように雇を増大させ物の単価を上げればいいのか。私は貿易をもっと盛んにすることが大切だと考える。ウガンダはアフリカでは珍しく、ビクトリア湖のおかげで水が豊富にあるため農作物を育てることが出来る。また、もともと金や銀などといった資源も多い。このようにウガンダは土地のポテンシャルが高い。そのため貿易においてもポテンシャルが高いのではないかなと思った。実際、私はウガンダに滞在しているとき、ウガンダの農作物は物価が安く、日本では取れないものが多いかったのも、もし輸送にお金がかからなかったら、日本とか色々な国でもっと高くたくさん買われるだろうなと思ったことが何度かあった。例えば、パイナップルである。日本はなかなかパイナップルが取れないため値段が高いが需要はある。一方でウガンダではたくさんパイナップルがあり大量に安く売られている。もし輸送にお金がかからなかったら日本では3倍以上の値段で売れ、パイナップルを育てている人の収入も増えて日本人も今まで以上に安くおいしいパイナップルを手に入れられてお互いにとってプラスなのにと考えた。貿易を盛んにすることで考えられるメリットとしては GDP の向上、外貨を手に入れることが出来る、雇用が生まれる、といったことが考えられる。しかし、ウガンダが貿易を行うには2つ問題があると私は思う。一つ目はウガンダが内陸国であるため輸送コストが高いということ。二つ目は、ウガンダは1次産業が中心のため長い輸送時間に耐えられないものが多いということである。

現在輸入、輸出にどの程度お金がかかっているのだろうか。物の値段のうち平均して鉄道では48.8%、陸路では68.3%がケニアのモンバサ港とカンパラ間の輸送コストであるというデータがあった。この費用をおさえることができたなら、輸入品がもっと安く消費者のもとに届き、また安く輸出することでもっと多くの需要が生まれてたくさん物を売ることができ収入の向上につながると私は思う。その中でも私は今回鉄道に注目した。なぜなら現在、鉄道のほうが道路での輸送に比べ半分の値段で輸送ができているからだ。また、今は鉄道の方が時間がかかっているが、鉄道の整備を行いもっとスピードが出せるようになれば鉄道の方が早くたくさんの荷物が運べるようになるポテンシャルを秘めていると思う。鉄道を使う問題としては、現在も鉄道はあるがまともに機能していないことだ。軌道確保のため平均して時速10km程度しか出せない。また、容量不足により鉄道積み込み待ち時間が長く港に40日間停滞することもある。そのため現在鉄道輸送にはモンバサ港とカンパラ間で約60日かかっている。このような問題が解決すれば今まで以上に早く安くたくさんもの

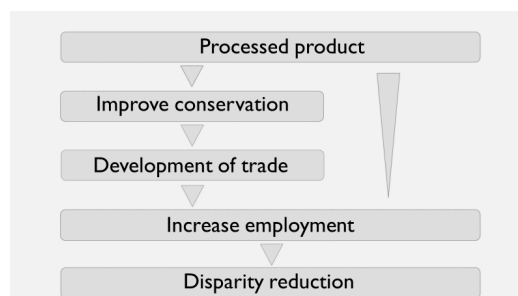


<https://www.jica.go.jp/activities/issues1>

を輸入、輸出できるのではないか。しかし鉄道の民営化がすすめられているため鉄道の整備が厳しいことも事実である。そのため政府も補助金を出すなどといった支援を行い、官民連携をするべきだと感じた。

4. 解決策の提案 2

今回発表はしなかったが輸出するものについてもプレゼンを作るうえで考えた。なぜなら輸出する品目としては、長い輸送時間に耐えられるものでないといけない。しかし、ウガンダは一次産業が中心のため保存がそんなにきかない農作物の生産が多い。そこで私は何を輸出すればいいのか、海外で需要がありウガンダで生産され保存がきくものはあるのか疑問に思った。現在ウガンダが輸出している

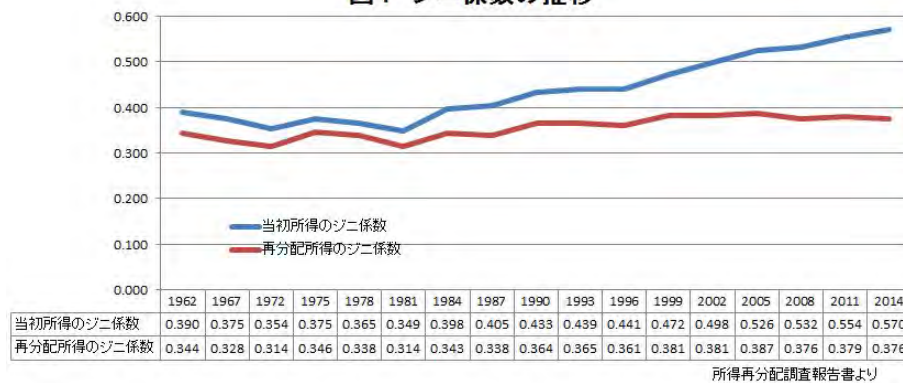


主な品目はコーヒー豆や乾燥させた魚、カカオである。でもこれだけでは限りがある。私が輸出に提案したいのはお米と加工品である。お米は現在パキスタンなど外国から輸入をしている状態で自国の分も賄えていない。しかしお米は周辺国でも不足しており需要が高い。また、粳の状態置いておけばお米は長期保存をすることができる。お米は庭先でも栽培可能で、バナナなどを植えてできる隙間でも栽培できるという話を聞いた。もっと今まで以上に収量をあげることは可能であると私は思った。ウガンダにはお米が育つ環境があるので今以上にお米の生産を増やし国の分のお米を賄えるようになったら周辺国へ輸出すればいいと思う。しかし、アジアはお米を自分の国で育てることができるため輸入をする必要がない。そこで提案するのがジャムやドライフルーツといった加工品である。先に記述したように私はパイナップルに魅力を感じた。パイナップルのような南国のフルーツは日本のような場所では採れない。そういった国をターゲットに南国フルーツを使った加工品を輸出するのがいいと思った。ジャムやドライフルーツにすることで普通に果物をそのまま売るよりも高く売れる。また、加工品にすることで商品のサイズも小さくなり輸送コストも減らすことができる。何より加工することで保存性が上がり、長い輸送時間に耐えられるものとなる。例えば瓶詰めのジャムの場合、高糖度のものなら2年ほどもつといわれている。また一次産業で終わらすのではなく、二次産業、三次産業へと発展させることで雇用も生まれる。就職難の解決や、GDPの向上にもつながるのではないか。最初に述べたように、農業従事者は人口の70%を超えるのに農業の占めるGDPが24%しかない。つまり農家さんの生み出すお金は一人当たりとても少なく、2次産業や3次産業の生み出すGDPが高いことになる。私はこの2次産業や3次産業をもっと発展させることで国のGDPが上がると思った。

5. 日本とウガンダの経済格差

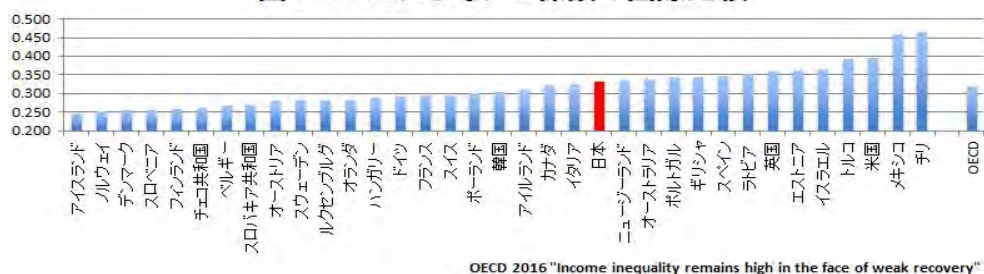
今回、ウガンダの経済の今日を調べる際、日本についても調べてみた。すると日本の経済にも問題があるということが分かった。一番驚いたのは格差がでかいことだ。日本のジニ係数は0.335であった。ウガンダは0.376で日本よりも悪かったが正直ウガンダより日本のジニ係数にショックを受けた。なぜなら、就職難で1日に1.90米ドル未満で暮らしている人がたくさんいるとか、都会と田舎で収入が2倍違うとか、政府がいっぱいお金を持っているとか習ったウガンダと、あまりジニ係数が変わらないからだ。確かに日本にはとびぬけたお金持ちがいる。そういう人がジニ係数を引き上げているだけなのか。それとも貧困で困っている人がいるのか。日本の現状が気になったので少し調べてみた。すると驚いたことに日本のジニ係数は右肩上がりであった。しかし再配分所得は0.4を超えないようにキープしている。税金や社会保障が大きな役割をしていることが分かった。

図1 ジニ係数の推移



https://www.es-inc.jp/graphs/2017/grh_id 2

図2 OECDによるジニ係数の国際比較



https://www.es-inc.jp/graphs/2017/grh_id 1

一方で日本のジニ係数は OECD 平均よりも高い。つまり先進国の中では格差が大きいほうである。このグラフを見ると北欧のジニ係数が低く、アメリカが高い。つまりこのグラフからも税金や社会保障が格差を減らすのにどれほど重要かが分かる。社会保障や税金の仕組みが整っている北欧はジニ係数が 0.25 にもっていないのに対し、政府が個人にあまり干渉せず国として行う保険制度などが乏しいアメリカではジニ係数が 4.0 近い。また、日本ではひとり親世帯を中心に相対的貧困の中で生活をしている人が多くいることが分かった。なんと、ひとり親世帯の貧困率は OECD 加盟国でワースト 1 位である。私はもっとと社会保障の仕組みがしっかりする必要があると感じた。それはウガンダに対しても同じである。ムバララ病院に行った際、ウガンダの保険の仕組みについて尋ねてみた。すると国の保険制度はなく個人で保険に入っている。しかし、国立の病院は無料であると言っておられた。最初は病院が無料なら貧しい人でも行けるしいいじゃんと思っていた。しかし、病院を見学し話を聞いていると問題点も見えてきた。一つ目は、国立病院は診察が無料なためたくさん人がやってくること。人がたくさん来るため医師や看護師が不足し診察の待ち時間が長くなってしまふ。また、人が多いためベッドが不足し床で寝ないといけない妊婦さんがいたり、ベッドが近いために院内感染が起りやすかったりする。病気で苦しんでいるのに長い待ち時間に耐えなければならなかったり、産後すぐに退院させられてしまったり、病院に治療に来ているはずなのに逆に感染症にかかってしまうのは問題だと思う。お金を持っている人は私立病院に行けるため待ち時間が短く入院環境も整っている。お金を払っているのだから当然なのかもしれないが、お金がない人たちにもそのような整った医療環境が与えられるべきだと思った。二つ目は国からの支給が少ないため薬やガーゼなどはなくなったら町の薬局で買わないといけないことである。国からの物資が不足すれば自分で買わないといけないというのは、お金がない人たちに不利だと思った。日本の無料定額診療のようにお金がある人は医療費を払い、金銭的弱者の人たちが優先して無料で診てもらえる仕組みのほうがいいのではないかと思った。国立病院は診察が無料というのは最初魅力的に感じたが、考えてみるとお金がある人も無料で診

てもらえるかわりに、本当にお金がない人が薬などを手に入れられないこともある。そう考えると日本のような仕組みのほうがいいのではないかと感じるようになった。

6. ウガンダに見習うべきだと思ったこと

今回ウガンダに行って、日本もウガンダに見習うべきだと思ったことがある。それはジェンダーに対してである。ウガンダにはジェンダー大臣のような人がおり、レディースデイもあると聞いた。日本は男女格差をあまり感じる機会はないが先進国の中で圧倒的に下位にあり、世界経済フォーラムによると 2018 年には 149 か国中 110 位となっている。ウガンダも賃金格差など男女格差が残っているがその問題を解決しようとしている。日本にも男女格差をなくすための法律は存在するがまだまだ政治などリーダー的な役割は男性が多いように感じる。ウガンダを見習ってジェンダー大臣のようなものを設け、もっと男女格差是正をやっていくべきだと思った。

7. エコスマートを訪問して

私が今回訪問した場所で一番すごいなと思った企業はエコスマートだ。エコスマートは、サトウキビを絞りジュースを抜いて出た残渣の繊維を使って生理用品を作っている企業だ。ウガンダでは生理用品がとても高くてなかなか買えない。そのため恥ずかしくて学校へ行けずドロップアウトしてしまう子がいる。また、生理用品の代わりに使い古した布の切れ端や植物の葉を使い、深刻な感染症にかかっている人もいる。そういう人たちに低価格で生理用品を提供できるというのは、とても国の将来のためにもいいことだと思った。また、サトウキビの繊維を使うことで自然にやさしく再生可能なものが作れている。物が十分にありお金もある日本も見習う必要があるのではないかと感じた。エコスマートの人に問題点を尋ねると、機械が人の手を使うため時間がかかり 1 日に 60 枚しか作れないこと、サトウキビを 400 km 離れた場所から運んでくるため輸送コストが高いこと、ウガンダ政府からの金銭面での援助が少なく、ほかの企業との契約期間も終わってしまうため資金調達が困難なことをあげていた。1 つ目の時間がかかるという問題は、日本の技術で何とかかなりそうだと感じた。2 つ目の輸送コストの問題は、近くに自分たちでサトウキビ畑を作ったらいいと思った。初期費用が掛かるため現実的に考えると厳しいかもしれないが、自分たちで畑を持つことで砂糖を作るジュースも収穫でき、別の収入も入ることになるので、長い目で見ればいいと思った。3 つ目の金銭的な問題は、クラウドファンディングしたらいいと思った。私はこの企業の説明を受けてとてもいいことをしていると思ったし、もっと広まるべきだと感じた。今は学生でお金がないから支援することはできないが、もしお金があったなら、是非支援をしたいと思った。きっとそう思う人は他にもたくさんいると思う。クラウドファンディングを行うことで金銭面の支援を受けられるだけでなく、この活動も知ってもらえる。活動が知ってもらえることでもっと世界的にこの活動が広がり、大きな企業からも援助を受けられる可能性があると思った。もうすぐ契約期間が終わってしまうため活動を続けられるかわからないと言っておられたが、もし本当に活動が終わってしまったらもったいないと思う。ぜひ、どうか資金調達を行って、活動を続け大きな企業になってこの活動を世界的に広げてほしいと思った。



8. プログラムを通して

今回のプログラムに参加して自分自身成長したなと思うことがある。それは、人前で話すこと

に対する抵抗が減ったことだ。私はもともと人見知りで大学に入った時も自分からはなかなか話しかけられないし相手に話しかけてもらっても「うん」とかしか答えられずなかなか友達ができなかった。そのため今回も TA さんたちと話せるか行く前から一番の心配事だった。しかし、TA さんがフレンドリーだったこともあり 1 週間もすれば苦手な英語で自分からコミュニケーションをとるようになっていた。もちろん伝えたいことがなかなか伝えられなかったり相手が行っていることが聞き取れなかったり悔しい思いは何度かした。しかし、相手が頑張って理解しようとしてくれたのがとてもうれしかった。この経験が、もっと英語を話せるようになりたいという、日本に帰ってからの英語の勉強に対するモチベーションにつながっている。また今回のプログラムに参加する上で自分の中で目標を決めていた。それは 1 つの機関または 1 つの授業でそれぞれ一回は質問をするということである。人と話すことさえ避けてきた私は人前で質問することなんて今までほとんどなかった。



まして人前で苦手な英語で質問するなんて考えられなかった。しかし今回、半強制的にでも質問をすることで気になっていたことが知れたのは事実だし、英語が分からなくて知っている単語を並べただけの質問にも、頑張って理解して答えようとしてくれる人ばかりでうれしい気持ちになった。また TA さんは疑問に思ったことに対してすぐに質問をされていて、海外ではこれが普通で、質問をなかなかしない日本人のほうが変わっているのかもしれないと改めて感じた。質問をすることで分からなかったことが分かるようになるだけではなく、お話をしてくださった人に対して、しっかりと話を聞いていたアピールにもなりいい関係を築くのに大切なことだと感じた。今回の経験で質問をすることに対するハードルは下がり、人前で英語を話すことに対する抵抗もなくなった。また、質問をするメリットも新たに見つけることができた。今後の課題としては、あまり質問をしない環境の日本でも疑問に思ったことは質問すること、もっと英語を頑張って国の異なる人とのコミュニケーションを円滑に行えるようになることだ。そのためにも英語の勉強を今まで以上に頑張りたいと思う。今までは文法問題みたいにテストに向けた勉強しかやってなかったが、今後は話す練習や聞く練習をもっとしていきたいと思う。

ウガンダで聞いた話でとても印象的で素敵だと思ったことがある。それは、タンザニアやコンゴからの難民に対しての対応である。ムバララの病院に行った際、国境からコンゴ難民がたくさんやってくるという話を聞いた。ムバララ病院では医師や看護師のため診察の待ち時間が長かったり、ベッド数が不足しているため床で寝ないといけない妊婦さんがいたりするという話を聞いた。それなのに国民と同じように難民を受け入れて国民から文句とか出ないのか疑問に思った。私は日本という島国に住んでいるので難民が自国に入ってくることに対して何もわからないが、欧米で難民排除の動きがあるなかウガンダではどうなのか気になって質問してみた。すると意外なことに、文句は今まで聞いたことがないという回答であった。さらに驚いたことに、難民キャンプで病気になった人を病院まで連れてきて送るシステムや、難民キャンプで働く人を育てる仕組みまでであると言っておられた。詳しく聞いてみると、もともと国境は自分たちが引いたものではないためウガンダ人、コンゴ人という概念があまりなく、みんな平等という考えなのだと聞いた。病院のスタッフもいろいろな部族出身でコンゴと同じ部族出身の人もいると言っておられた。私はこの話を聞いてとても温かい気持ちになった。日本のテレビでは欧米の難民排除のことばかりなので、こういう難民に対する考えもあるということをもっと広めてほしいと思った。

今回のプログラムを通して、百聞は一見にしかず、という言葉があるが本当にそうだなと思った。今までアフリカをひとまとまりにして考えていた。アフリカといえば赤土に貧困で困っている人たちが多く、子供たちは学校へ行けていないみたいなイメージを抱いていた。しかし実際はとてもきれいな街並みでおしゃれなカフェやきれいなモールもあり、出会った人たちは私よりも

はるかに知識を持っていた。アフリカを1つとして考えていた私はもちろんウガンダも1つとして考えていた。カンパラだけ見て「あ、ウガンダって発展しているんだ」と思っていた。授業で格差があるということを知っても「へー」としか思っ



ていなかったが、実際にカンパラ以外の場所に行くと水くみへ行く男の子や昔ながらの家、地べたで寝ている人がいて格差を感じた。授業の時は格差に関してはあまり何も思っていなかったが、実際に見たことで、どうやったら格差をなくすることができるのか知りたくなった。話を聞くだけではなく実際に見ることで、同じ問題に対して全然違う深刻さで考えるようになった。この経験を通して私は大学生のうちにもっとたくさんの日本とは異なる環境の場所を見て、もっと視野を広げる必要があると感じた。ウガンダは私が本で読んで抱いていたアフリカのイメージとは違い発展していた。私は今まで、国際協力をしている人のトークイベントに参加したり、本を読んだりして、途上国ではこんなことで困っている人がいるから将来はそういう人たちをこういうふうに支援したいなと思っていた。しかし、今回実際に自分で見ることの大切さを学んだので、人の話を聞いたり本で読んだりしたことだけで将来どういったことがしたいかを決めるのではなく、もっといろいろな場所を実際に見て私が本当にしたいことは何なのかを考えて将来を決めていきたいと思うようになった。今後の目標としては、途上国を巡ね、その人たちが本当に必要としていることは何かを考え、将来自分ができるところを見つけることだ。そのためにも、もっと語学力をつけたいと思う。そして将来は、途上国で地元の人に寄り添った支援をしていきたいと思う。現地の人とお互い信頼しあえる関係を築き、貧困を少しでも減らすお手伝いが出来たらいいと思う。今回の研修を通して少し将来のことを考えられたことはとても良かったと思う。今回このプログラムに参加した理由を最初に書いたが、自分の将来を考え、視野も広がったと思うので、今回プログラムに参加した目的は個人的に達成できたと思う。

私はウガンダに来てウガンダという国がとても大好きになった。陽気でやさしい人たち、きれいな自然、おいしいごはん、ウガンダで出会ったすべての人やものが本当に素敵で、この国が大好きになった。ウガンダに行く前、コロナウイルスで日本人が海外で暴行を受けたというニュースを見たりしてとても不安だった。しかしこんな時でも出会った人たちはみんな暖かくて、何も気にせずに滞在することができた。本当にやさしい人が多いんだろうなと感じた。ごはんも行く前は心配だった。友達や親に絶対に痩せて帰ってくると言って日本を出たのに、ごはんが予想外においしくてまったく痩せなかった。ホテルもとてもきれいでスタッフもやさしく快適に過ごすことができた。行く前はウガンダに対するイメージがあまりいいものではなかった。友達にウガンダに行くといっても、「え、ごはんに虫とか出てきそう」とか「変な病気ならんように気を付けて」とか言われた。でも、実際に行くととても素敵な国だったからもっといろいろな人に知ってもらいたいと思った。アフリカと聞くだけでなんか危なそう、とか思って私の友達のような反応をする人はたくさんいると思う。私はそういう人にウガンダって自然がきれいでごはんがおいしくて、人もやさしくて、とっても素敵な国なんだよってことを知ってもらいたい。どうしたら知ってもらえるかわからないけれど、私は周りの人たちにお勧めしたいと思う。帰ってきて友達に「ウガンダどうだった？」とよく聞かれる。私は満面の笑みで「楽しかった。本当にお勧め！めっちゃきれいでいい国、人もやさしくてごはんもおいしいよ！」と伝えている。本当にそれくらい素敵な国で大好きな国だ。また行く機会があればぜひ行きたいと思う。今回このプログラムに参加できてよかったと思う。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科 1 年

北川 千晴

目次

1. このプログラムに参加した理由、行く前のウガンダのイメージ
2. ウガンダの農業
3. ウガンダの医療
4. 教育の大切さ
5. ウガンダの教育における現状
6. 退学におけるウガンダの背景
- 7～9. 私の解決策(プロジェクトについて)
10. このプロジェクトを通して
11. なぜこのプロジェクトを考えたのか
12. ウガンダの子供達の夢
13. 実際にウガンダで生活してみても
14. 私たちにできること
15. この研修で私が得たもの

1. このプログラムに参加した理由、行く前のウガンダのイメージ

私は、国際協力に興味があった。しかし、JICA などの取り組みをインターネットで見ているだけで、実際に活動を行っているアフリカなどの現在の状況などを知らなかったもので、実際に自分の目で見てみたいと思った。また、アフリカは今までに行ったことがなかったので、純粋にアフリカに行きたいという気持ちも強かった。また、このプログラムを知るまではウガンダという国すら聞いたこともなかった。ざっくりとした私のアフリカに対するイメージとして、「大自然、貧困、乾燥、民族、植民地」などといった言葉が浮かんだ。実際に本を読んでみると、ウガンダは HIV の患者が日本よりもはるかに多く、医療が整っていないということ、子供の退学率が高い、ということが特に印象に残った。

2. ウガンダの農業

ウガンダは国民の約 80%が農業に携わっており、そのほとんどが小規模農家だ。現在、ウガンダでは米の需要が高まっており、生産が追いつかず米を輸入している。農業機械を導入したくても導入できない農家が多いため、機械をなるべく使わないようにして米の生産率を上げることが、今のウガンダの農業での課題だ。横の写真は実際に JICA が考案した、機械を使わずに米を脱穀する方法である。簡単な材料で誰でも作れるので、とても良いアイデアだと思った。今のウガンダでは米は比較的高い値段で売れるので、米農家は割と安定した収入を得ることができるそうだ。しかし、将来的に関税が撤廃されて海外から安い米が入り、米の需要が低くなったら、米農家の収入は少なくなるだろう。現在は例えばフェアトレードのような農作物を適切な価格で取引されるような規



制はない。将来を見据えて、農家が安定した収入を得られるような政策が必要だと思う。また、ウガンダの農家にとって米は食用ではなく換金作物であるので、米の栽培に対してのモチベーションが低いことも課題として挙げられる。

3. ウガンダの医療

ウガンダでは、まだまだ全ての国民に医療が行き届いていないのが現状だ。実際にムバララ病院では、ベッドの数が足りないがために床で寝ている患者の姿が多く見られた。さらに、国からのお金で運営しているので診察料はかからないが、薬がなくなったら患者さんに買ってもらうなければならない。他にも、マラリアやエボラ出血熱といったアフリカ特有の病気も多くある。また、乳児の死亡率が日本に比べると高いことも課題である。主な要因として、妊婦や新生児のケアや知識の少なさが挙げられる。日本では珍しいような病気も多く、ウガンダの衛生環境の悪さが現在問題視されている。カンパラでは比較的水道が整備されているように感じたが、道端にはゴミが沢山落ちており、スラム街にはゴミの山と生活する人々の様子がうかがえた。首都でそのような状況であるので、地方ではさらに衛生的な環境で暮らすことが難しい人が多いだろう。少しでも病気にかかる人を減らすには、インフラの整備や衛生に関する教育を強化していく必要がある。

4. 教育の大切さ

私はこのプログラムで地方の農家さんに話を聞きに行ったときに、彼らが英語を話すことができないことに衝撃を受けた。ウガンダの公用語は英語であり、ほとんどの国民が話すことができると聞いていたので、彼らは学校教育を受けていない可能性があると考えた。もし、農家が英語や読み書き、計算能力といった学校で身に付けられるスキルを持っていなかったら、農家はどれだけ良いものを育てていても、商品を市場で取引する際に不利益な立場に立たされるかもしれない。すなわち、彼らが作った作物を安い値段で売りたたかれる可能性があるのではないかと考えた。また、子供が学校に行けるようになることは、より多くのスキルや知識を身に付けることができ、彼らの将来の選択肢の幅を少しでも広げるきっかけになると思う。

5. ウガンダの教育における現状

このように考えた私は、ウガンダに来る前に本で読んだように、ウガンダの退学率が本当に高いのか、またその原因は何なのか知りたいと思った。日本では、家庭の経済状況などに応じて奨学金が貰える制度がある。ウガンダにもこのような奨学金の制度はあるのか？と TA さんに聞いたところ、MoES(Ministry of Education & Sports)という機関が UPE(Universally Primary Education),USE(Universally Secondary Education)という取り組みを行っているそうだ。これは、

Table 3.1: Enrolment in USE Schools Visited.

Year	Gender	S.1	S.2	S.3	S.4	Actual Total	Expected	Not Promoted to Next Class
2007	Male	11,190				11,190	11,190	0.0%
	Female	8,922				8,922	8,922	0.0%
	Total	20,112				20,112	20,112	0.0%
2008	Male	11,291	10,717			22,008	22,481	2.1%
	Female	9,251	8,545			17,796	18,173	2.1%
	Total	20,542	19,262			39,804	40,654	2.1%
2009	Male	9,884	10,500	9,659		30,043	32,365	7.2%
	Female	8,333	8,382	7,714		24,429	26,506	7.8%
	Total	18,217	18,882	17,373		54,472	58,871	7.5%
2010	Male	11,344	9,137	9,272	8,485	38,238	43,709	12.5%
	Female	10,094	7,563	7,585	6,373	31,615	36,600	13.6%
	Total	21,438	16,700	16,857	14,858	69,853	80,309	13.0%
2011	Male	12,202	11,101	8,733	8,444	40,480	44,721	9.5%
	Female	10,896	9,648	7,530	6,493	34,567	38,574	10.4%
	Total	23,098	20,749	16,263	14,937	75,047	83,295	9.9%
2012	Male	11,139	10,871	9,738	7,800	39,548	44,569	11.3%
	Female	9,827	9,458	8,261	6,007	33,553	39,150	14.3%
	Total	20,966	20,329	17,999	13,807	73,101	83,719	12.7%

一人でも多くの子供を学校に行けるようにするための取り組みで、学校の授業料を無料にして、文房具などの必要なものさえ買い揃えれば誰でも学校に行けるという仕組みだ。この制度のお陰で、だんだんと子供の進学率は上昇し、近年ではほとんどの生徒が学校に入学できている。入学率は高まったものの、それに反して修了率が全体の6割ほどにとどまってい

る。横の表のように、生徒の学年が上がるにつれて、学校を退学してしまう生徒の人数が増えていく。学校に入学できても、「学校に通い続ける」ことができ、さらに卒業できる人が先進国に比べてまだまだ少ないことが、現在のウガンダの教育における最も大きな問題である。

6. 退学におけるウガンダの背景

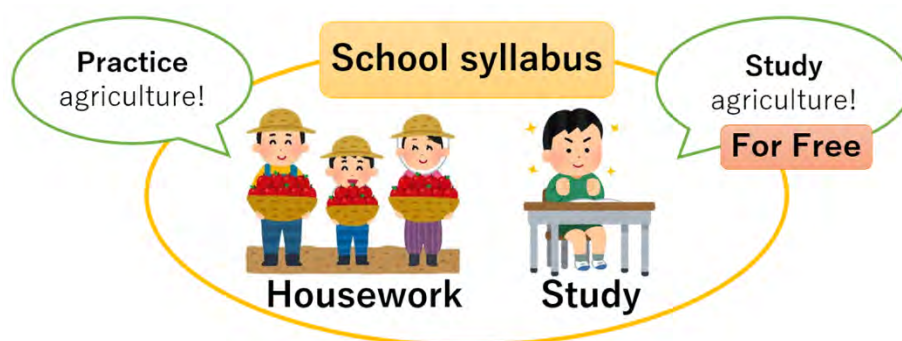
ではなぜこのような問題が起こっているのか？その原因となるウガンダの背景がいくつかある。まず、ウガンダの国民のうち、約80%が農業に携わっている。また、ウガンダの子供は、日本に比べてよく家のお手伝いをさせられる習慣がある。そのお手伝いの一つとして、農作業や家畜のお世話なども含まれる。このようなことから、もし収入が少ない農家の家庭だったら、毎日の生活のために少しでも多く作物を生産しなければならない。そうすると少しでも人手が多い方がよいので、子供も農作業に駆り出され、学校にだんだん行けなくなってしまう子も多い。

7. 私の解決策

ウガンダでは小学校から農業の授業があると聞き、私は「**Farm Class Project**」というプロジェクトを考えた。このプロジェクトの目的は、**子供が退学せずに学校に通い続けられるようにすること、貧困を解決するきっかけになること、である。**

8. Farm Class Project #1

このプロジェクトは、学校の農業の授業の一つとして、シラバスに家の手伝いである農業を組み込んでしまうというものだ。学校で農業を座学で勉強し、その実習の場として家の農作業を行う。学校が家の農作業を単位の一つとして認めることで、子供は家庭の手助けをしつつ、学校に通い続けることができる。また、家の手伝いを単なる作業にするのではなく、学習の場として扱うことで、作物の栽培方法や家畜の飼育の仕方などにより興味を持つことができ、子供達の学習のモチベーションを上げることができるのではないかと思う。家庭の状況によって学びの質を統一させることは難しいと思うが、それぞれが調べ学習としてレポートなどを提出することで、学校の学習の一つとして認めることができるのではないか。



9. Farm Class Project #2

このプロジェクトでは、学校の農業の授業で作物の栽培方法を学ぶだけでなく、その後の流通方法や加工の方法なども学ぶ。それによって、ウガンダの産業の第2次産業化、第3次産業化を促すきっかけになると考える。右のグラフのように、ウガンダの産業は現在約75%が第1次産業を占めている。ウガンダのGDPは日本などの先進国と比べてかなり低く、貧困の問題は深刻になっている。そこで、ウガンダの産業のさらなる発展が必要である。その解決策の一つとして、学校でウガンダの産業について学び、ウガンダ産の農産物を使って新たな商品を作り、それらを流通させるアイデア力を学校で養う。また、現在ウガンダは人口増加の影響もあり、働き口の不足が深刻な問題となっている。大学を卒業しても、職を得ることができる人は3~4割程となって

おり、やむ負えなく生きていくために農家になる人も多い。実際に Kennedy Secondary School の先生も「生徒たちが生きていけるように農業を授業で教えている」と言っていた。このような働き口不足の問題を解決するためにも、第2次産業、第3次産業を発展させることは、職を増やすことにもつながる。学校で学ぶことは直接的に職を増やすことにはならないが、将来的に職を増やすきっかけになるのではないか。



10. このプロジェクトを通して

子供には学校に行き続けて勉強する権利があると思う。だから、私は効率的にお金をかけず、学校に通い続けられるシステムが必要だと考えた。そして、学校で農業の先の産業のことについて学ぶことで、子供達は少しでも将来の仕事やウガンダの経済などについて考える機会を得ることができる。教育の発達には貧困を解決するきっかけになると思う。一つでも多くのスキルを学校で身につけて、人々の生活の質を上げることで、その人の将来の選択肢を少しでも広げることができるのではないか。

11. なぜこのプロジェクトを考えたのか

以上の4～10のトピックが私のプレゼンの内容であるが、私がなぜこのプロジェクトを考えたのかについて述べたい。私は、ウガンダで様々な場所を訪れ、一つ疑問に思ったことがある。JICAで行った地方の農家の方のところや、ムバララ病院などでも共通して現場の方は同じことを言っていた。それは、「政府からお金をもらえない。」ということだ。そして私は「それではウガンダ政府はどこにお金を使っているのか？それとも、医療などの国民が生きていくうえで必要なことにすらお金を回す余裕がないのか？」と強く感じた。ウガンダの輸出のほとんどが農作物であり、それに携わる国民も多いはずなのに、お金が割かれぬ。また、医療も国民が健康に生きるためには欠かせないはずである。しかし金銭的に十分でないということは、ウガンダは物の輸入にお金をかけてしまっている、輸入に頼らざるを得ない現状になってしまっているからなのではないかと考えた。ウガンダの道を走る車は日本車が多く、道や水道の工事を行っているのは中国の企業である。まだまだ発展途上国であるので、ウガンダだけの力で補い切れぬ部分が多く、国の発展を優先した結果、今のような状態になってしまっているのではないかと考えた。そこで、ウガンダが今のまま発展し、その国を支える国民の生活をより充実したものにさせるには、「**今ある制度の改革**」が必要なのではないかと思った。ウガンダの現在の制度を見直し、今ある問題点をなるべくお金をかけない方法で解決できることが必要だと思った。例えば、私のテーマの教育なら、「貧しい子供達のために学校を建てる」という案があるとする。しかし、その学校を建てるためのお金はどこから得るのか？きっとウガンダ政府も問題を解決したいのは山々なのだろうが、それに充てられる十分なお金が無いのが現状だろう。それに他国からの支援で解決するとすると、ウガンダの人だけで継続するのが難しくなる可能性があり、何よりお金がかかるということは、いくつ

も同じことを実践することができないということだろう。上記のように、もし学校を建てたとしても、ある特定の地域しかその問題を解決できないし、ウガンダ全体で行うとしたらさらに学校を建てる必要があり、さらにお金が必要となってしまう。一方で新たなシステムを作り、制度を変えるだけなら、国全体にも反映しやすいのではないか。だから私は、ウガンダの今ある制度を変えることで少しでも国が豊かになったらいいなと思い、今回の「Farm Class Project」を企画した。

12. ウガンダの子供達の夢

Kennedy Secondary School へ訪問した際、私は何人かの子供達に将来何になりたいのかを聞いてみた。私が聞いた子たちは中学生が多く、専門医、外科医、キャビンアテンダントなどといった答えが返ってきた。特に医療関係の仕事に就きたいと言ってくれた子が多かった。理由は人それぞれだったが、ウガンダはまだまだ医療従事者が少ないいうえに、発展していないので医療に貢献したいという子もいた。また、キャビンアテンダントになりたいと言ってくれた子は、映画に憧れてなりたいたいと思ったそうだ。彼女にぜひキャビンアテンダントになって日本に来てねと言うと、笑顔で「もちろん!」と答えてくれた。この子たちが学校を卒業して希望通りの職に就けるように、ウガンダが少しでもよりよい国になって欲しいと心から思った。



13. 実際にウガンダで生活してみて

約3週間ウガンダで生活してみて、私のアフリカに対するイメージは大きく変わった。これまでは「貧困」という言葉からどうしても暗いイメージを持っていたが、人々は全くそんな様子ではなく、ウガンダの人はとても明るくて優しい人たちだと感じた。私たちはバスの中からよく道行く人に手を振っていたが、ほとんどの人が笑顔で返してくれた。

また、ムバララ病院で隔離病棟の見学をさせてもらったとき、「去年の夏にエボラ出血熱がコンゴで流行したが、隣国から感染者が病院に来ることに対して差別は生まれないのか」という話で、「もともとウガンダやコンゴの国境はヨーロッパ諸国に引かれたものなので、国は違っても同じ民族である。病院で働く人も様々な民族出身なので、差別の意識は生まれないし、お互いに助け合っている。」と病院の方が言っておられたことがとても印象に残っている。今までの私のイメージでは、隣国同士国境近くで紛争が起こっているものだと思っていたが、この話を聞いて一気にイメージが覆された。もちろんアフリカ諸国すべてがそうではないと思うが、今までの怖いイメージがある一方で、国は違っても民族同士助け合っているところもあることが素敵だと思った。また、元々植民地だったという日本にはない歴史的背景も強く感じることができ、ウガンダに来てとても良かったと思えた。

さらに、ウガンダの人々はまじめで勤勉な人が多いと感じた。今まで聞いていたアフリカの人々のイメージでは、集合時間に来ないといった話を聞くことが多くルーズな印象があったが、私が関わったウガンダの人々はとても勉強熱心な人が多いと感じた。TAさんも、「今は学部で農業を勉強しているけど、大学院に行ったら経済を勉強したい。そして、子供達のための学校を建てる

ことが夢なんだ。」と話してくれた。Kennedy Secondary School で出会った高校3年生の女の子も「大学に行って勉強したい」と話してくれ、勉強熱心な人が多い印象を受け、私も見習いたいと思った。今まで私はアフリカの国のことを全く知らなかった。それに、アジアの国だって日本や中国、韓国などそれぞれ違う文化を持つ国なのに、アフリカでまとめて考えて同じイメージを持ってしまうと感じた。そして、ウガンダ以外のアフリカ諸国についても知りたいと思った。もちろん紛争があったりとよく言われているイメージのような国もあるかもしれないが、少なくともウガンダは私たちが思っていたほど怖くはないし、素敵な人に沢山出会えた。しかし、私たちはほとんど都市部に滞在しており、私たちが関わったのは、良くない言い方だがウガンダの中でも比較的所得がある人たちだった。南スーダンからの難民が多いウガンダ北部や、地方やスラムに住む人はもっと違う意見や考えを持つ人たちなのかもしれない。今回の研修だけでウガンダの全てを知ったつもりになってはいけなくと強く感じた。

14. 私たちにできること

私がウガンダに来る前、祖父母にアフリカにあるウガンダという国へ行ってくるという話をした際、祖父母の反応はそんなに良くなかった。そして、現代では差別用語であるが「黒ん坊」という言葉も彼らの口から出た。お年寄りなのでステレオタイプな考え方を持っていることは仕方のないことだと思うが、私たち日本人は発展途上国というだけで、どこか心の中でアフリカの人たちを自分たちよりも下に見てしまっていることがあるのではないかと違和感を持った。これはお年寄りに限らず、私たちの世代でも勝手な偏見とイメージだけでアフリカの国や人々を判断してしまっているのではないかと。同じ人間であるのに生きる場所や肌の色、文化が違うだけでその人たちを勝手に判断してしまうような人間に私はなりたくない。そして、多くの外国人が日本でますます働くようになってきている今、私たち日本人はそのような考え方を捨てなければならないと思う。しかし、ニュースなどでは基本的に悪い話や事件しか報道されないため勝手なイメージを持ってしまう。「正しい現状を知らない」ということが今の私たちの大きな弊害になっているのではないかと。そこで、実際にアフリカの国、ウガンダに行った私たちが良い面も悪い面もウガンダのリアルを身の周りの人に伝えていかなければいけないと強く感じた。そして、さらにこの研修でより正しい情報の必要性を感じたことがある。今世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスだ。上記で述べたように、ウガンダの人は優しい人が多かった。しかし、中には私たちがバスに乗っているとこちらを指さして「コロナウイルス！」と叫ばれたことも何度もあった。嫌な気持ちにはなるが、当時まだ感染者が出ていないウガンダに、中国人なのか日本人なのか韓国人なのか見分けもつかないアジア人が団体でいることに怖さを持たれても仕方がないと思った。それに、私たちが日本を出国する際、ドバイでの乗り換えでは何も新型コロナウイルスに対する検査はなかった。また、ウガンダに入国する際も全員が熱を測られ、個人情報を探えられたのみで、私たちがウイルスを100%持っていないと言い切れる状態ではないまま入国できてしまったことに「本当にいいのか？」とってしまった。また、これは私の勝手な予想であるが、アフリカにはマラリアやエボラ出血熱などといった比較的致死率の高い感染症があるため、今回の新型コロナウイルスに対しても恐怖心が大きいのではないかと感じた。また、このような事態になる前からウガンダに滞在している青年海外協力隊員の方も「道を歩いていたらコロナウイルスと言われる。」とおっしゃっていた。未知のウイルスに全世界の人が苦しむ中、新たな差別や感染者を生まないようにするためにも、全員が正しい情報と知識を持つことが大切だと改めて感じた。

15. この研修で私が得たもの

マケレレ大学でウガンダの歴史や政治、経済などについての授業を受けたとき、先生やTAさんに、「日本にはどんな政党があるの？」「日本の歴代の総理大臣は誰？」「ウガンダに比べて日本のGDPはどれくらいなの？」などという質問をされたが、私は何一つ答えることができず、自分の無知さに驚いた。ウガンダの若者は自分の国のことをよく知っており、上記でも述べたよう

に「この国を何とかしたい！」という思いから勉強熱心な人が多かった。発展途上国で、様々な問題を抱えている現状がさらにそう思われる要因ではないのかと思う。一方で、私たち日本人はとても恵まれており、私たち学生のうちのほとんどが特に不自由なくこれまで生活している。恵まれすぎている国で生きているからこそ、自分の国に対する関心が薄く、若者の選挙の投票率が低いこともその結果として現れているものの一つではないだろうか。今まで私は海外にもっと出たいし、海外のことをもっと学びたいと思っていたし、今もその気持ちは変わらないが、まず日本のことをもっと知ってから世界に出るべきだと強く感じた。毎日 SNS や YouTube ばかりを見ている中身の無い人間にはなりたくないと思った。もっと自分の国に関心を持ち、政治や経済をさらに勉強したいと思う。

そして、他にも印象深かったこととして、ウガンダでは国内の「差」がはっきりとわかることだ。例えば、首都のカンパラの都市部に住む人は電気や水道が整備された生活で、スマートフォンを持っている。しかし、国立公園の帰りに見た昔ながらの家に住む人たちはおそらく、電気や清潔な水を得ることができないだろうし、学校や病院といった施設へのアクセスも悪いと思う。さらに、北部の難民の方の生活は想像することすらできない。このように、ウガンダ国内のなかでもこんなにも顕著に格差を目にすることができた。一方で日本はどうだろうか？と考えたとき、わからないというのが正直な感想だ。ウガンダほどではないだろうが、日本も先進国なりに問題を抱えているはずだし、社会的に弱い立場になってしまっている人たちは少なからずいるはずである。でも、日本での「差」はあまり知られていないし、今まで私たちは知ろうともしてこなかった。この研修を通して私は、海外だけでなく、日本国内にもより広い視野を持つことができた。また、私は国際協力や起業といったことに興味があるが、今回の研修を通して実際にそれらがどのようなプロセスで行われているのかを知ることができた。例えば青年海外協力隊員として問題を解決するためのプロジェクトを何か考える際にも、一つの問題だけではなく周囲の環境などのさまざまな要因や背景を考慮しながら進めていくことが大切だと知った。また、私たちが訪問させていただいたクリニックマスターやエコスマートといったウガンダのベンチャー企業も、もともとはこの国にある問題を解決したいという思いから行われていた。だから、私が興味のある国際協力などに近い仕事に将来就けるようになるためにも、今後の生活では、多くのことに興味を持ち、国内外問わず世界で起こっていることに目を向け、正しい知識を持った大人になれるよう、様々な勉強に励み、多くの挑戦をしていきたいと思う。そして、この研修でお世話になった、家族、鳥取大学の先生方、マケレレ大学の先生方、TA さん、ウガンダでの訪問先の方々、この研修でともに過ごした仲間、全ての人への感謝の気持ちを忘れずに、今後も努力し続けていきたい。



最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

〈参考文献〉

www.education.go.ug/

<https://oec.world/en/profile/country/uga/>

ウガンダ海外実践研修を通して気づいたこと、変わったこと

農学部生命環境農学科 1 年

西田 滢司



目次

1. はじめに
 - ・ウガンダに来る前と後のイメージの違い
2. 改善すべきこと
 - ・大気汚染
 - ・道路
 - ・地域格差
 - ・ゴミ問題
 - ・農村部の課題
3. プレゼンテーションの内容
4. この研修を通して変わったこと
5. これから取り組んでいきたいこと
6. 最後に

1. はじめにーウガンダに来る前と後のイメージの違い

私は2月27日から3月20日までの23日間、ウガンダのカンバラを中心に様々なことを実際に見て、体験し、学んだ。私は元々アフリカの貧困問題に興味があり、どのような理由で貧困は起こり、どうしたら解決することができるのかを本やインターネットなどで調べ考えていた。調べていく中で、実際に自分の目で見てみたいという思いが強くなり、このプログラムに申し込んだ。頭の中では、都市部は発展していて、貧困はあるが皆がそうではないことは分かっていた。しかし心のどこかに、貧困で悲しい、雰囲気が暗いなどの負のイメージが強かった。実際に行ってみると、確かに貧困やインフラの不整備、大気汚染など課題はたくさんあったが、私が出会ったウガンダの人は優しく、明るく、フレンドリーで心の中に希望があり、「成長するぞ」というモチベーションが高い人が多かった。Subsistenceの農家さんのもとへ行った時、そして国立公園に行く時に、たくさんの貧しい人々を見た。その暮らしは電気もなく、水道もなく、家も土と藁でできた物、服も汚れていてとても貧しそうに見えた。しかし、そこにいる子ども達は走って笑顔で手を振ってきた。その笑顔を見て、確かに貧しいがそこには悲しい雰囲気などなく、日々成

長するために生きているんだなと感ずることができた。自分の貧困のイメージというものが変わり、この人たちと一緒に今の課題を一つずつ解決したいと思うようになった。

ウガンダに来て驚いたことは、果物がおいしいということ。特にバナナとパイナップルだ。こんなに甘いものは食べたことがなかった。もう一つは自然が多いということだ。ウガンダには国立公園が7つもあり、私たちはその一つである Murchison Falls National Park を訪れた。そこには滝、川、広大な草原、動物がいた。国立公園以外にも都市から離れると、すぐに湿原、草原、林など緑が多かった。私のイメージではもっと自然が少なく、土壌は劣化しているイメージだった。

2. 改善すべきこと

・大気汚染

私がウガンダのカンパラに来て最初に思ったことは大気汚染がものすごいということだ。車、ボダボダ（バイクタクシー）にあふれ、またそれが古い型のため、排気ガスを多く排出している。吸っていると頭が痛くなり、息苦しくなるほどである。蚊よけのフィルターも黒ずんでいた。大気汚染は呼吸器疾患やがんなどの健康被害を引き起こす。近頃人口増加も進んでいる中で、いかにして大気汚染を無くしていくかが課題である。その解決方法の一つの方法として、バスなどの公共機関を導入することによって車、ボダボダの台数を減らすという意見がでた。多く人を一つの乗り物に乗せることができ、交通渋滞も同時に解消することができる。しかし、これをやりすぎると、ボダボダやタクシーで生計を立てている人々の収入を減らすことになってしまうため、導入の程度をよく考えなくてはならない。

・道路

Subsistence の農家さんのもとに訪れた時、土がむき出しで、でこぼこがたくさんある道路を通って行った。途中でミレットを運んでいるトラックとすれ違った。トラックは前後上下に揺れ、スピードはゆっくりで、積んでいるものが落ちてしまうのではないかと思った。道路が舗装されていないと、農家さんが穀物、果物などを作り輸送するときに、余計に時間がかかり、コストもかかってしまう。農業に従事している人の割合が多いウガンダでは、大きな問題であると考えている。カンパラ近辺では JICA などが高速道路を建設するプロジェクトがあったりと、コンクリートの道路が多かったが、田舎の方ではまだ土のままのものが多かった。今ではないが、将来の解決策として自分たちで道路を整備できないか考えたが、道路の整備は政府の仕事のためできないのだという。政府もこの問題は分かっているだろうが、金銭的に難しいのだと考える。

・地域格差

私たちは今回のプロジェクトでウガンダの中心、西側、東側、北側に行った。カンパラ（中心地）はビルや大きい家、ホテルなどが建っておりとても発展していた。そこで暮らしている人も服が綺麗だったり、少しふくよかな人が多かった。しかし中心から離れるにつれて、痩せている人や服がボロボロな人が多くなっていった。一目で分かる地域格差に驚きを隠せなかった。日本では確かに田舎と都会で住み方や所得は多少違っているが、ウガンダほどの格差は感じられなかった。都市と田舎の格差だけでなく、都市の中での格差、田舎の中での格差も感じた。都市での格差を感じられたのは、私たちが宿泊していたホテルの前にあったスラムを見た時である。そのスラムでは周りとは違う雰囲気を醸し出して、ゴミが多



写真1 未舗装の道路



写真2 Subsistence の家

く、家も汚く、街灯も少なかった。ある日、ホテルに帰るバスの中から、ゴミ捨て場から売れるものを探している人々を見た。ウガンダに来て、高速道路やバナナ、茶農園、ビルなど発展しているものを見て、以前までアフリカ＝貧困みたいなイメージが消えた後だったため、ウガンダの全員の所得が低いわけではないが、やはり貧困問題は実際に起こっていると体感することができ、少し心が痛かった。田舎の中の格差を感じた時は、subsistence の農家さんを訪れた日のことだ。私が訪れた農家さんは比較的裕福な農家さんだった。家畜や道具、肥料を買うお金を持っていて、ササカワアフリカ財団にも支援してもらって、主に換金作物であるお米を育てている。その農家さんを訪れる前にバスでたくさんの subsistence の家を見た。家は博物館で見たような土と藁でできているもので、服装もボロボロ、子供もおなかがポッコリとしていて、もしかしたら、教科書でみた飢餓が理由でなるものだったかもしれない。一緒に行っていた TA さんが貧困な農家さんは、家畜を得ることができず、耕耘を人の手だけでやる必要があったり、堆肥を手に入れることができないと言っていた。また、圃場を適切に管理する知識、技術を持っていなかったりするため、生産性も低く、肥料もないから年々質が悪くなっていく。青年海外協力隊で働いている人にお話を聞いたとき、支援の対象は subsistence だが、支援したいけどできない農家さんもおっしゃっていた。田舎の中でも、知識、技術、道具、支援、土地の広さなどによって、所得に違いができ、格差ができていると感じた。私はこのような支援も受けられないような農家さんを将来サポートできたらいいなと考えている。

・ゴミ問題

ウガンダにはありとあらゆるところにゴミがあった。マケレレ大学の中、川の側、町の中など。それは異臭を発していて、とても衛生的にいいものではなかった。TA さんにゴミの処理についてお話を聞いたところ、田舎の方は自分たちが出したごみは、穴を掘り、その中に入れて焼却するのだという。しかし最近その方法だと CO₂ など地球温暖化ガスを多く排出してしまうため問題になっているのだという。都市部は定期的にゴミ収集車が来て、ゴミを回収し、どこかに持って行き全部焼いてしまうのだという。ペットボトルはリサイクルしているようである。都市にゴミを回収に来ていたとはいえ、都市にはゴミが多くあったため、そのシステムは日本ほど上手く作動していないと考えられる。EcoSmart というサトウキビの残渣で女性の生理用ナプキンを作っている企業を訪ねた際、近くにあったペットボトルのリサイクル企業について質問した。その企業では工場の近くに住んでいるストリートチルドレンにペットボトルを運んでいてもらい、お金を支払い、砕いて、それを中国に輸出しているという。貧困者にお金を与えることができ、またゴミも減らすことができるため、とても良いと考える。今は中国に持って行きリサイクルしているが、ウガンダでもできるようになれば、輸送コスト、排出ガスが抑えられるため、ウガンダにそのような工場ができればよいと思う。また、このゴミ問題は、人のゴミについての考え方を考慮しなければならないと考える。なぜならば、TA さんと棒付きのアメをホテルで食べた時に、TA さんは食べ終わった後、付いていた棒をホテルの床に投げ捨てていた。比較的日本の文化を知っている TA さんであってもそのような行動をするということは、ウガンダ人はゴミをゴミ箱の中に入れる習慣というものがあまりないのではないのかと思った。ゴミ問題の解決策として、ゴミ箱を置いて、ゴミ分別してもらおうという意見が出たが、ゴミ分別をする前に、ゴミはゴミ箱に捨てるということを、ゴミ箱に捨てなくてはならない理由を添えて知ってもらわなくてはならないと感じた。

・農村部での課題

はじめにウガンダは約 80% の人々が農業に従事しており、その 60% が subsistence である。残りは commercial と domestic である。その人達は 1 日平均して \$ 1.9 で生活している。そして農村部では subsistence が多い。つまり農村部では貧困が多いということだ。ではこの貧困が起る要因を農村部に焦点を当てて考えていく。

・農民の農業知識が乏しい

農村部での問題は、まず農民の農業知識が乏しいことが挙げられる。バスに乗っていると街道

沿いに農家さんの庭、畑を見ることができる。それを見ると、作物や果物がまばらに植えられていることが分かる。まばらに植えていると収穫しづらい、水の管理や作物、果実の手入れがしづらい、栄養の偏りがある、一家庭当たりの圃場が小さいので収穫量が減ってしまう。私はウガンダに来る前は、肥料のあげ方が適切ではないとか、灌漑などの機械を買うことができないなどというイメージだったが、実際はそれ以前の「きちんとまっすぐ植える」という基本的なことができていない状況であった。その原因となっているのが、教育を受けることができていないということ、教える人が少ないこと、気候が温暖で、土壌も肥沃なため植えればある程度は育つ環境であるということ、などが挙げられると思う。プログラム中で secondary school を訪れたが、その果樹園は日本のようなものではなく、林みtainな雑草なども生い茂っているものだった。学校は一校しか訪れていないため、ウガンダの学校でどのようなことが教えられているかまでは知ることができなかったが、同じような環境であると予想できる。このような環境では今のウガンダの農業は変わっていかないのではないかと考える。

- ・搾取

Subsistence の農家さんは自分のトラックを持っていないため、自分で市場やスーパー、ホテルなどに品物を送ることができない。そのため輸送業者などに頼ることとなる。搾取の問題となるのがミドルマン（仲買人）という人たちだ。この人たちは田舎の subsistence の農家さんのもとへトラックを向かわせ、安い値段で作物や果物を買う。そして、市場などに持って行き高い値段で売る。農家さんは本来であればもっと収入を得られていたはずなのに、得られなくなってしまう。

- ・安定した買い取り場がない

日本には集荷業者や卸売市場があり、自分で作ったものを売ってくれるシステムがある。しかしウガンダでは、人脈がある人は特定のスーパーやホテルなどに売ることができ、その他の人はローカルマーケットというフリーマーケットみたいなところに品物を置く。しかしそこは、日によって売れるかどうかが分からず、収入も安定しないと考える。ウガンダに、農家さんにとって安定した買い取り場があれば安定した収入を得ることができ、子供の教育費や肥料、道具などを買う資金になると思う。

3. プレゼンテーションの内容

私は、農業分野による貧困問題解決をテーマに最終プレゼンテーションをした。私がなぜ貧困問題に焦点を当てたかという、まず中学生の時からアフリカの貧困問題に興味があったからである。私が中学3年生の時に公民の授業で貧困問題について習った時、教科書には乾いた土に今にでも餓死してしまいそうな子供と、その後ろにハゲワシが立っている写真が載せられていた。私はこの写真を見た時に、同じ世界にこのような状況が起っているのかととても驚いた。その時から、どうしたら貧困問題を解決することができるのかを考えるようになった。なぜ農業を選んだかという、ウガンダ人の多くが農業に従事しており、その多くが少ない収入で生活をしている。もし、ウガンダの農業を活性化させることができれば、多くの人の所得を上げることができ、貧困解決の一つの手段になりえると考えたからだ。

私のアイデアは食品加工の会社を立ち上げるというものである。まず最初に、周辺の複数の subsistence の農家さんから成るコミュニティを作る。そのコミュニティから一人リーダーを出してもらい、さらに他にも同じようにコミュニティとリーダーを作る。そして各コミュニティをまとめるもう一つの大きなコミュニティを作る。そこでは月一回各リーダーと私や職員が集まり、自分たちの畑では何が必要か？どうやって作物や果物を育てているか？何か各コミュニティで成功した場合、どうして成功することができたのかをシェアしてもらう。私たちの会社からは、各農家さんのもとへ訪れて農業の知識（土地の適切な管理方法、栽培方法など）、道具、適切な種を与える。しかし、道具と種は農家さんが払える額でローンを組んで買ってもらうと考えている。わざわざローンを組む訳は自分で買ったものという意識をもってもらいたいからである。自分で買ったものであれば、大切に使ってもらえると思う。また、農業に対するやる気に

もつながるのではないかと考える。さらに、私の職員が各コミュニティに向かい、農家さんが生産したバナナとパイナップルを会社の工場に運んでもらう。会社ではウガンダの人を雇い、バナナはジュース、チップス、ドライフルーツ、ケーキなどに加工、パイナップルはジャム、ドライフルーツなどに加工する。工場で加工したものはウガンダで販売、また保存が効くものは日本や隣国に輸出する。

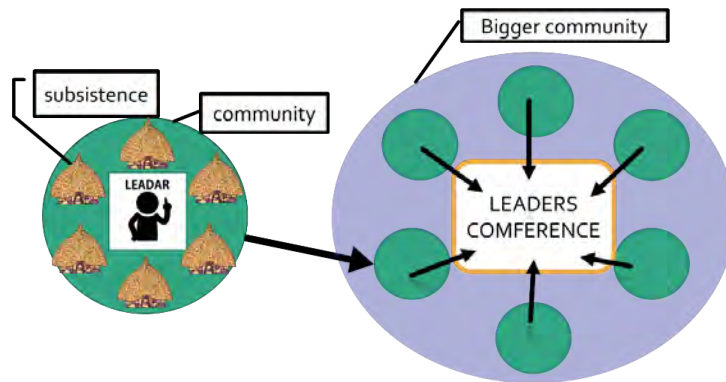


図1 コミュニティー

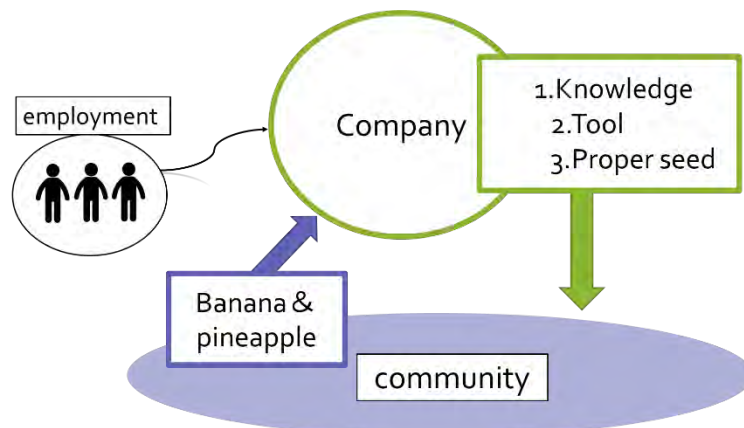


図2 会社と農家さんのやりとり

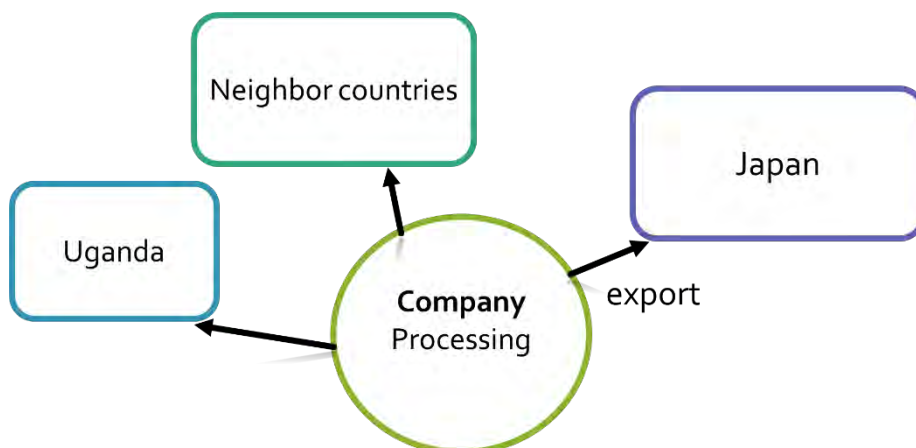


図3 出荷先

<なぜ企業なのか？>

今回のプロジェクトでは、JICA、笹川アフリカ財団といった非営利組織、またヤマセン(日本料理屋、自分たちが使う野菜を自分の圃場で育て、そこでは野菜を市場で売ったり、ウガンダ人を教育したりしている)などといった営利組織のところを訪れた。二つのやり方を見てみて、JICAなどの活動もとても重要だが、ただ与えるだけでは終わらない、企業の方が農家さんと対等な目線に立ちやすいと思った。また、企業となると困難なことがたくさんあると思うが、日々成長している感じを味わえることができ、充実するのではないかと考えた。

<この会社を作ることによるメリット>

Subsistence の農家さん達で構成しているコミュニティー、そしてリーダーを作ることにより、農家さんの状況やこちらの意見の伝達など管理がしやすくなる。また、リーダーはそのコミュニティーを引っ張っていき、頼られる人になるためモチベーションの向上に繋がっていくと考える。また、職員が各農家さんの所に訪れ、技術指導、道具や種の提供をすることにより、農家さんの生産性向上につながる。もし、私の企業が成長することができたら、農家さんから買えるものの量が増え、収入の増加に貢献することができる。

<会社の場所>

海外への輸出も考えた案であるため、比較的エンテベ国際空港に近いウガンダ中心部への立地を考えた。また、近年ケニアとウガンダの道路整備が進んでいるため、中心部であればトラックでケニアの港まで運んで、船で輸出もできる。本来は列車で輸送したいが、ウガンダはまだ列車の整備が整っていないため、今回の案では考えていない。

<なぜバナナ、パイナップルなのか？>

私がバナナを選んだ理由は、会社を立てようと考えているウガンダ中心部と、西部ではバナナを主に作っているため、手に入れやすいからだ。パイナップルを選んだ理由は、ウガンダに着いてホテルの朝食でパイナップルを食べた時に、日本のものに比べてとても甘く、芯まで食べることができることに驚き、これは日本で売ったら売れるんじゃないか？と思ったからである。また、パイナップルも中心部と西部で育てられているため手に入れやすいからである。

4. この研修を通して変わったこと

私は基本的には授業に積極的に参加していたが、何か質問は？と問われるとなかなか答えられないでいた。それは、授業や講義の内容をそのまま受け入れていたからだと思う。つまり聞いたことにつっこみを入れていないということだ。ウガンダに行く以前も自分なりに一生懸命講義を受けていたつもりであったが、いまいち身についているという感覚が少なかった。しかしウガンダでの授業では TA さんの向上心に刺激を受け、一つ一つにつっこみを入れるようにした。そうすると、全体の内容がより頭に入りやすくなり、質問がしやすくなった。また、一回頑張って質問すると、皆の前でも質問することが恥ずかしくなくなっていく。日本の講義でもツッコミをいれて、充実したものにしていきたいと思う。

研修前は、私がやりたいこととはアフリカの貧困問題解決で、その方法は農業分野からのアプローチとざっくりとした考えしかなかった。しかし、ここに来て色々な人の話を聞き、見て、今のウガンダには何が必要なのか？自分がやりたいことは何なのか？をじっくりと考えることができ、考えを整理することができた。これからも、考え続けていきたいと思う。

5. これから取り組んでいきたいこと

今回の研修に参加して、自分の英語力の低さと農業知識の少なさ、技術力の無さを痛感した。日常英語程度であれば、ある程度会話を予想出来たり、聞き取れたりして会話できたが、予想できないものだったり、知らないこと(講義)は聞き取れないことが多かった。また、自分が言いた

いことも上手く英語に出来なかったりしたことがあった。このことが分かったことも成果だと思う。これからは、スピーキングとリスニング力をつけたいと思う。TOEIC や TOEFL の勉強やラジオ英会話、音楽、映画などを通して英語を楽しく学んでいきたいと思う。また、農家さんの圃場を見た時に、私の友達はこの圃場のよくないところが分かったり、肥料や育苗や管理の方法など農業知識が豊富で、色々なことに気づいていた。しかし、私は農業についての知識がほとんどなかった。農業分野で貧困問題を解決したいと言っているが、自分に知識がないため、口先だけとなっているみたいでとても恥ずかしかった。だから、日本に帰ってから、またはウガンダにまた戻ってきて農業の知識、技術を身に着けたいと思う。具体的には図書館での机での勉強と大学外で農業をしている知り合いがいるので、実際に畑で野菜や果実を育ててみたいと思う。また、夏には専業農家さんのもとでのインターンも考えている。そこでは農業の知識、技術の習得はもちろんのこと、経営のところも注目して学びたいと思う。

6. 最後に

このプログラムに関わって下さったすべての皆様、ありがとうございました。今回、充実したプログラムができたのは皆様のおかげです。日本でサポートして下さった国際交流課の方々、ウガンダで私たちを受け入れて下さった企業や国際協力機関や大使館の方々、現地でいつも助けて下さった TA さん、教授、安藤先生、蕪木先生に感謝しています。また、このプログラムのメンバーはいつも明るく、優しく、少しきついことがあっても乗り越えることが出来ました。そしてメンバー一人一人、物の捉え方が違って、そういう考えがあるのか、といつも刺激を受けていました。

本当にありがとうございました。



最後まで見ていただきありがとうございました。

ウガンダ海外実践教育プログラムをとおして

医学部保健学科看護学専攻 1 年

足立 理子



目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加したきっかけ
2. ウガンダを訪れて感じたこと
3. マケレレ大学での授業をとおして
4. ウガンダの医療事情について
5. プレゼンテーションについて
6. プログラムに参加して得たもの・考えたこと
7. 最後に

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加したきっかけ

まず、私がこのプログラムに参加したきっかけは友達にウガンダに行こうと誘われたことだ。はじめウガンダと聞いた時はどこの国だろうと思ったが、ウガンダや研修内容を調べていくうちに私も行ってみたいという気持ちが高まっていった。また、単純にアフリカがどんなところなのか興味があったのと、この機会を逃すとアフリカに行くことはないだろうと思ったからだ。

2. ウガンダを訪れて感じたこと

私がウガンダを訪れる前に持っていたイメージは赤土むき出しの道や乾燥した土地といったものだった。しかし実際に訪れてみると緑豊かで自然あふれる土地で、道路は舗装されていたり近代的な建物がたっていたりと、イメージと異なる風景が広がっていた。また、TA さんなどとの交流を通してウガンダの人々のフレンドリーさや親切で親しみやすい人柄に魅力を感じた。このようなポジティブな印象の反対に、地域格差や経済格差といったネガティブな部分を目にすることもあった。例えば、ムバララや国立公園への移動中農村部を通った時に、水を運ぶ人の姿や昔ながらの木と藁のようなものでつくられている家を見かけた。私はウガンダミュージアムを訪ねた

ときに、下の写真右にあるような家を見ていて昔はこんな家だったのかと思っていたが、実際に住んでいる人もいることを知って驚いた。また、主要な道を外れると舗装されていない赤土むき出しの道が多く見られた。このように都市部と農村部の間では生活が全く異なっており、インフラの整備がまだ行き届いていないことを知った。そのほかに、ウガンダは大気汚染が世界でも上位であることを初めて知り衝撃だった。このように実際にウガンダを訪れることで、調べるだけでは知ることができない最新のウガンダの現状を、自分の目で見て知ることができた。



3. マケレレ大学での授業をととして

私がマケレレ大学で受けた授業で印象に残ったことは2つある。1つめは、ウガンダは農業大国であり、人口の60%が農業に従事しているということだ。農業には3つ種類があり輸出を目指す商業的なものと家庭的なもの、そして商業的なものと家庭的な農業を合わせたものがあると学んだ。ウガンダでは自給自足が一般的なため、作物の販売先は主に隣国の南スーダンといった外国である。問題点として、農業のスキルが普及していないため生産性が低いなどが挙げられることを学んだ。私はウガンダの人口の60%が農業に従事していることを知り、農業事情を改善することの重要性を改めて感じた。

2つめに印象に残ったことはGDPの低さだ。ウガンダの1カ月当たりのGDPは47\$で、日本の1カ月当たりのGDPと比較すると約68倍もの差がある。農業がGDPの24%、産業が25%、サービスが51%を占めていることが分かった。また、輸入をするうえで内陸国であることはコストがかかるため不利となる。そのため、輸入コストを下げるために経路である鉄道整備を進めていく必要があることを学んだ。

4. ウガンダの医療事情について

私は日本と比べてウガンダの医療事情はどのように異なっているかなどについて興味があった。まずクリニックマスターは患者の情報を電子化し管理するソフトをつくっており、今回はソフトを導入している病院を訪問した。ソフトを導入するメリットとしては、診察を効率的に行えるようになり、患者の待ち時間やカルテの紛失が減ったことなどが挙げられる。またデメリットとしては、電力が落ちてしまうと機能しなくなってしまうことや、ソフトの使い方をスタッフに教えるのにコストや時間がかかることが挙げられるそう。そのため、会社としては中央サーバーを設けることでより多くの病院にソフトを提供でき、さらにそこで管理することで各病院に管理人を配置したりスタッフに教育したりするコストを節約できると考えている。しかし資金が十分になく実現できていないのが今の現状である。私は、クリニックマスターを導入している病院を訪問してみて想像していたよりも環境が整備されていたことに驚いた。また患者さんのことを考えて病院内の様々な職種の人たちが協力していることを知り、ホスピタリティが素晴らしいと感じた。ソフトを導入したことで以前より半数以上多くの患者を診察できるようになったと知り、電子化することの効果をより実感した。しかしウガンダの病院で電子カルテを使用しているのは20%程度であると聞き、どのようにコストを節約しながら広めていくのが課題だと学んだ。

ムバララ病院では1日に約50人赤ちゃんが生まれるそうだが、ムバララ病院の産婦人科にはベッド数が40床しかなく、多くの赤ちゃんや母親は推奨される入院期間より早く退院しなければい

けないため、十分なケアを受けられず退院せざるをえないことが多い。さらに病院では妊婦検診を行っていて、8回しなければいけない検診をすべて受けられる妊婦は少ないようだ。理由としては、まず病院まで行くのに困難であったり、家庭の仕事で手一杯になってしまったりしていることが挙げられる。検診を受けないことで異変に気付くのが遅くなったり、知識や情報の不足でどういう時が危険な状況なのかわからなかったりして、赤ちゃんや母親の命を危険にさらしてしまう。このように妊婦さんたちが検診を受けたくてもなかなか受けられない状態にあることを知った。



Photo by Rajab Mukombozi



5. プレゼンテーションについて

このことから、私はアフリカやウガンダの医療事情の中の、特にマタニティケアについて興味がうまれたため、私はそれについてのプレゼンを行った。サブサハラ・アフリカでは毎年116万人の赤ちゃんが死亡しており、調べていく中で多くの赤ちゃんが感染症で死亡していることが分かった。感染症とは体の中の細菌が原因で起きる病気のことである。赤ちゃんの病気の76.3%が感染症であり、最も多いのがマラリア、次に風邪、そしてHIVといわれている。感染症が蔓延する理由として手洗い、手指消毒の習慣がついていない、病院のベッド数やスペースが不足していて患者同士の距離が近く衛生環境が悪いこと、感染症の知識や情報の不足といったことが挙げられる。また、手を洗う石鹸や手指消毒用のアルコールが高価で簡単に手に入らないといったことも問題である。ムバララ病院には、写真のように廊下の壁などにアルコールが置いてあるところをよく見かけた。しかしムバララ病院で働かれている協力隊の方によると、このような医療物資には限りがあり、使い切ってしまうと次の在庫の入荷を政府に頼まなければならないと頼んでも物資が届くまでに時間がかかるそうだ。

これらを改善するために私は石鹸やアルコールといった医療物資がより手に入りやすくなるように供給システムを整備することが必要だと考えた。また、病院のベッド数やスペースを確保していかなければいけないが、病院側に十分な資金がないため、政府に現状の劣悪さに気づいてもらい、援助を受けなければ改善は難しいと感じた。そのほかにも下の写真にあるような咳エチケットや、正しい手の洗い方など、簡単にできる感染予防対策を広めていくことも重要だと考えた。





6. このプログラムに参加して得たもの・考えたこと

このプログラムに参加して毎日さまざまな経験をする事ができとても充実した日々を過ごせた。ウガンダで異文化に触れる生活をとおして、日本や自分をより客観的に見る視点を得られた。例えば、日本の生活がどれほど恵まれているのか、自分の知識や勉強に対する意識の低さなど、日本で同じ環境にいては気づかなかったであろう多くのことに気づくことができた。研修中お世話になった TA さんたちは、自分の国の歴史や経済、産業など自分の専門ではない分野だとしても詳しい知識を持っていて、私たちにわかりやすく教えてくれた。しかし、私は TA さんに日本の政治はどんな仕組みなのか、と聞かれた時ほとんど何も答えることができず、自分が何も知らないことを自覚した。また、この3週間で以前より度胸がついたと思う。この研修中、ケネディセカンダリースクールで大勢の前で自己紹介をしたり英語でプレゼンテーションをしたりと、人前で話す機会が多くあった。どちらも私にとっては初めての体験で、正直どちらもしたくなかった。しかし、実際にしてみると緊張はしていたがひどい結果にもならず、案外何とかなるのだなと思い、その精神で何かをするときに不安に思うことが少なくなった。私は人前で話すことが苦手だったが、これらの経験をとおしてあまり怖いと思わなくなった。プレゼンテーションでは、TA さんに1番大切なことは相手に伝えるということで聞き手を大事に、というアドバイスをもらいはっとさせられた。

また、前述したケネディセカンダリースクールではウガンダの子どもたちとたくさん交流することができた。民族衣装のファッションショーや歌、ダンスなどの出し物がありとても楽しかった。セレモニーで生徒と話したとき、日本でどんなことを勉強しているのか、普段どんなものを食べているのか、首相は誰なのか、などたくさん熱心に質問され圧倒された。自分の興味のあることや疑問に思ったことを他人に素直に聞けてすごいなと思った。日本の中学校では、質問すると目立つからしないというような空気だったイメージがあるため、ウガンダの積極的で自分の興味に素直になれる環境がとてもいいなと感じた。横の写真はクイズをしている時のもので、たくさんの生徒が参加してくれた。



ウガンダに来たとき、英語が聞き取れなかったり言いたいことが表現できなかったりとコミュニケーションがとれずもっと英語力、語彙力があつたらなと思うことがたくさんあった。伝えたいのに伝えられなくて悔しかったが、その分言いたいことが伝えられたときはとてもうれしかった。英語でコミュニケーションをとる生活をしていくうちに、英語に対する恐怖心がなくなったことが大きな変化だと思う。しかし、自分の英語があっているのか気にしてしまっていたため、もっととらわれずに話せるようになりたいと思った。日本では英語を話す機会が大学の授業のときくらいしかないので、英語を話す機会を見つけて増やしていきたいと思っている。



ウガンダで過ごした3週間は1日1日が濃厚で、毎日力を使いきり今日も生ききったなと思うくらい充実していた。きっとこのプログラムに参加していなかったら、だらだらと遅く起きてスマホを見て1日が終わる、というような春休みを過ごしていたに違いない。そうなることなくこのプログラムに参加できてよかった。はじめはTAさんの話す英語が聞き取れず、コミュニケーションがとれなかったり、新しい環境に対する不安であったりで日本に帰りたと思うことがあったが、だんだんとウガンダのエネルギーでパワーにあふれた雰囲気が好きになり、研修が終わる頃にはウガンダにもう少し滞在したいと思うようになった。日本に帰国し、家族や友達にまたウガンダに行きたいと私が言うと、みんな驚いた顔をしていた。きっとウガンダに対するイメージが、はじめに私が持っていたものと同じようなものだからだろう。しかし、見たもの経験したことを紹介すると、いい国だねと言ってくれてうれしかった。私はウガンダのような魅力的な国を知らないのはもったいないと思うし知ってもらいたいのので、もっといろいろな人に魅力を伝えていこうと思っている。

また、このプログラムに参加したことで新しい知識を得られた他に、自分の内面や将来について考える機会が多くあった。まだまだ未熟な自分を何度も自覚し落ち込むこともあったが、その時間が自分自身の成長につながったと感じる。また、たくさんの刺激をもらえる仲間やTAさんに出会うことができとてもよかったと思う。同世代で将来のビジョンをしっかりとっていて、それを実現させるために何が必要かを考え実行している姿をみて、自分ももっと将来について真剣に考えようと思うきっかけになった。

今回、医療や農業に携わっている青年海外協力隊の方のお話を聞かせていただいて、海外で働くことや国際協力により興味が生まれ、ウガンダなどの発展途上国の助けになりたいと思った。現在大学で看護学を学んでいるため、将来看護師になり医療が不足しているウガンダなどの国の役に立ちたいという目標ができた。そのためにも、まず日本で医療技術をしっかりと身に付け、いつかまたウガンダに戻ってこられるよう頑張りたい。

7. 最後に

私は海外に行くのは今回が初めてで何もかもが未知であったが、ウガンダに行くことができ本当に良かったと思う。最近では海外の情報もネットで知ることができるが、実際に自分の目で見て感じるのとでは印象も記憶の残り方もまったく違うのだと、改めて感じた。そしてもっと日本以外の国を自分の目で見てみたいと思うようになった。今は難しいかもしれないが、もしまた海外に行く機会があったら是非行きたいと思っている。

多くの方たちの協力でこのような充実した一生の宝物になる経験ができた。私たちを快く受け入れてくださったJICAの方々、TAさん、そのほかの施設の方々、そして私たちの引率をしてくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいだ。また、コロナの流行で大変な時期であったにもかかわらず無事に予定どおり研修を終えられたことに感謝したい。そしてこの研修で得たものを糧にしてこれからの生活や学びに活かしていきたい。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

地域学部地域学科国際地域文化コース 2 年

中津 春



目次

1. はじめに
2. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ
3. ウガンダへ行く前と行った後のウガンダに対するイメージ
4. マケレレ大学で行ったプレゼンテーションについて
5. プレゼンテーションを通して
6. ウガンダに行って学んだもの・得たもの
7. 自分の課題・次へのステップ
8. 最後に

1. はじめに

私は 2020 年 2 月 28 日から 3 月 19 日の期間で行われたウガンダ海外実践教育プログラムに参加した。本プログラムでは、マケレレ大学での講義や JICA の活動見学、病院訪問、現地学校訪問など、たくさんの活動を行った。またこれらの活動にはマケレレ大学の在学生及び卒業生 6 人が TA として参加し、私たちの活動を補助してくれた。これらの活動を通して、私が感じたウガンダ、その中で特に印象に残った事柄についてのプレゼン発表の内容、ウガンダでの気づき、学び、経験を通して求められる力などについて述べていく。

2. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ

まず、私がこのプログラムに参加しようと思った理由から述べていきたい。動機はアフリカという国に興味があった、自分一人では簡単に行ける国ではないからという単純なものだった。私の所属学部が地域学部の国際地域文化コースということもあり、様々な国の特性を学ぶことが多

かった。宗教や文化、生活様式などを学ぶ講義が多くあり、外国についての興味関心が深まっていった。多くの国について学んでいく中で、日本やアジアの文化とはかけ離れたアフリカについて、興味が湧いた。ウガンダでの研修前にアフリカ地域や文化についての講義を受講していたので、多少はアフリカの文化を学んだがやはり、アフリカ国というのは未知の世界というイメージだった。そのため、ウガンダでの海外研修に参加し、アフリカという国がどのような国であるのかを自分の目で見たいと思い、参加することを決めた。

3. ウガンダへ行く前と行った後のウガンダに対するイメージ

ウガンダでの海外研修に参加することが決まり、私はウガンダという国を調べることから始めた。正直、ウガンダというよりもアフリカ国に行けるということしか頭になく、ウガンダがどのような国であるのかをきちんと把握していなかった。そのため、海外研修が決まってから、ウガンダについて調べると自分の想像以上のものがネットに出てきた。ゴミの山や整備されていない道路、大量のボダボダ、見たこともない虫の数々といった写真が多くネットに載っていて驚愕した。それと共に不安に駆られた。アフリカというと衛生面が悪いというイメージだったが、実際にネットで調べてみるとそのような記事が多く掲載されていたため、自分にそのような環境の中で適応できるのか少し心配だった。また、発展途上国ということもあり、日本で当たり前のようになしてきたことが出来ないことや通用しないことも多くあるだろうと覚悟していた。渡航前の事前研修でも、自分が事前に回避できることや注意しなければならないことを学び、準備は十分に行った。

その後、ウガンダへ着くと、私のイメージは間違っていなかったことが分かった。道端にはたくさんゴミが落ちている、木の周りに落ちているバナナの皮に群がる大量のハエ、交通整備が為されておらず、交通マナーの悪い大量のボダボダが横の車に接触しながらも平然と走っていき、道路の脇で昼寝をしている人など、日本では見ることもない情景を一日で多く目の当たりにした。大抵の国は行ってみると想像と違った、実際はこうなんだと感ずることが多いと思うが、ウガンダはイメージ通りの国だった。イメージ通りすぎた環境に、他の部分ではどうなんだろうとますます興味が湧いた初日だった。

4. マケレレ大学で行ったプレゼンテーションについて

初日に見たこれらの衝撃的な環境の中で特にインパクトが強かったのが、やはり衛生面の悪さであった。日本でもしばしば道端にゴミが落ちていることはあるが、ウガンダは桁が違った。ゴミが落ちているというよりは捨てに来ているんじゃないかと思うくらいに溝にゴミが溜まり、木の周りには袋に入れられずにそのまま散乱したゴミが密集していた。しかし、地元の人々はこれが当たり前であるかのように、気にすることもなく歩き、ましてやその近くでモノや食べ物を売っていた。私はこの光景に驚き、また興味を持った。そのため、ウガンダでのプレゼン内容はウガンダの衛生事情にすることに決めた。ウガンダの衛生事情について調べてみると、日本とは異なる点が多くあった。ウガンダでは衛生面の悪さによって引き起こされる病気が多くあり、特に小さい子供たちは衛生面の悪さから病気にかかるケースが多く、最悪の場合、死に至るケースも少なくない。このようなことから、どのような点が衛生面の悪さを引き起こしているのか、いくつかの身近な原因とその解決方法の提案について、プレゼン作成を行った。



まず一つ目が排水管の整備が整っていないことが分かった。(写真下) 場所によっては排水管が地面にむき出しになっており、その排水管から漏れた下水道が悪臭を放つ原因となっている。ウガンダに来てから、私はこの悪臭によく悩まされた。バスでの移動中、暑くてよく窓を開けてい

たのだが、どこからともなく悪臭がバスの中に蔓延し、みんなで悶えていた。すぐに窓を閉めても消えない強いにおいはずっと鼻に残り、私たちを苦しめた。腐った生ゴミと便のようなにおいが混ざった悪臭は、日本にいと経験することは出来なかつたろう。この悪臭の原因の一つが排水菅の整備が整っていないことから引き起こされることが分かつた。



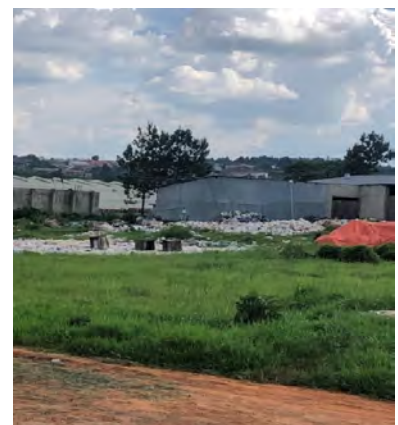
二つ目に、ゴミの廃棄処理が適切に行われていないことが衛生面の悪さに挙げられる。スラム地区によっては、家にトイレが備わっていないことがしばしばあり、そのため排便をポリ袋にして、それをそのまま溝に捨てていくという話を一部の現地の人から聞いた。その話は確かではないが、他の人の話では一昔前にはあつたという話もある。私は実際にそのような光景を見たわけではないが、溝にたくさんのゴミやポリ袋が捨てられているのは目撃した。溝の水は黒く濁り、ひどい異臭を放っていた。これらから、人々が適切にゴミの廃棄処理を行っていないことが分かる。さらに驚いたのは、その周りで食べ物を作って売っていたり、子どもたちが遊んでいたことだ。これらが衛生的に食べ物や子どもに悪い影響を及ぼすのは明らかだ。特に子供たちは、どれほど汚いものかを把握せず間違つて口に入れてしまつたり、ゴミを触つた手でそのままご飯を食べてしまうなどによって、下痢など病気にかかつてしまうことがあり、大変危険である。

三つ目に、清潔で安全な水へのアクセスが不十分であることが挙げられる。人々の中には湿地や湖などから水を汲み取り、生活している人もいる。安全で清潔な水へのアクセスが難しく、汚い水を得るしかない。そんな中、そのような水を直接飲んでしまう人もおり、それによって腸チフスなどの病気を引き起こす問題がある。



www.testifynews.com/2015/01/30/trapped-in-ugandas-water-poverty-cycle/ (写真)

最後に、ポイ捨ての問題だ。ウガンダに来てから困つたことの一つに、道端や大学内、建物内にゴミ箱が見当たらないことだつた。外出中に飲み終わったペットボトルや食べ終わったお菓子の袋などを捨てようと思った時にどこにもゴミ箱が見当たらず困つたことがよくあつた。私はどうしようもなくてそのままリュックサックの中に放り込んでいたが、現地の人たちは普段外出中に出たゴミをどうしているのか、いつも気になっていた。また、現地の人によると KCCA（カンパラ首都圏庁）という機関が特定の場所に設置されているゴミ箱のゴミ回収を行っているが、たくさんの場所に回っていくのに時間がかかり、週に一回しか回収できていないという。確かに私がムバララ病院に訪問した際、病院の柵の外に大きなゴミ箱があつた。それが下の写真である。しかし、ゴミ箱はゴミでいっぱいになり、ゴミ箱から溢れ出ている。またそのゴミ箱の周りにはゴミが広がっていた。私はこれらの状況が、人々が簡単にゴミをポイ捨てしてしまう原因を作ってしまうのではないかと感じた。ゴミが広がっていると、そこにまたゴミを捨てても何も変わらないし、だれも気にしないと思つてしまうだろう。



これらの四つの問題からそれぞれの解決策を考えた。政府はスラム街を中心に公共トイレを整備する、たくさんのメディアを通して人々に湿地や湖などから得た水を直接飲まない、飲む前に一度沸騰させることを伝える、学校や村に衛生教育を広める、KCCA は週に一度以上のゴミ収集を行う、といった解決策を考えた。しかし、提案するのは簡単だが実際のところ、行動に移すのはなかなか難しいことは私にもわかる。これらの解決策にはお金が沢山かかり、政府の負担が大きい。しかしながら、これらの問題をより多くの人々に知ってもらい、深刻な問題であることを認識してもらうために政府の関わりは必要である。まずは政府が一番にアプローチしていくことが重要となってくる。そのため、私は上記で述べた解決策よりも低コストな方法を考えた。まずは、公共のゴミ箱を設置することだ。公共の場所にゴミ箱を設置することで、特定の場所にゴミが集まり、悪臭が道全体に広がるということは少なくなるはずだ。また、よく道端のゴミを拾っている清掃員のような人を見たが、ゴミ箱を設置しておけば、そういう人がゴミ収集の方へ回れるのではないかと考えた。それに、ゴミ箱があれば子どもたちがゴミに触ってしまうということも減るだろう。もう一つの提案は、JICA などの国際機関と協力した衛生教育を村や学校へ普及することである。ウガンダ政府だけではなく、他国の国際機関が介入することで政府だけの負担が和らぎ、新しい知識や衛生活動が見込める。これらの方法は他の解決方法よりも低コストで、政府だけの負担にはなりにくいのではないかと考えた。以上の内容が、私がマケレレ大学で行ったプレゼンテーションについてである。

5. プレゼンテーションを通して

私がプレゼンテーションを作成するにあたって、たくさんの訪問先で衛生面について意識して見ていた。その中で、ある訪問先の敷地内で見た光景が忘れられない。横の写真は敷地内で見た光景である。おそらく廃棄エリアであると思われるが、小さく3つほど見える黒っぽい箱がゴミ箱がある。しかし、あたり一面にゴミが捨てられており、適切な廃棄処理が行われていないのが分かる。驚くことに、ここは衛生的な物資を製造している工場であり、その工場の敷地内であった。この光景は、私にとってとても衝撃的なものであった。プレゼンテーションを通して、ウガンダでの衛生面について多く知ることが出来た。JICA などでは主に農業や交通整備における活動が中心で、衛生面での活動はあまり目立っていなかった。それはアプローチ方法の難しさや人数調整の困難さなど、実施していく困難さが他よりも大きいことが原因だろう。しかしながら、日本からウガンダに来てみて、私にとって一番ショックだったのは衛生面の悪さだった。環境の違いとはいえ、人々の意識ですぐにでも改善できるところはたくさんあると思う。ポイ捨てしない、ゴミを子どもが触ることのない特定の場所に集める、そういう単純な部分が普段の生活では一番大切であり、衛生教育などの取り組みで人々に認識してもらうことが必要であると感じた。プレゼンテーションでは解決策として、主に政府や機関がまずは衛生面での活動の取り組みを実施していくことを提案したが、実際行わなければならないのは、そこに住み、生活する人々であり、彼らが衛生について認識し、注意していかないと何も変わらない。きれいな場所で安全に暮らすためには、人々の衛生への高い意識が必要である。

6. ウガンダに行って学んだもの・得たもの

私はこのプログラムでたくさんのことを経験した。地域の雰囲気も現地のご飯も何もかもが日本とは全然違い、毎日が新しい発見であった。ウガンダのご飯は初め、ジャガイモばかりで味にインパクトがなくて、たくさん食べることが出来なかった。マトケやポショなどは不思議な味すぎて、お皿に盛られた時は食トレをしている気分だった。また、ご飯の時は必ずハエが近くに来て、ずっとハエがご飯に寄ってこないように神経を集中させながら食べていた。他にも、ご飯を外で食べる時は厨房を見ないように気を付けていた。もし厨房を見てしまえば、目の前のご飯を食べる勇気は持てないだろう。ウガンダでの生活は日本にいる時には想像できなかったことばかりで、驚きの数々で圧倒された。しかし、ウガンダに来て気づいたことがある。私には、「郷に入

れば郷に従え」という言葉がすごくしっくりきて、現地での適応力が意外にも高かった。今まで先進国にしか行ったことがなかった私には、発展途上国と呼ばれる国は未知の世界で、そこで生活するなど考えられないことだった。しかしウガンダに着いてから、蚊が大量にいる部屋もダニがいるのが目に見えるベッドも悪臭のする道も大抵詰まるトイレも何もかも、日本とは違う国と思えば、すべて平気だったし、受け入れることが出来た。これは私にとってすごく自信になった。これから先、どんなに日本と違う国であろうとも私はその国で生きていけるんじゃないかと思えるほどの自信を持てた。私の所属している学部が地域学部ということもあり、地域それぞれがもつ文化や生活への理解や受容は人よりもあると自負していたが、自分が適応できるかは分からなかったので自分にとっていい発見になった。また、ウガンダという国について知れたことは、日本で生活する上で私の価値観を広げるものとなった。私が普段テレビやネットで見る海外は、日本と文化は違えど生活環境は似ている国ばかりで、メディアで取り上げられる国も日本と大差ない国ばかりであった。しかし、ウガンダへ行ったことで、私が今まで当たり前前に生きていた環境は国が変わるだけでこんなにも違うことで、通用しないこともたくさんあるんだと認識した。私が今まで知っていた外国はほんの一部の偏ったものだったことを思い知った。これからいろいろなことを判断していく中で、私がウガンダで経験したすべてのことが自分の中の判断基準にこれからも蓄積されていくと思うととても貴重で豊かな経験だと思えて嬉しい。

また、ウガンダに来てからいい面だけではなく、ウガンダが抱える問題もたくさん認識した。それらの問題に対してどう取り組んでいけばいいか、マケレレ大学で受けた色々な分野の授業やたくさん行った訪問先で考える機会が多くあった。その多くの機会は私にとって大切なことだった。今までの自分はその問題点があるという事実を知るということだけで満足していて、そこから先どうその問題に取り組んでいくかなど考えたこともなかったし、考えようとも思わなかった。それはおそらく、気づいている人も認識している人もたくさんいるから私が考えなくても大丈夫だろうという気持ちが無意識にあったのだろう。ましてや、他国の抱える問題なんて私を知ることもないし、知ったところでどうしようもないと思っていた。日本の授業でも、自分でどう取り組んでいくかと考えることは少ないし、意見を求められることもそうそうない。しかし、マケレレ大学の授業でウガンダが抱える問題を知った時、TAに「あなたならどうする？」と聞かれ、授業の先生にも「あなたの考えを教えて」「なんでもいいから考えを言ってみて」と半ば無理やり考えさせられた。私は慣れないその時間がすごく嫌いだった。しかし、「ウガンダはこうだけど、日本はどうか？」と聞かれていくうちに、彼らはウガンダ人ではなく日本人の私たちから見た答えを求めているんだと思った。その時に、違うところで生きてきた人たちから見たものの考え方はすごく重要なことなだろうと思えた。自分が問題にどう取り組んでいくか考えることの必要性と考えを発信することの重要性に気づくことが出来た。

たくさんの新しい発見がある一方で、自分の知識の乏しさと物事への関心のなさが私を苦しめたことが多々あった。このプログラム終盤にケネディ・セカンダリー・スクールを訪問した際に、特に私はそれらを痛感した。子どもたちと交流する機会が多くあって、話す機会もたくさんあったのだが、子どもたちからの質問攻撃がすごかった。その中でも、小学生から「あなたの国のリーダーは誰？」「どんな人なの？」と聞かれたときは驚いた。私が小学生の時は毎日給食のことくらいしか考えていなかったのも、まさか小学生の口からそんな質問が出るとは思わなかった。その他にも、「日本の中であなたが誇りに思うものはなに？」「日本の学校の仕組みは？」などたくさんの質問をされた。正直、すごく戸惑った。すぐに思い浮かばなかったからだ。子どもたちに質問されたことのほとんどが自分でも知らないことで、何て答えればいいのか分からなかった。「私にも分からない」と答えたときに子どもたちから不思議そうな顔をされたことは忘れられない。子どもたちからすれば、どうして自分の国のことがわからないのかと思うだろう。本当にその通りだと思う。自分が今まで生きてきた国のはずなのに、日本はどういう国かということをもうまく説明できない。日本にいるからこそここまで考えることもなかったが、日本から海外へ出たときに自分の国について説明できないのはすごく恥ずかしいことだと感じた。大学生の私とは正

反対に、ウガンダの子どもたちは自分たちの国についてとてもよく知っていた。植物の種類や農業のこと、学校のことやウガンダで有名なものなどいろんなことを教えてくれた。彼女たちと私の差は物事への関心だと思った。私は昔から外国に興味があって、その分野に関心を持っていた一方で、国内には興味がなく、日本自体にあまり関心がなかった。日本にいる時はそれで何の問題もなかったが、海外へ行くとそれがすごく大きな問題だった。ウガンダでのいくつかの訪問先やTAと話している時もそうだった。何かしら質問するよう言われた時も、「恥ずかしがらずにどうぞ」と周りに言われるが、恥ずかしがっているのではない。何の関心もなかった分野だから全く質問が思いつかないのだ。自分の考えを言うよう言われた時も、その分野に対して全く知識がないため、答えられるどころか考えるまでもいかなかった。それが自分の中ですごくもどかしかった。自分が何に対しても全く関心がないことがこんなにもどかしく思えたのは初めてだった。それに対して、私たちをいつも助けてくれたTAたちは、どんな分野の授業でどんな質問をしてもすぐに答えることが出来ていたし、考えを言うことが出来ていた。彼らがマケレレ大学の在學生と卒業生というエリート集団だからというのも一つの理由としてあるかもしれないが、そこまで歳が変わらない自分と、ましてや海外へ勉強しに来ている自分と比べてこんなにも差があることへの悔しさと恥ずかしさを感じた。自分にいろんな面への関心がないからこそ、知識を得る機会を失い、考えを発信することができないことが、このプログラムでよくわかった。そして、いろいろな分野に関心がないことがどれほど、自分にとってマイナスポイントに繋がっているのかということを痛感した。海外に興味があるから、海外に目を向けていればいいというわけではない。外国を知るためには、まずは自分の国について知ることが必要であることに気づいた。他国を知るためには自国を知らないと、対等なレベルでコミュニケーションを取れない上に、お互いがお互いを適切に理解する妨げになってしまう。私に質問してきてくれた子どもたちは、きっと日本に興味があって、日本を知ろうと思って質問してきてくれたのに、それにきちんと答えられなかったことが悔しいし、申し訳ない。様々な分野に興味を持って、自分から知る努力をしていかなければいけないと思う。外国へ行くなら尚更、自分がその国では日本人代表となることを自覚しなければいけないことをすごく感じたし、それをウガンダの人々に教えてもらった。

7. 自分の課題・次へのステップ

ウガンダで経験したことはこれから日本で生活し、勉強していくことを考える上で影響されることばかりであった。上記で述べたように、様々な分野に関心を持って、知識をつけていくことの重要性にも気づくことができた。その他にも、英語力の向上が自分には必要だと考えている。外国人と英語で話すことへの抵抗はないのだが、根本的に語彙力がないことが自分の課題である。日本語では細かく説明できることでも、英語では難しい単語は分からないから、極力シンプルな言い回しにすることが多かった。おおまかな言いたいことを伝えられても、細かいニュアンスまでは伝えることが出来ないことへのもどかしさをたくさん感じた。リスニングは比較的、単語と単語をつなぎ合わせながら理解することは出来ていたが、専門用語やあまり日常生活では使わない単語が出てくると全く理解できず、話についていけないことも多々あった。今後、語彙力とそれを使う応用力、実践力を付けることが自分の課題である。

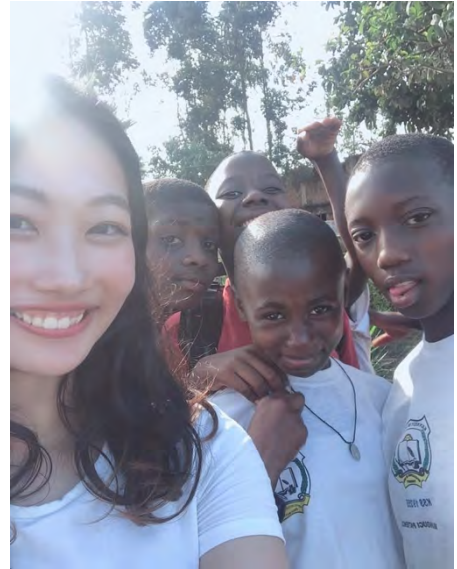
さらに、自分の課題が見つかったとともに、自分の将来やりたいことが少し見えてきた。今までは自分のやりたいことがあまり定まっておらず、何も見えない将来像だったが、今回のプログラムを通して、海外で仕事をしてみたいと思うようになった。特にアフリカを中心に子どもとたくさん関わり合えるような仕事に就きたい。そのために、英語力のスキルアップはもちろんのこと、今は日本についての知識をたくさんつけて、海外に発信していけるような人材になりたい。

8. 最後に

今回のウガンダ海外実践教育プログラムに参加して、今までで一番濃い時間を過ごすことが出来た。楽しいことばかりではなく、悔しいことも経験したが、今回のプログラムで自分に足りな

いものや必要な力が明らかになった。私にとって、これから自分がどうしていくべきなのか、どうしたいのか考える上で大切な材料となり、重要な経験となった。ウガンダという日本とは大きく異なる国へ行ったこと、知れたことはなかなかみんなが経験できることではない。ウガンダという国をよく知っている人も少ないだろう。私がウガンダだけではなく、アフリカを含めて発展途上国の魅力をどんどん発信していける人になりたい。

また、このプログラムでは一緒に行ったメンバーにも恵まれていた。意見や考えをすぐに言える人やリーダーシップがあって、みんなをまとめてくれる人など、お互いがお互いを高め合え、刺激し合える関係だった。学年的には私がメンバーの中では一番上だったが、みんなから教わることが多く、助けられることもしょっちゅうあった。ただ外国へ行ったことが学べたことではなく、一緒に行ったメンバーから学べるところが多くあり、目標としたいと思える人が多くいたことが幸運だった。このプログラムで、何一つとして自分にマイナスになる部分はなかった。多くの人に、ウガンダを知ってもらい、学んでもらい、自分の中にどんどん吸収してってもらいたい。私はこのプログラムを通して、たくさん新しいことを吸収したし、それを使えるように努力しようと思う向上心も生まれた。本当にウガンダに行ってよかったと心の底から思える、海外実践教育プログラムだった。



ウガンダ研修を経て

農学部生命環境農学科 2 年
荒木 佑哉

目次

1. ウガンダに来て感じたこと
2. 訪問先での発見と学び
3. プレゼンテーションの内容
4. 最後に

今回、私は約一ヶ月間ウガンダに大学の研修プログラムとして滞在した。これは私にとって初めてのアフリカであり、また初めての留学であったため、とても刺激があり充実した留学となった。初めに、ウガンダに来て感じたこと、訪問先での発見、学びを写真と共に説明した後、最終プレゼンテーションの内容を紹介し、最後にこの研修を通じて思ったことを書こうと思う。

3. ウガンダに来て感じたこと

まずウガンダに着く前に私はアフリカ、ウガンダのことについて全く無知であったため、どのようなところなのかわからず、一ヶ月の間うまくやっていたのかとても不安であった。しかし、いざ空港に着いてみると、とても親切でノリのいい TA さんたちが迎えてくれてとても安心した。そこからバスに乗りカンバラに移動するのだが、まずウガンダの暑さに汗が止まらなかった。それと、車とバイクの多さに驚いた。とても恥ずかしいことだが、私はアフリカにここまでの車とバイクがあるとは思っておらず、もっと少ないものだと思っていた。さらに道路もアスファルトでないと思っていた。そのため、カンバラに着いて街を見て、すごい量の車とバイク、また渋滞を見てとても驚いた。それと同時に、なぜ日本より人口が少ないのにここまで渋滞が起きるのだろうか、と少し疑問に思った。ウガンダに来る前に渋滞のことを少しインターネットで調べたが、私は渋滞の原因は信号機や道路整備の不良だけではないとこの時思った。

その原因の一つがボダボダ（バイクタクシー）である。ウガンダの生活に欠かせない交通手段の一つであるボダボダだが、あまりに数が多すぎると私は思った。また、ボダボダの運転手の運転マナーは基本的に良くない。これはボダボダだけではなく、車の運転手もそうである。しかし、ボダボダは信号や渋滞で車が止まっているとその車の間をすり抜け、前に行こうとする。そうすることで、車の行く手を拒んでいると私は思った。

また、ウガンダの街を見ていて衝撃だったのがごみの多さである。特にカンバラではいたる所に大量のごみが放置されており、バスの窓を開けていると臭うところもあった。ごみ箱を設置しているところもあったが、それでもごみ箱はいっぱいになり、ごみ箱の周りにごみがたくさん落



写真1. バスの中から見た渋滞の様子



写真2. カンバラ市内のボダボダの様子



写真3. マケレレ大学内に
放置されたごみ

ちていた。これに私は、政府がごみを回収する人を雇い、その集めたごみでなにか他の製品を作ったりしてリサイクルすれば、処理するごみの量も減り、人を雇うことで雇用枠が増え若者の就職口の一つにもなる。さらに、街中のごみの量も減らすことができるため、一石三鳥になる。なので、このようなやり方をしてみてはどうだろうと思った。

もう一つ衝撃だったのが、経済格差である。日本に住んでいて経済格差を感じることは少ない。しかしカンパラ市内を移動していると、ゴルフ場を目にした。さらに、ヴィクトリア湖のビーチにご飯を食べに行くと、高級住宅街が広がっていた。しかし、カンパラの街を見ると、あまりきれいとは言えない服を着て裸足で生活している人や、道端で寝ている人を見かけた。私達が泊まったホテルの前にもそのような人たちがいた。私は同じ市内でしかもそこまで離れていない距離でここまでの経済格差を感じることは今までになかったため、とても衝撃的であった。

2. 訪問先での発見と学び

ウガンダに滞在している間にたくさんの機関、施設を訪問した。初めに訪問したのは JICA である。そこではウガンダのインフラ整備など、日本からウガンダにどのような支援をしているかなどについての講義を聞いた。この講義を聞いて、日本は様々な形でウガンダの発展に協力をしていることが分かった。しかし、私はウガンダに来るまで JICA のことについてよく知らず、何を行っているのかも知らなかった。これは私だけでなく、多くの日本人がウガンダ、JICA について知らないと思う。なので、JICA の活動をもっと日本人に知ってもらい、それと同時にウガンダについて知ってもらい興味を持ってもらいと、もっと JICA の活動を大きくすることができるのではないかと思った。

次に訪問したところはマケレレ大学だ。そこでは、オープニングセレモニーをしたり、いくつかの授業を受けた。授業はウガンダの農業、経済、動物、歴史についてであった。授業を受けていると、ウガンダはアフリカの中でも環境に恵まれていることが分かった。農業を国民のほとんどが行っている理由も湖がある、雨が降る、土の栄養価が高いなど、アフリカの中でも農業をする環境に適していることが分かった。

次に訪問したのが NaCRRRI である。そこでは、ネリカ米の生産方法や、開発までの過程など、主にネリカ米についての講義を聞いた。ネリカ米を生産するために、生産量を増やすためにたくさんの努力をされており、とても感動した。実際にネリカ米を栽培をしているところに行くと、他の品種との違いが分かるように、他の品種も一緒に栽培されていた。また、そこで実際にネリカ米の苗を植えたり、収穫したネリカ米の収取りを行った。

次は Clinic Master を訪問した。そこではウガンダの患者のカルテを紙ではなく、パソコンで一括管理をしていた。そうすることで、二回目以降の受信時の手間と時間を減らすことができ、これを他の病院とも合同で行うことで、違う病院に行っても同じデータを得ることができる。私はこのシステムに強く共感し、とてもいいシステムだと思った。

しかし、一つ不安なのはもしそのシステムがなんらかのエラーやウイルスによって機能しなくな



写真4. ネリカ米の苗を植える様子

ったときにどうするかである。もしそのような状況になった時に機能しなければ、また紙媒体で一からやらなくてはならないため、とても手間と時間がかかってしまうからである。もし、このような事態でも機能するシステムであれば、これはとても画期的なシステムになると思った。

次は、EcoSmart という女性の生理用ナプキンを製造しているところに訪問した。この EcoSmart はナプキンを本来は廃棄されるサトウキビの捨てるところや、トイレットペーパーの切れ端から作っており、また製造過程でもコストを削減するようにされており、こうすることで材料費、製造費を削減することができる。また原価を安く作ることができるので、販売価格も安くすることができ、お金のない子供でも購入することができる。ウガンダでは女の子が生理用品を十分に買うことができないために学校に行くことができないという問題があり、多くの女の子がこの問題を抱えていることを知り、少し衝撃的であった。なぜなら、もちろん私は生理を経験したことがないし、それがどれほど大変なものなのかも本当の意味では理解していない。さらに、それにどれくらいのお金がかかるのかも知らないし、日本ではみんな学校に来ている。そのため、その生理が原因で学校に行けなくなるということは、私にとって考えもしないことだった。この EcoSmart がしていることは、ウガンダだけでなく世界の発展途上国、貧困者を救うとても大きな活動だと感じた。

次に、ムバララ病院を訪問した。この病院では院内の見学のほかにエボラ患者が発生した時の対応や、その患者を隔離する施設も見せてもらった。正直私は、ウガンダにはまだエボラ患者がいるものと思っていた。しかし、看護師の説明を聞いていると近年ではほとんどエボラ患者が発生していないと聞いて安心した。しかし、院内を見学していると、やはりまだ衛生面に問題があると感じた。それはトイレや、診察室を見た時に感じた。トイレと診察室はあまり清掃がされておらず、また入院患者のベッドの間隔も非常に狭かった。これらは、感染症の二次感染をおこす原因になるので、これらを解決する必要があると思った。

次に訪問したのは国立公園である。三時間ボートに乗って川を遊覧した。その川では、カバ、キリン、バッファロー、ワニなどを見ることができた。その後、滝のすぐそばまで行き、滝の迫力を実感した。次の日には、バスに乗って国立公園内を周りキリン、象、鹿、サルなど様々な野生動物を見ることができた。しかし、私が最も見たかったライオンは見ることができなかった。

このようにこの滞在期間中にウガンダという国について、またそこからたくさんのことを学ぶことができた。



写真 5. (左) 国立公園で見られたカバ

写真 6. (右) Murchison Falls

3. プレゼンテーションの内容

一通りウガンダで行ったことを説明したところで、ここからは私が行った最終プレゼンテーションについて紹介していこうと思う。私が行ったプレゼンテーションの内容は「ウガンダの渋滞」についてだ。では、なぜこのテーマにしたかというと、私は車の整備工場アルバイトをしており車やバイクに興味があり、そのことからウガンダの車やバイクがどのようなものなのか見てみたかった。そのため、街を走っている車やバイクを見てみると、ほとんどの車が日本車であった。しかし、よく見るとタイヤをつける方向が間違っていたり、サイズの違うタイヤをはいている車をよく見かけた。さらにはスタッドレスタイヤをはいている車もいた。これらを見た時に、渋滞が起きているのは単に信号機や排水設備がないからだけではないと感じたからである。さらに、

一つ疑問に思ったことがある。それは「ウガンダ人はこの渋滞についてどのように思っているのか」である。日本では、あまり日常的に渋滞するという事はない。そのため、渋滞が起きる原因は、年末やゴールデンウィークなどの特定の期間によるものか、事故によるものが多い。しかし、ウガンダでは雨が降っただけでも渋滞が起こる。つまり日常的に渋滞を見ているわけである。そこで、ウガンダ人はこの渋滞を「仕方がないもの」として捉えているのか、それとも「改善すべき問題」と思っているのか気になった。なので、TAの中で、私と一番仲の良い William にこのことについて質問した。すると、「これは問題である。」という答えが返ってきた。そこでさらに何を改善すれば渋滞がなくなるとするか聞いてみた。すると、ウガンダは道路が少ないためみんなそこに集中するし、さらに道路が狭いから余計に渋滞をすると答えてくれた。私はこれを聞いたときに、確かにそれも渋滞の原因ではあると思ったが、それだけではないと思った。なぜなら、日本も道路は狭いからである。都会は片道三車線や四車線あるが、田舎はほとんどが二車線である。それでもあまり渋滞がないということは、道路が狭いことは渋滞の主な原因にはなっていないということである。しかし、道路が少ないことは確かに渋滞の原因であると思う。だが、道路を増やすにはたくさんの費用と時間が必要である。もちろん信号機や排水設備も必要だが、それも費用がかかる。さらに、ボダボダの数を減らすことも改善策の一つではあるが、ボダボダは国民の交通手段であり、また十分な教育を受けてこられなかった人たちの就職先でもあるため、そう簡単に減らすことはできない。そこで、私はウガンダに来て最も感じた渋滞の原因を改善するように提案しようと考えた。それは、車とボダボダの運転手のマナーの改善である。特にボダボダの運転マナーは良くない。初めにも言ったが、信号待ちなどで車が止まっているとその車の間を通り抜け、車の前に行く。しかもそのボダボダの数はとても多い。そうすることで、車が前に行けず、渋滞が起こる。さらに、信号機のない交差点では誰も道を譲ろうとしないため、右折や左折をするのに苦労する。日本では優先道路があり、また道路によっては道を譲ってあげないと渋滞が起きると分かり、道を譲ることもある。しかしウガンダではそういうことはない。基本的に自分優先で運転をしており、道を譲るということはない。なので私は、これを改善すると渋滞を無くすることができるのではないかと思った。そこで、私はプレゼンに以下のアウトラインを作成し、項目の順に説明を行った。

Outline

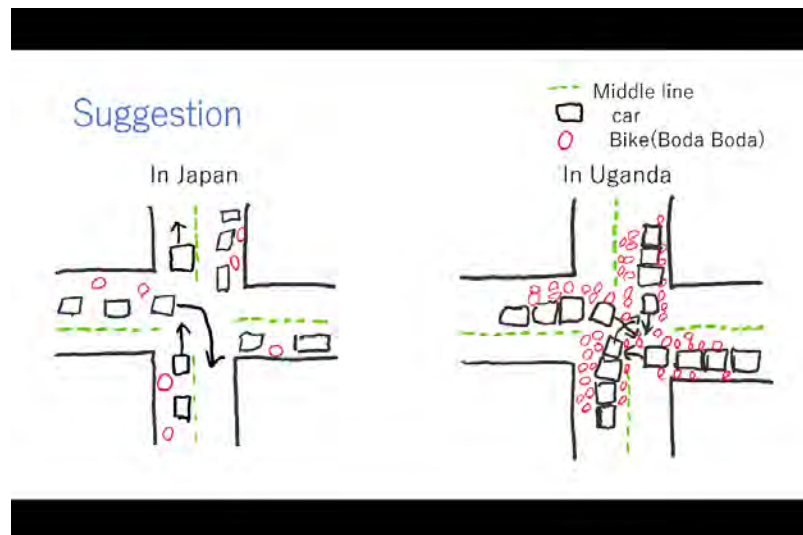
- The reason why I am interested in this theme
- Problems
- Causes
- Government has done to improve
- Suggestions
- Conclusion

私のプレゼンテーションのアウトライン

プレゼンの初めに、先ほど言ったなぜこのテーマに興味を持ったかを説明し、その次にこの渋滞がどのような問題を起こしているかを説明した。その問題とは二つある。一つ目は、移動に時間がかかることによる、人々の労働時間の減少である。本来ならば、移動に十五分かかるところが、渋滞によって一時間や二時間かかることがある。そうすると、そのぶん会社や学校に着く時間が遅れる。そうすると、本来ならば一日で終わる仕事が二日かかることもある。そうして、渋滞が起こるたびに仕事がどんどん遅れて行き、会社の生産性が低下して、会社の売上げが減っ

たり、その人の給料が減ることもある。二つ目は、GDP が渋滞によって約 2.8 兆シリングも失われていることである。これは日本円にして約 84 億円であり、このことは渋滞によって毎年 84 億円も無駄にしていることを意味している。

次に、先ほど言ったような渋滞が起きる原因を説明した後、その改善策を説明した。その改善策とは、排水設備、信号機、Fly Over（立体交差）の設置や、もっと広い道路をつくることである。しかし、これらはどれもたくさんの費用がかかり、実践することは難しい。そこで、先ほど言ったような「譲り合う」ことを改善策として提案した。しかし、これを言葉で説明することは今の私の英語力ではとても難しい。そこで、以下のスライドを作成しこれを使って説明した。



日本とウガンダでの道路における車とバイクの状態

このスライドで伝えたかったことは、日本では車間距離を十分に取ること、道を他の車に譲るということの二つだ。ウガンダと日本で明確に違うことは車間距離だ。日本は事故が起こらないように車間距離を十分に取る。取っていないと、事故した時に自分が原因でなくても罰金が課せられる。また最近では距離を詰めすぎるとあおり運転とされてしまう。つまり、日本では十分に車間距離があるので、他の車に道を譲ることができる。しかし、ウガンダでは車間距離がとても近く、前の車のギリギリまで詰める。そうすると、他の車に道を譲ろうと思っても車間距離がないため譲ることができない。なので、私はウガンダでも日本のように車間距離を十分に取り、渋滞が起こらないように他の車に道を譲るという気持ちを持ってほしいこと、ボダボダの運転マナーの改善をこのスライドを使って提案した。すると、ある質問が返ってきた。それは、「日本では歩行者はどこを歩いているのか」である。日本は車道と歩道が分かれており、歩行者が車道を歩くことはない。しかし、たしかに言われてみればウガンダは車道と歩道は分かれているが、車道を歩いている人は少なくない。それもひとつの渋滞の原因なのかもしれない。なぜなら、ボダボダだけでなく歩行者もあたりまえのように車の間を歩いていくからである。それも車の行く手を妨げているため、ボダボダと同じである。

4. 最後に

最後に、私がこの研修を通じて感じたことは二つある。一つ目は勉強不足ということである。それは、英語だけではない。もちろん英語も勉強不足で、何度も英単語や文が分からないことがあった。しかし、私がそれ以上に感じたことは、私は日本人なのに日本について全く知らないということだ。大学や施設を見学した時に必ずと言っていいほどに聞かれることが、「日本はどのような？」である。大学で農業や歴史、経済を学んだ時にウガンダのことを説明された後、日本はど

うしているか聞かれるが、私は全然答えることができなかった。しかし、TA にウガンダのことについて聞くと、ほとんどなんでも答えてくれた。経済や農業、医療など、自分の専門分野以外のことも知っていた。

二つ目は、勉強意欲が低いことだ。施設を訪問した時に、必ず質問はないかと聞かれるが、その際に TA は必ずと言っていいほど質問する。さらに、必ず自分の意見を持っており、その考えも主張していた。しかし、私はあまり質問することはなかった。その度に、ウガンダ人の勉強意欲の高さを感じると同時に、自分の勉強意欲の低さと、日本の学習環境がいかに恵まれているかを痛感した。そしてここで一つ思ったことは、ウガンダ人の勉強意欲の高い訳は、勉強がいかに大切なことなのかを知っているからだということだ。私がウガンダに来て感じたことのひとつでもある経済格差を、彼らは幼いころから見ている。すなわち、勉強をするのとししないのでは、将来にどれほどの違いがあるのかを彼らは知っている。つまり、勉強をしてちゃんとした仕事に就いてお金を稼ぎたいという欲が、彼らにはある。しかし、私達日本人は幼いころから当たり前のように学校に行き、中学までは義務としてある。それから、高校、大学と進学するが、多くの人が勉強が好きではないと私は思う。実際、私は勉強が好きではない。それは、自分からするのではなく、やらされてきたからである。先生や親から、勉強しないといい仕事に就けないと言われてきたが、小学生や中学生の自分はそれの本質を理解することができなかった。それは、周りに教育を受けることができない人、またそのことによって仕事がない人を見てこなかったからである。さらに、日本にはたくさんの種類の仕事がある。なので、中学生の頃の自分に、仕事がない未来を想像することが難しかった。なので私は、日本人は自分の目で経済格差というものを見て、それが一体どういうものなのかを理解する必要があると思った。

また、自分自身の変化もこの研修で感じる事ができた。それは、自分の考えや意見をより言うようになったことだ。日本にいと、グループワークなどをしたとき、自分とは違う意見が出てきたときに、なかなか自分はそうではないと言い出しづらいことがある。しかし、ウガンダに来てからは自分の意見をちゃんと言うようになった。それは TA のおかげでもある。TA と話していると、TA は自分が正しいと思ったことは基本譲らない。もちろん、相手の意見も聞くが私はこう思うとはっきり言う。なので、私も自分の意見を言うようになった。しかし、あまり頑固になるのもいけないので、そこは気を付けたいと思う。

また、このプログラムに参加した理由はアフリカに行きたい、アフリカについて知りたい、自分のやりたいことを見つける、の三つであった。そして、このプログラムを通じてたくさんのことに興味を持てたし、自分のやりたいことも少し見つけた。それは、これからもっとたくさんの国に行き、その国について学ぶこと、さらには長期留学をすることである。今回このプログラムに参加して本当に良かった。私のように、特に将来やりたいことのない人や、大学生活がつまらないと思っている人には是非このプログラムに参加してもらいたい。必ずいい刺激になると思う。またウガンダに来て TA たちと再会できたらいいな。

ウガンダに行って

農学部生命環境農学科1年
楠本 ころこ

目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加した動機
2. ウガンダに来るまでの心境
3. ウガンダでの経験
4. ウガンダの農家さんを見て感じたこと
5. プレゼンテーションの内容
6. 研修を通して学んだこと、自分の将来について考えたこと

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加した動機

私がこのプログラムに参加した理由は、将来海外で働きたいと思っているので大学生のうちにいろいろな国に行って視野を広げたいと思ったからです。さらに農業の分野で仕事をしたいと思っているのでウガンダの農業にも興味がありました。このウガンダでの研修では多数の農業関連の訪問先があったので参加を決めました。これまで学校でたくさんの国の農業について学んできましたが、最近のアフリカの農業について授業で取り扱われることがあまりなく、今回実際に自分の目で見ることができるチャンスだと思い、参加しました。

2. ウガンダに来るまでの心境

今回の実践プログラムで、私は初めてアフリカにきました。出発前は準備をしながら、こんなに少ない荷物で一か月弱持つのだろうか、足りないものはないか、いろいろと考えてしまって不安もありました。さらに、コロナウイルスの影響でウガンダまでたどり着くのか、プログラムもちゃんと実施されるのかと当日までひやひやしたものです。

3. ウガンダでの経験

ウガンダに着くと、まずそのまま飛行機から地上に降ろされたことに驚きました。外は熱気に包まれており、さらに晴れているはずなのになんだか快晴というには空が曇っていたことを覚えています。飛行機の中が涼しかったこともありとても暑くて、アフリカに来たのだな、と感じました。

初日はホテルに向かうだけでしたが、長時間の飛行機での移動でかなり疲れていました。初めてのご飯はホテルのレストランでしたが空腹感もなく、ただ大量のフライドポテトと戦った食事でした。



二日目の昼ご飯は韓国人がやっている中華料理屋に行きました。日本で食べる味に似ていてとてもおいしかったことを覚えています。ただ、餃子だけは見た目ものすごくおいしそうなのに、食べると何か香辛料が効いているのか食べられませんでした。それでもお腹いっぱい満足でした。TAさんの口にはあまり合わな

かったようで、そこで初めて文化の差を感じました。面白かったのは、お箸の練習を TA さんたちが楽しそうにしていたことです。私もフォークを使ってみたけど米粒が取れなくて結局お箸を使って食べました。

この日の夜は、全くお腹が空いていなかったのと、朝食に食べたパイナップルが日本で食べるものと比べ物にならないくらい甘かったので、パイナップルを頼みました。運ばれてきたものはなんと揚げられたパイナップルに、人工的なピンクのアイスクリームがのったものでした。まさか揚げられてくるとは思っていなかったのがっかりでした。それでも食べてみると元のパイナップルがいいのか、そこまで胃もたれもせず食べることができました。

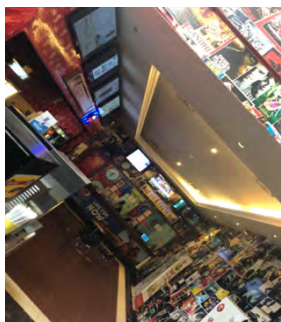


マケレレ大学に初めて行ったとき、まずホテルから学校までの道のりで道路を渡することも何度かあり気の抜けない通学でした。学校もどこからがマケレレ大学の敷地なのかよくわからずに、一生懸命歩いて何とかたどり着きました。鳥取大学とは大きさが比べ物にならないくらい広くて、緑にあふれ、過ごしやすそうな学校だと思いました。ほとんどの木にたくさんの巨大な鳥の巣がつくられており、そこら中にマラブストが飛んでいました。日本で普段見る鳥はせいぜいカラスほどの大きさが当たり前なので、人間の子供より大きいくらいの鳥がたくさんいることは新鮮でした。

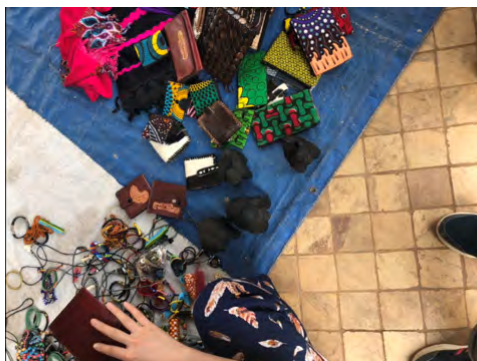
その日の昼食は大学の食堂で食べました。ここまでローカルなご飯を食べるのは初めてだったので、少し食べるのをためらってしまいました。でも食べてみるととてもおいしくて、なぜだか少し日本の味に似ているような気がしました。



次の日はショッピングモールへ行きました。案の定セキュリティを通過してから中に入ると、それまでに行った場所の中で一番きれいでした。TA さんによく来るのかと聞いてみると、映画館があるからよく来ると言っていました。映画館に行くとポップコーンのいい香りに包まれていて、内装もポスターで壁が埋め尽くされておしゃれでした。



モールの屋上にクラフトショップがあり、そこでウガンダらしいワンピースと、祖母にエプロンを買いました。そのお店の店員さんはとても気さくな方で家族にお土産を買いたいと希望を言うと一緒に考えてくれて、たくさんの商品を出してきてくれました。そこでウガンダ人はコロナウイルスもお構いなしに話しかけてくれて、いい人たちだなと思いました。



ある程度慣れてきたところに、NaCCRI を訪問しました。ここではアフリカの米について研究している様子を見ることができ、とても勉強になりました。日本では栽培されない陸稲についての学習ができたことがいちばんの学びでした。レクチャーを受けた後にみんなで田植え、収穫、脱穀に行きました。機械を使わずにすべての作業をすることは大変だったけど、こうして少しずつでも稲作が広まってきていることを実際に体験できたことはいい経験になりました。



そのあと JICA ボランティアの服部さんに会いました。実際に農業の普及を農村の農家さんにしている話を聞くと、日本との農業に関する考え方の違いや、コミュニケーションの取り方がどれほど難しいかということが少しわかったような気がします。米は良い商品作物になるけど育てるのが大変で、高く売れることがわかっていてもできれば米はやりたくない、現地の農家さんたちは言っていました。



4. ウガンダの農家さんを見て感じたこと

実際にウガンダの農業を体験し農家さんたちの話を聞いて、多くの過程の中で無駄になっている作物がたくさんあり、もったいないと思うことが何度もありました。街中では大きいトラックの荷台に大量のマトケが積まれていて、でこぼこの道を通るときに落ちてしまわないのか、下のほうにあるマトケはつぶれてしまわないのか、というようなことが考えられました。食料不足が問題になっている中で、このようなフードロスはとてももったいないことだと強く感じました。

5. プレゼンテーションの内容

最終のプレゼンテーションでは、流通の中でのフードロスをなくしていくことの有用性について発表しました。せっかく収穫した作物を少しでも無駄にせずに食べられることができれば、食糧不足の解決にも役立つと思います。

プレゼンテーションを作るときも TA さんたちにはたくさん手伝ってもらいました。初めて英語で個人のプレゼンテーションを作るのも、原稿を考えるのも、発表するのも大変だったけど、これからの課題も見つかりとてもいい経験になりました。



6. 研修を通して学んだこと、自分の将来について考えたこと

今回の研修は三週間だったので、実際にボランティア活動や社会貢献をすることがなかったので、今回訪問した協力隊の方のように、地域の活性化やその土地の地域問題の解決に自分の得意な分野でできる機会を探そうと思います。一緒に研修に行った子の中にも、もう動き出している人がいてとても刺激をもらいました。今回ウガンダに行って、自分の将来についてこれまでの人生の中で一番具体的に考えた時間でした。それまではただ海外で働きたいと漠然に思っただけだったけれど、実際に自分にできることは何か、また人が求めていることを実現させるために、私は何を学ばなければいけないか、具体的にイメージができたので、今回考えたことを忘れずに大学生活を精一杯過ごしていきます。またさらに、今回ウガンダに行って国立公園などへの観光もたくさんする機会があり、もっといろいろなアフリカの国に行ってみたいと思いました。次に行くときは、もっと長い期間にしてより良い農業がアフリカでできるような案を持っていこうと考えています。



ウガンダ海外実践教育プログラムから得た経験と学び

農学部生命環境農学科 1 年

和田 純奈



目次

1. ウガンダ海外実践養育プログラムに参加しようと思ったきっかけ
2. ウガンダに行く前のイメージと実際に見たウガンダ
3. 学んだこと
4. プレゼンテーションについて
5. 最後に

1. ウガンダ海外実践養育プログラムに参加しようと思ったきっかけ

私がこのプログラムに参加したのは、アフリカのことがよくわからないから、自分の目で見てみたいと思ったからだ。そもそも私にとってウガンダという国名は、地理の授業で必死に頭に叩き込んだだけの全くなじみがないもので、ただアフリカの国の一つという認識しかなかった。そしてアフリカは私にとってあまりにも未知の場所だった。学校の授業でアフリカについて学び、テレビなどでアフリカの映像を見ても、自分がいる環境と異なりすぎて想像するのが難しく、現実味がない存在のように感じていた。そのため、アフリカの貧困や格差などの問題に対しても「どこまで本当なのだろう？」と疑う気持ちがあり、国際協力や寄付の話を聞くとどこか冷めた気持ちになってしまうことが多くあった。さすがにこのままでは良くないと思い、まずはアフリカの現状を自分の目で見ることから始めようこのプログラムに参加した。

2. ウガンダに行く前のイメージと実際に見たウガンダ

ウガンダに行くにあたって私が最も心配だったのは食事と安全面についてだったので、そのことについて研修前に情報を集めた。

食事について調べて分かったのは、ウガンダではマトケ、米、芋、キャッサバ、メイズなどが主食として食されていること、お米はお祭りなどの特別なときに食べるものということだ。お米が特別な時にしか食べられないものならば、ウガンダでの食事は、芋はともかくマトケやキャッサバなどの、食べたことのないものばかりが出てくるのではないかと心配になった。また、先

生からバナナばかり食べていたとか食事があまりおいしくないということを聞いたので、ますます心配になった。

治安について調べると、日本の外務省の海外安全ホームページでは国境付近を除くと治安レベル1であること、それは日本人の旅行者も多いフィリピンの首都マニラと同程度の治安レベルであり、東アフリカの中では比較的治安のよい国であることなどが記されていた。一方で、アメリカ政府のトラベルアドバイザリーでは、ウガンダ全土に「十分警戒してください」と設定されていたり、スリやひったくりが頻発しているという記述があったりして、元々アフリカに対して治安が悪いというイメージを持っていたこともあり、危険な国だという印象の方が強く残った。

だが、実際にウガンダへ行けばこれらの心配は杞憂だったと分かった。確かに現地の人たちはローカルフードを主に食べているけれど、ホテルやマケレレ大学の食堂では毎日のようにお米を食べることができた。マトケやポショは一度食べてみたが口に合わなかったので、お米を食べることができて安心した。主食以外の料理もおいしいものがたくさんあり、特にパイナップルがおいしくて、毎朝たくさん食べてしまった。お肉は日本と違い、豚肉、牛肉、鳥肉だけでなくヤギのお肉も一般的に食べられていて、初めて食べたがおいしかった。また、マケレレ大学の講義で農業について学んだ際にウガンダでの食肉の生産を示した表を見たのだが、豚肉、牛肉、鳥肉の中では豚肉の生産量だけが極端に低かった。それが何故なのか聞いたところ、豚肉がおいしいから売らずに家族で食べているからとか、イスラム教の人にばれないようにこっそり食べているからという回答をもらった。日本ではこっそり食べているからデータに残らないということはほとんどないことだと思うので、お肉一つとってもこんなに国の特色が出るのかと驚いた。治安の面では、銃を携帯している警官を見かけたときや、こちらを鋭いまなざしでじっと見つめてくる集団がいたとき、物乞いをされたという日本人学生の話聞いたときなどは怖いと感じ、警戒しなくてはと思うこともあった。しかし、バスから手を振ると笑顔で振り返してくれる人がたくさんいたり、ケネディセカンダリースクールに見学に行った時には興味津々でたくさん話しかけてくれたり、「You're coronavirus!」と揶揄してきた人たちも、笑顔で「Hello!」と言えば笑顔で手を振ってくれたり、ウガンダの人たちの親しみやすさやおおらかさを感じるが多々あった。スラム街や国境付近に近づく、海外に渡航する上では当然の安全管理さえしていれば十分に観光できる国だと感じた。

また、発展途上国という言葉から思い浮かべていた様子よりも、実際はずっと発展していて驚いた。道はどこもコンクリートで舗装されておらず土がむき出しになっていると思っていたが、主要な道路はきれいに舗装されていた。首都のカンパラにはビルが立ち並び、大きいショッピングモールもあった。ホテルで Wi-Fi が使えて、部屋も予想よりきれいだった。

一方で、貧困や格差といった問題はバスで移動している際に窓から外を眺めれば、そこそこに見られた。都市から離れて JICA の圃場に向かった際に、手足はガリガリに細いのにお腹だけがポッコリと出ている子供を多く見かけた。そしてそれは日本の大学で栄養についての講義を受けたときに知った、クワシオルコルという栄養失調の症状と一致していた。講義でこの症状は発展途上国の子供に多く見られると聞いていたが、当時は「ふーん、そんなのがあるんだ」程度に聞き流して、現実には起こっている問題だと受け止めていなかった。だから、実際に自分の目で見て現



実にある問題なのだと知ったときは大きなショックを受けた。水を運んでいる小さい子供や、数少ない野菜を細々と売っているやせた女性を見かけることも度々あり、発展途上国の抱える問題や国際協力に対する意識が変わった。



3. 学んだこと

このプログラムを通して様々なことを学ぶことができた。ここではその中で最も印象に残ったことについて述べる。

一つ目はウガンダの GDP についてである。マケレレ大学の講義では歴史や農業、経済のことなどについて学んだが、最も印象に残ったのは GDP の話だった。日本の GDP が約 4.872 兆ドルであるのに対し、ウガンダの GDP は約 258.9 億ドルであった。日本とウガンダの一人当たりの GDP を比べると、一人の日本人の GDP はウガンダ人およそ 70 人分の GDP に相当し、あまりの差に驚いた。バイトをたくさんしている日本人学生の一か月分の給料とマケレレ大学の教員の一か月分の給料では、日本人学生の給料のほうが高くなってしまいうほどで、しっかりした知識を付け、ウガンダの大学であるマケレレ大学の教員という職に就いたにもかかわらずこういう状況になっていることに不平等さを感じた。また、貧しい地域の人たちは一日当たりおよそ 7000 シリング（約 210 円）以下の収入で生活していると知った。ホテルの食堂で毎食約 20000 シリング（約 600 円）を使っていたので、その生活の厳しさが分かった。しかし講師の先生が、日本の GDP の一部をウガンダに譲ってくれればウガンダは豊かになる、というような発言をした時には、日本人はそこまで豊かではないと反論したくなった。日本は一人当たりの GDP は確かに高いけれどその分物価も高いし、教育費の高さも少子化を迎えているにもかかわらず変化していない。さらに金融庁のレポートによると、欧米主要国と比べると日本の高齢者の所得はかなり低く、年金水準は OECD の平均をやや下回る。貯蓄なしで老後を迎えている人は約 25 パーセントにも上り、人生百年時代と言われる日本では老後のためにかなりの金額のお金を貯めなければならない。ウガンダの人が苦勞しているのは理解したが、日本人は日本人で大変なのだ、というようなことをその時は考えていた。しかし、プログラムを終えて日本に帰ってみれば、その考えは変わった。今まで普通だと思っていた実家がとても大きくきれいに見え、周囲も高級住宅街のように感じられた。道路がどこを走っても凸凹していないことに感動し、道を高齢者が歩いていることに違和感を覚えた。ウガンダでは草ぶき屋根の小さい家や整備があまりされていない雑多な景色が多く、道路は整備されているところもあるが、遊園地のアトラクションか何かかと思うほどに凸凹しているところもある。そしてウガンダは平均寿命が低いので、基本街で見かけるのは子供か働き盛りの若者ばかりだった。きちんと整備された環境が当たり前であり、憲法で健康で文化的な最低限度の生活が保障され、老人になるまで生きることができる時点で日本は豊かなのかもしれないと感じた。

二つ目はウガンダでの稲作の現状についてである。JICA のお米の圃場を見学し、現地の農家の方に話を聞くことができた。現在ウガンダでは米の需要が伸びており、政府の要請から JICA が支援して生産量が伸びているものの、消費量の方が大きく伸びているため輸入が増加している。コメは需要が常にあるため価格が変動しにくく、作れば作るだけ売れるという状態である。長期間の保存が可能で売りたいときに売れるというメリットもある。こんなにも条件がいい作物にもかかわらず、何故もっと多くの農家がコメの栽培をしないのかと疑問に思っていたが、ここではそれを知ることができた。コメは芋やキャッサバと比べると土を丁寧に耕さなければならない。芋やキャッサバなら問題なく育てられるような土でも、米を育てる場合はその土をさらに数回耕さ

なければならず、等間隔で植える必要もある。他の作物に比べるとコメは手間がかかるため、今まで育ててきた作物と同じように育てれば大丈夫だろうとコメの栽培に手を出して失敗することが多いそうだ。JICA の農業普及員が農業の指導を行っているものの、普及員の数が少なく、普及員の指導力も不足している。統計データが不足しているために農家の正確な状況が把握できておらず、普及員の活動管理システムや評価システムが不十分という問題もある。そこで JICA は普及員とともに教えを受けた農家にも技術普及を担ってもらったり、情報収集用のアプリを作ったりして工夫を重ねている。多くの農家がコメの栽培ができるようになれば、農家は収入を上げることができ、国は貴重な外貨をコメに割かなくてよくなるので、JICA の活動はとてもウガンダのためになっているのだと誇らしく感じた。



三つ目は交通についてである。カンパラの交通状況を初めて見たときはあまりの無秩序さに驚いた。交通量が多いうえ、運転マナーが悪く反対車線にも突っ込んでいく。歩行者が車と車の間を通り抜けながら物を売り、大量のボダボダ（バイクタクシー）が行きかう。道を譲ったりタイミングを見計らったりしてはいつまでも前に進めなさそうなすさまじい状態だった。滞在先のホテルからマケレレ大学までの道中で交通渋滞によりバスが進まず、結局歩いて向かったこともあった。車の交通量が多い要因の一つとして、移動手段が車に限られていることが挙げられると考える。ウガンダの鉄道は貨物列車の利用が主で、人の移動手段にはあまり用いられていない。日本では都市部の移動には車ではなく鉄道を利用することが多いので、車の交通量が抑えられている。車の進行が滞る要因としては道路の舗装が不完全なことや運転マナーの悪さが挙げられる。JICA は交通渋滞を緩和させるためにカンパラ首都圏庁（KCCA）に対する支援を行っており、交差点の改良や交通マナーの意識啓発を行っている。また、ジンジャにナイル川に架かる橋を建設するなど、ウガンダの交通に大きく貢献している。



最後に、海外旅行保険と情報収集の大切さである。私はこの研修中に風邪をひき、初めて海外の病院に行った。コロナウイルスが世界に大きな影響を与えている状況下だったため、熱が出始めたときはもしコロナウイルスにかかっていたらどうしようかと不安で、ウガンダで初の感染者になってしまうのではないかと、病院で隔離などになったら治療費がとても高くなるのではないかと考えていた。私は海外で体調を崩したことも物を壊したりすることも無かったので、海外旅行保険は必要なものだと分かっていてもお金がもったいないと感じていた。しかし今回のことで海外旅行保険の大切さが改めて分かった。そして熱が下がらずに病院へ行くことになった段階で、キャッシュレス・メディカル・サービスを受けられる病院について全く調べていなかったことに気づいた。今回の海外渡航は学校のプログラムで引率の先生がいて、私はただ先生について行くだけでよかったが、もし個人的な旅行でこのような状況になっていたらと思うとぞっとした。もちろん保険会社に連絡すれば病院の場所も教えてもらえるが、緊急の場合に備えて事前に知っておくことが大切だと感じた。

4. プレゼンテーションについて

私はこのプログラムを通してウガンダの良いところも悪いところも知り、日本の人にもっとウガンダについて知ってもらいたいと思った。そこで、どうすれば日本人にウガンダのことを知ってもらえるか考え、そのことについてプレゼンテーションをした。目次の2で述べたとおり、私がウガンダに行くにあたって調べて分かったことと実際の様子はかなり違っていた。私がそのような思い違いをしたのは、私の情報収集能力が欠けているというのももちろんあるが、ウガンダの情報自体が少ないことも要因の一つだと考えた。そこで、ウガンダに住んでいる日本人に、ウガンダでの生活について紹介した動画をYouTubeに上げてもらうことを提案した。文字ではなく動画にすることで人に気軽に見てもらえるし、ウガンダ人がウガンダの紹介をするよりも、日本人視点の動画にすることで親しみを持ってもらいやすい。日本では自分の私生活を紹介するだけの動画に一定の人気があることも、この提案をした理由の一つである。

私は英語で台本を見ずにプレゼンテーションをしたのは今回が初めてで、絶対にそんなことでできない、忘れる、失敗すると思っていたが、やってみれば最後まで台本を見ることなく、観客のほうを向きながらプレゼンテーションを終えることができた。これから先も英語でプレゼンテーションを行う機会はあるだろうが、このことを思い出すことで自信をもって発表ができそうだと感じた。

みんなのプレゼンテーションからは自分では気づかなかった発見や、思いつかなかった問題の解決方法を見ることができた。障害やバリアフリーについての発表は、自分には全くない気づきだったので新たな視点を得ることができた。確かに日本では障害者でも仕事につくことができるし、色々な保障があるけれど、ウガンダでは障害を持っていると生きていくことも難しくなるだろう。それから、子供が家の農業を手伝はなければならず、学校に来られない日が多くなって退学してしまうという問題についての発表では、家の農業の手伝いを農業の実習授業の単位として認めるという方法を提案していて、納得させられた。

人のプレゼンテーションを聞くのがこんなに面白いと感じたのは初めてだった。それは自分もみんなも、ウガンダの課題という一つのテーマについて真剣に考え続けたからだと思う。意見交換が楽しいと分かった良い経験だった。

5. 最後に

この研修は大変なこともあったが、有意義で楽しく、充実した時間を過ごすことができた。

発展途上国の抱える問題や国際協力に対する意識を変えられたということは、私にとって大きな一歩だった。アフリカは私にとって遠くて未知の世界だったが、ウガンダを通して少し身近に感じられるようになり、国際協力の必要性をよく理解できた。ウガンダで見たこと、それを見たときに思ったことを忘れず、発展途上国の現状を正しく理解し、自分に何ができるのか考えてい

けるような人になるための努力をしていこうと思う。

それから、ウガンダでできた友人にもたくさんの刺激をもらった。私たち日本人学生と行動を共にし、サポートしてくれたマケレレ大学の TA の人たちは、自国のことについてよく勉強しており、急にウガンダの農業について説明してほしい、経済について説明してほしいといわれた時でもスラスラと分かりやすく教えてくれた。もし私がいきなり日本について説明してほしいと言われても、彼らのようにはできる自信は全くない。海外に目を向けることも大切だが、日本のこともしっかり勉強し、人に説明できるようにならなければいけないと感じた。また、彼らは何事に対しても自分の意見をしっかり持っていて、質問も積極的にする。海外では自ら発言をしていかなないと自分の存在意義がなくなってしまうということを別の海外研修に行った時に学んだので、今回は以前よりも発言しようと努力した。前回よりはずっと発言できるようになっていて、自分の成長を感じられてうれしかったが、やはり常に自分の意見、発言を大切にして勉強している彼らにはまだまだ追いつけないと感じた。日本の講義の雰囲気ではなかなか難しい部分もあるが、それでもできる限り質問したり意見を言ったりして発言することを癖づけていこうと思う。それに加え、彼らは自分の将来を見据えて勉強をしている。私はやりたいこと、興味のあることははっきりしているものの、それをどのように仕事につなげていくかという部分があいまいなままである。そのため、自分に何が足りていないのか、何を重視して勉強していくべきなのかわからない。目標を持って勉強することの大切さを感じ、自分の将来を見つめなおすきっかけになった。それから、外に目を向けることで当たり前だと思っていた日本の良さを見つけることもできた。帰国した当初は当たり前の景色、日常生活でも新鮮味を感じて、とても不思議な体験だった。

英語は適当な文法でも、思いついた単語を口に出すだけでもとりあえず話してみるようにしていた。すると、間違えても大丈夫だと恐れずに話せるようになった。研修中は聞き取りが全然上達しないと感じていたが、日本に帰ってくると、研修前より英語が聞き取りやすく感じるようになっていたと分かった。なんと伝えればいいかわからずに諦めてしまったことやもどかしい思いをしたことも多かったので、そのとき話したかったこと、聞いてみたかったことを次はちゃんと伝えられるようになりたい。

たくさんの学びを得られた貴重な機会を作ってくださった関係者の方々に感謝し、ウガンダに行くことで広げることができた視野、新たな発見、身についた力を無駄にしないように勉強を続けていこうと思う。



最後まで読んでいただきありがとうございました。

ウガンダ海外実践教育プログラム

工学部社会システム土木系学科

澤根 正佳

目次

1. 参加の動機
2. ウガンダに行ってみて
3. プレゼンテーションについて
4. 最後に
5. 撮った中で印象に残った写真について

1. 参加の動機

はじめに、私がウガンダに行こうと思った動機は本当に軽い気持ちであった。大学生になって留学生と交流する機会があり、自分とは違った考え方を持っていることに興味がわき、海外に関心を持つようになった。また、アフリカは今後の人生において行くことができる機会はあまりなく、大学生の時にしか多くの時間を取ることができないと思い、また一度きりの人生たくさんの事を自ら経験したいと思ったからだ。家族からも、社会人になってからでは時間がなくてやりたくてもできないと聞いたこと、あまり海外に興味のなさそうであった友人が、半年前に海外へ行きとても楽しかったと聞いたことから行ってみたい気持ちがさらに強くなった。

私にとって今回が初めての海外に行く機会で、不安と緊張があった。自分の英語が通じるのか、またコミュニケーションをうまく取れるのかという不安があった。それに、このプログラムを知るまでウガンダがどこにあるのかも知らず、家族や友人にも心配をされた。それでも実際に行って、色々なものを自分の目で確かめ体験したいという思いが強く、また、このプログラムの体験談を読み「考え方が変わった」という先輩がいることを知って、自分も何か変わりたいと思いこの大学のプログラム「ウガンダ海外実践教育プログラム」に参加した。

2. ウガンダに行ってみて

ここから私のウガンダでの気づいたこと・体験したことを述べたいと思う。

① 2/26~3/4

入国の際、新型コロナウイルスの影響からか他の搭乗者とは違う入り口から入国することになり少し戸惑った。体温検査まで行われ、新型コロナウイルスの対策が日本よりもしっかり行われていることに驚いた。エンテベ空港からホテルのあるカンパラまでの道は、想像以上に整備されていた。しかしカンパラ市内に着くと、信号機の少なさやボダボダと呼ばれているバイクタクシーや車の多さ、交通マナーの浸透の無さ、スピード出しすぎ防止の凸の多さなど、交通の問題が多いことに気づかされた。何度か停電を経験したが、雨が降っただけで停電になってしまっていたようなので、安定した電力供給も課題であると感じた。また、マケレレ大学や泊まったホテル、訪れたショッピングモールは本当にきれいで驚いた。食事では、想像では芋や豆ばかりだと思っていたが、ホテルや学食ではいろいろなメニューがあり美味しく頂いた。日本では食べられないようなマトケやポショを食べることができたのがよかったし、特にパイナップルはとてもおいしかった。

この期間では主に講義を受けることが多く、言語は英語ばかりで、さらに私は今まで外国人ば

かりの環境を経験したことがなかったので少しナーバスになっていた。でも今回一緒にサポートしてくださった6名のティーチングアシスタントの方に助けてもらいながらウガンダの現状を、座学を通していろいろと学ぶことができた。講義を受ける前には、より理解を深めるためのティーチングアシスタントの方々による事前情報のようなレクチャーも受けた。その際、ティーチングアシスタントの方々は自国のことをよく理解されていて、自分はこんなに日本について知識も考えも持っておらず、とても感心した。

② 3/5~3/11

この期間では、様々な施設を実際に訪れてウガンダの現状を学んだ。JICAではウガンダの農業施設を実際に見学し、田植えや稲刈りなども経験させてもらうことができた。農道の整備が迫っているというだけでなく、機械の導入が難しいと聞き、単に機械を買うお金だけの問題ではないということがよく分かった。また、私は今まで稲作に種類があることを知らなかったが、陸稲・水稲というものがあり、農業用水路の整備が追い付かない地域では収穫量に差が出てしまうが陸稲をするしかない、ということを知った際には、地域や貧富の格差を感じてしまった。

お米農家の住んでいる田舎の地域を訪問した際は、水道や電気は通っていないという現状を実際に見学した。私にとっては最も衝撃的なことのひとつであった。電気が通っていない点は太陽が出ているときのみの活動と制限され、水道が通っていない点は雨水の利用や池で水汲みをしているという現状を聞いた。その水汲みは子供たちが行っていることから、教育を受けることが難しくなっているのだろうと思った。また、水質も気になった点の一つである。ウガンダは大気汚染の状態が世界でも悪いほうであると聞き、雨水の利用は体に影響が出てしまうのではないかと考えた。農村に行くための道は凸凹で、初日に通った道との違いの大きさに戸惑い、ここでも地域差を感じた。

医療機関を訪れた際には、医療機器不足が問題であると感じた。建物の外で寝ている人などがいて、病床の数や明らかに医者や看護師の数に比べて患者の数が多いということを感じた。それでも難民の病人の受け入れにローカルの人は何の抵抗も持っておらず、もともとは同じ民族の人たちで植民地時代に決められた国境だから関係ないということに、とても衝撃を受け感動した。また、ソフトウェアを導入している病院では、そのようなシステムがウガンダで行われていることに驚いたが、情報の管理が行えておらず、まだまだ難しい問題点であると感じた。これらの訪問を通して自分は日本の医療の現状を知らないということを実感し、これから勉強しておきたいと思った。

③ 3/12~3/21

Murchison Falls National Parkでは、テレビでしか見たことのないような大自然に感動した。日本では経験できないようなことをたくさん経験でき嬉しかった。

Kennedy Secondary Schoolでは、先生・生徒ともに快く私たちを受け入れてくださりいろいろなことをして交流することができた。生徒のほうから話しかけてくれて、私達の考えたゲームに積極的に参加してくれるなど、コミュニケーションを取ってくれた。

最後のプレゼン発表ではティーチングアシスタントの方々に今までに訪問したところで聞き逃した情報や知っている知識などを補足してもらいながら準備を進めることができた。

3. プレゼンテーションについて

私はマケレレ大学でのプレゼンで「水問題」についての発表を行った。このテーマを選んだ理由は3つある。1つ目は、カンパラ市内をバス移動していた際、道端で多くの水道工事を行っていたのを見たこと。2つ目は、田舎のほうに行った際、水道の整備ができていないということを知ったこと。3つ目は、子供たちがタンクを持って川に水汲みに行っている様子を目撃したこと。このプレゼンを作るにあたってまず、ウガンダの現状を調べるところから始めた。そうすると、

都会の地域と田舎の地域で水の供給に違いがあるということを知った。また、池や雨水の利用や水汲みが、子供たちの仕事となっていることを知った。この情報はウガンダに行く前の事前の学習でインターネットから少し調べていたが、実際に見て衝撃的であった。一方で、水力発電が伸びてきていることを知った。水供給に比べ電力供給のほうが低い現状で、お金を払ってまで電気を引くことは今のところ考えていない人が多いことや、盗電が行われているということも驚いた点である。次に、この現状から起こりうる問題について4つ述べた。悪い衛生環境・教育を受ける機会の不足・不安定な農作物の収穫量・交通渋滞である。これらが起こる原因には貧富の差と地域格差があるということを考えて。この現状を改善するための提案として3つの考えを述べた。インフラストラクチャーの開発では具体的に水道・農業用水路・公共トイレの設置などがよいと考えた。ウガンダ政府の政策では、今は道路など交通に主に予算の多くを割いていると聞いたので、水道設備などにも、もう少し割くべきではないかという考えを持った。技術の利用では浄水剤について少し述べた。ユニセフでは3,000円の支援から行えるということを知ったが、この最後の提案はウガンダ国内では難しいと考えられるので、私たち自身、日本人の果たす役割でもあると考える。これらの提案によって衛生環境の改善・子供たちの教育を受ける機会の増加・所得格差の解消が見込めるだろう。

プレゼンをやってみて、取り上げたテーマが大きすぎたため今のウガンダですぐにできそうな提案を具体的にできなかった点が反省であった。それに、今の自分ではこれらの問題を考えるうえで知識が足りないということを感じた。これからの勉強のモチベーションを上げるためのいいきっかけになった。

4. 最後に

最後に、今世界中で問題となっている新型コロナウイルスによって、他の留学プログラムが中止や日程変更となっている中、予定通り日程が進んだことに本当に恵まれていたと実感しているところだ。鳥取大学の先生方、マケレレ大学の先生方、各訪問先で受け入れてくださった方々など、今回の留学に協力してくださったすべての方々に本当に感謝している。特に今回の留学をサポートしてくださった現地のウガンダのティーチングアシスタントの方々は、英語が苦手な僕にもマケレレ大学のレクチャーを受けている際、「ここ分かる？」や「大丈夫？」と気にかけてくれたことがあった。お土産屋さんに行った際も店員さんは親切丁寧に接客してくれた。ウガンダ人は本当にやさしい人たちがばかりでウガンダが好きになった。また、一緒に行ったメンバーにはすでに大きな夢を持っている人もいて、とても良い刺激をもらえた。

反省として、よりコミュニケーションを取るには現地語をもっと使うべきだったと思った。自分が日本語を使って話しかけてくれたのがうれしかったように、基本的なフレーズを覚えてたくさん使うことが簡単に仲良くなれる方法の一つであると実感した。ぜひ今後の活動で実践したい。

今回の留学は人生において最も充実した経験の一つとなった。海外に興味をわき、国際協力にも関心を持つきっかけになった。これからの人生において今回学んだことを活かしていきたいと思う。

5. 撮った中で印象に残った写真について

ここからは私が実際に撮った写真で衝撃的だったものを添付する。



ボダボダは車の間を通ってまで前に進んでおり、交通誘導員がいないとうまく車が進まないような現状であった。今回の移動はバスで行われたが、何回か他の車にぶつけられることもあった。一人ひとりの交通マナーの意識改善が必要であると感じた。



川から水を汲んで運んでいる様子である。子供や女性が多い印象を受けた。



カンパラ市内を流れていた川の様子で、ごみが多く捨てられていた。この川で洗濯している様子も実際に見ることができ、衛生環境が問題であると実感した。



ホテル近くの用水路を流れている水を飲む牛の様子である。この川の水質はいいとは言えないような色をしていた。水質の改善が必要であると感じた。



バス移動中このような工事中の現場をたくさん見かけた。国立公園を訪れた際も道の工事が多く行われていた。そのほとんどが中国の支援であり、その後話を聞くとアジアでは中国はインフラなどの建設分野を支援しており、日本・韓国は農業や衛生、教育の支援をしていると知った。例絵として、魚を与えるのではなく釣り方を教えることが重要であるというものがあるが、私は現状を見ると物資の支援のほうが今は必要であると感じた。



JICA の施設を訪れた際の農業用水路である。多くの農家さんの田んぼがこのような整備することができれば一定の収穫が見込め安定した収入を得ることができるだろうと感じた。



田舎地域のお米農家さんを訪れた際の住居である。見てわかるように電気が通っていない現状を知り、都会との格差が問題であると強く感じた時であった。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科植物菌類生産科学コース 2 年

石坂 知英里



目次

- ①ウガンダに行く前の自分
- ②ウガンダで生活した時の自分
- ③プレゼンテーションについて
- ④ウガンダで考えたこと・得たもの
- ⑤最後に

① ウガンダに行く前の自分

私がこのプログラムに応募した動機は、「アフリカの文化や生活様式はどのようなものか、実際に自分の足で訪れて見てみたい」という単純な思いであった。アフリカは治安が悪く、あまりインフラ整備もされていない危険な場所という自分の偏見や固定概念から一人で行くよりも学校のプログラムで行った方が安全に行けると思い応募した。私はもともと英語が大の苦手であり成績もよくはなかったが、人と会話をすることが大好きであった。また、国内外問わず旅行をすることが好きで、探求心や好奇心は人一倍強い性格であった。訪れる前にウガンダについてインターネットを用いて調べてみたが、ウガンダの人々に関する情報(衣・食・住)についての詳細を得ることが難しかった。私は農学部ということもあり、「食」の面からウガンダの現実や問題点にアプローチしようと考えていた。ウガンダでは日本と同じ一日三食を基本としている。しかし、日本では一種類の主食に対し主菜や副菜などのおかずが多様であるが、ウガンダでは主食が多様である。また、ウガンダ人はほぼ決まった食生活でありバリエーションが少ないにもかかわらず、同じ食事でも飽きずに食べ続けられるという情報を知り、ウガンダ人は日本人のように好き嫌いはないのかという些細な疑問が浮かび、調査テーマとして決めた。日本で情報を集めようとしたが、JICA のホームページには食育に関する情報はなく、実際に現地で問題となっていないのではない

かという疑問を持った。

② ウガンダで生活した時の自分

ウガンダ到着後、すぐに日本大使館を訪れた。大使にお話を伺う貴重な時間にとっても緊張したが、ウガンダの現状(難民の受け入れや周辺諸国との関わりなど)や課題、国際協力について概念や姿勢について例を用いて説明していた点がとても分かりやすく理解できた。わたしは「国際協力のよう海外に視点を当てるのは日本国内での問題を解決してからだ」と自分には無縁な話だと考えていた。しかしお話を聞いて、開発途上国内の問題を協力して解決に導き、その国民の意識をどのように変えていくか、という違った観点で物事をとらえて行動していく姿勢がとても大切だということに気づかされた。

JICA 訪問では、組織の仕組みを詳しく知ることができた。ウガンダ政府から直接要請された事を検討して行動するという流れが存在することを知らなかったため、やはりウガンダで困っていることは交通問題が多いと予測できた。実際疑問としていた「食育は行われているか」という問いには「聞いたことがないため行っていないのではないか」とのことで、望んでいた回答は得られなかった。ウガンダでは入手できる食品の種類が日本と比較して大変少なく、ウガンダの内陸国という地理的条件が消費者の食品などの選択肢を狭めている原因が考えられた。

NERICA に関する講義を受けた際、ウガンダの農業の特徴や現状について現地の声を聞くことができて貴重な時間になった。その後の農場見学で、とても慎重に作物を取扱い、かつ丁寧な指導を行うことで生産性の向上を図ろうとする熱心な姿に心を打たれた。「農家さんのモチベーションをどのように保つか」という農業の分野以外の視点も必要になってくるため、農業における国際協力には多角的な視野が必要だと学んだ。

わたしは医学に関する知識が少なかったが、様々な病院を訪れたことで医療分野や衛生に関して興味を持つことができた。ムバララ病院を訪れた際に、エボラに罹った患者を隔離するスペースを見学した際、日本にいたころは「エボラ出血熱＝アフリカ」と自分に関係ないことのようにニュースを見ていたが、それは全くの間違いで決して他人事にはいけないことを自分の中で反省した。

ウガンダでの生活は日本で思っていたよりも苦ではなかった。食に関してイモばかりの生活だと思い覚悟はしていたが、マトケやアフリカ米が主流で芋はサブ主食のポジションだったことに驚いた。マトケは見た目スイートポテトのように甘そうだが実際は酸味があり、日本人の口には合わなそうだと感じた。それに対してサツマイモやカボチャは日本のものよりもとっても甘味が強くて美味しかった。ジャックフルーツやグアバなど、あまり日本では食べられないようなものにも挑戦することができた。宿泊したホテルでは、値段は同じなのにもかかわらず部屋によって差が大きく、カルチャーショックを受けた。しかし、何らかの要求をフロントに伝えたと素早く行動してくれ、臨機応変さや人柄の良さが伝わり気持ちのいいものであった。休日になると 20:00 頃から外で急に大きな音で音楽が流れだし、パーティーが至る所で日常的に行われている点でアフリカらしさを感じた。カルチャーセンターを訪れた際にダンサーの方々がとても楽しそうに音楽に乗りながら踊っており、文化を知るとともにその慣習が今でも残っていることに気づいた。水道設備について、ホテルのシャワーはお湯が出たり出なかったりして少し不便であったが、Mbarara に向かう道中で茶色く濁っている川から多くの女性がタンクを頭にのせて歩いているのを見かけ、水のアクセスが難しい地域は多くあるのだと気づき、普段の生活がどんなに恵まれているか思い知った。協力隊員の方々を訪問した際、女性の社会的立場について基本的厳しい家庭での労働を女性が担当する、と教わりウガンダでのジェンダーに関する問題について興味を持った。

ウガンダでは TA さんと長時間接していたが、ウガンダ人の人柄の良さや温かさ、優しさをとても感じる事ができた。日本のものをプレゼントするとお返しをくれたり、お土産屋さんでプレゼント交換したりととてもいい思い出になった。



写真:もらったプレゼント

左上:名前の刺繍が入ったミサンガ

右上:ウガンダカラーのミサンガ

下:名前にちなんださくらんぼのピアス

下敷:スカーフ

会話は簡単な単語で話してくれたおかげでとても聞き取りやすかったが、私自身の単語力が低いせいで表現があまり多く使えなかった点や、極端な例しか使えなかった点で相手を困らせてしまうこともしばしばあったことがとても悔しかった。しかし、今でも SNS で会話が続いており、とても大切な友達ができたととてもうれしい。会話をしていて一番驚いたことは、早寝早起きをウガンダ人みんながすることだ。日本の学生は夜更かしをすることが多く、朝早く起きることもめったにない。実際わたしも早起きは苦手である。しかし、22:00 には就寝し 5:00 には起きるという生活リズムが備わっているらしく見習う必要があると感じた。

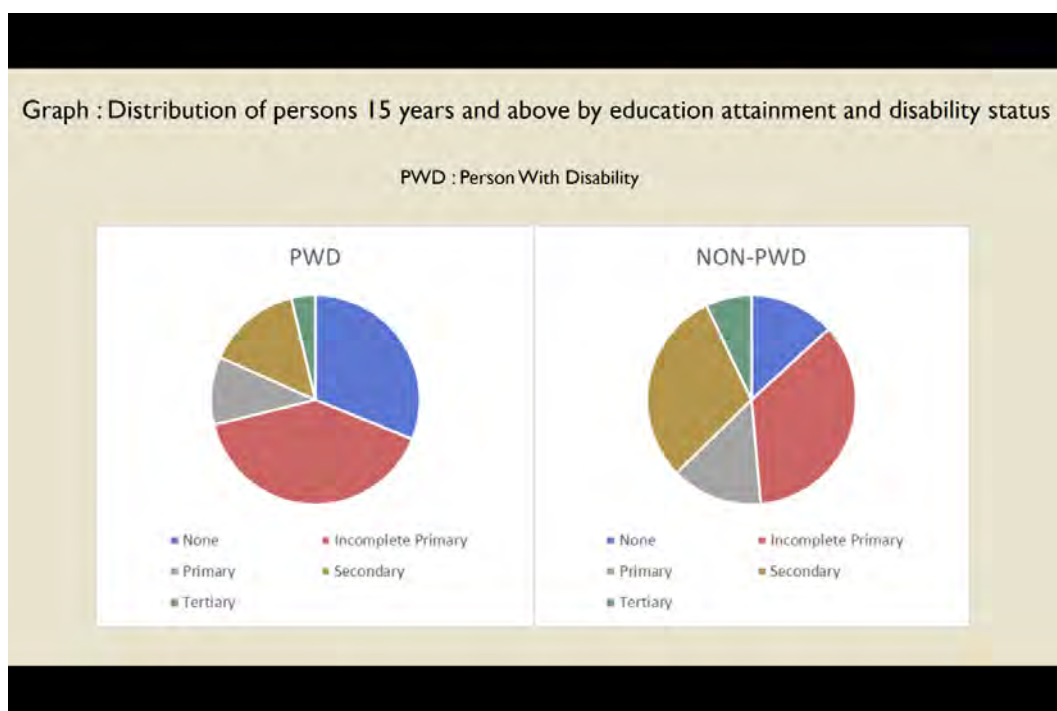
③ プレゼンテーションについて

カンパラ市内を移動していたバスの中で渋滞に巻き込まれたことがあった。西日の強い時間は渋滞がひどく、両手や頭上に果物を山盛りに積んだ人々が車と車のわずかな隙間で販売をしていた中、一人の男性を見かけた。その男性は片腕をなくしており、痩せた身体で車窓をのぞき込んでお金を要求していた。その姿を見て、ウガンダでは第一次産業が主流の中、障害を抱えている人々はどのような暮らしをしているのか疑問に思った。ホテルに戻り、インターネットで検索した結果、ウガンダは長い内戦の影響で障害者が多いということが分かった。そればかりでなく、ボダボダ（バイクタクシー）の無理な運転や交通マナーの悪さによる事故などもその要因に挙げられると考えた。私はこのハンディキャップに対するウガンダの現状を織り交ぜながらプレゼンテーションを行った。

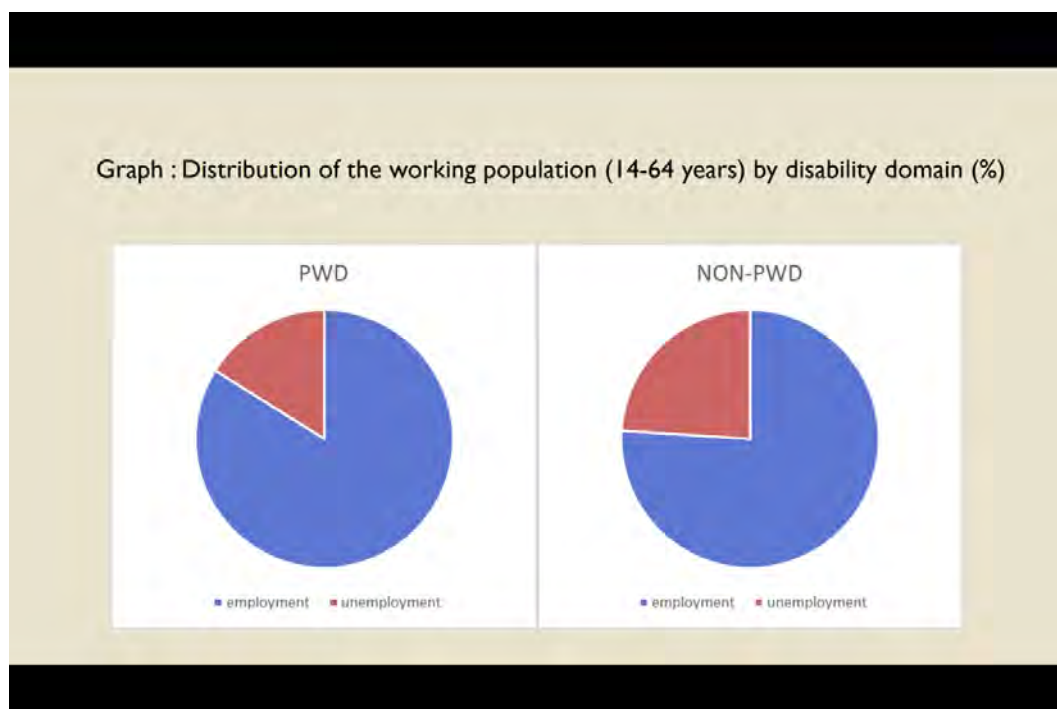
プレゼンテーションの流れは、ハンディキャップについての説明、抱えている人の数、要因を調査した後、ハンディキャップを抱えている人の直面している問題点について具体例を挙げて詳細に説明した。また、政府の行っているサービスと現状を踏まえて提案を行った。ウガンダでは大きく精神障害と身体障害の2つのカテゴリーに大別される。精神障害には発達障害も含まれている点において、日本と少し異なる。また、ウガンダでは2014年における統計で身体障害を抱えている人の割合が精神障害を抱えている人の割合の約2倍であることが分かった。日本の2019年における統計で人口に対する障害を抱えている人の割合は7.75%に対し、ウガンダでは12.80%と高い割合を占めていた。しかし情報のアクセスに疎い田舎の方で正確なデータを得ているとは言い難く、データの信頼性は低いと考えられる。障害を抱える要因は先述のとおり、長期間の内戦や交通量のひどい環境による事故のほかに病気や生まれながらに抱えたものが挙げられると考えた。

続いて障害者が直面している問題点として3つ挙げた。1つ目の問題点は今回のテーマを決断した理由でもある、雇用の機会が少ないことである。ここでは3つのグラフを挙げ、ハンディキャップを抱えている人の教育と就職の機会を紹介した。

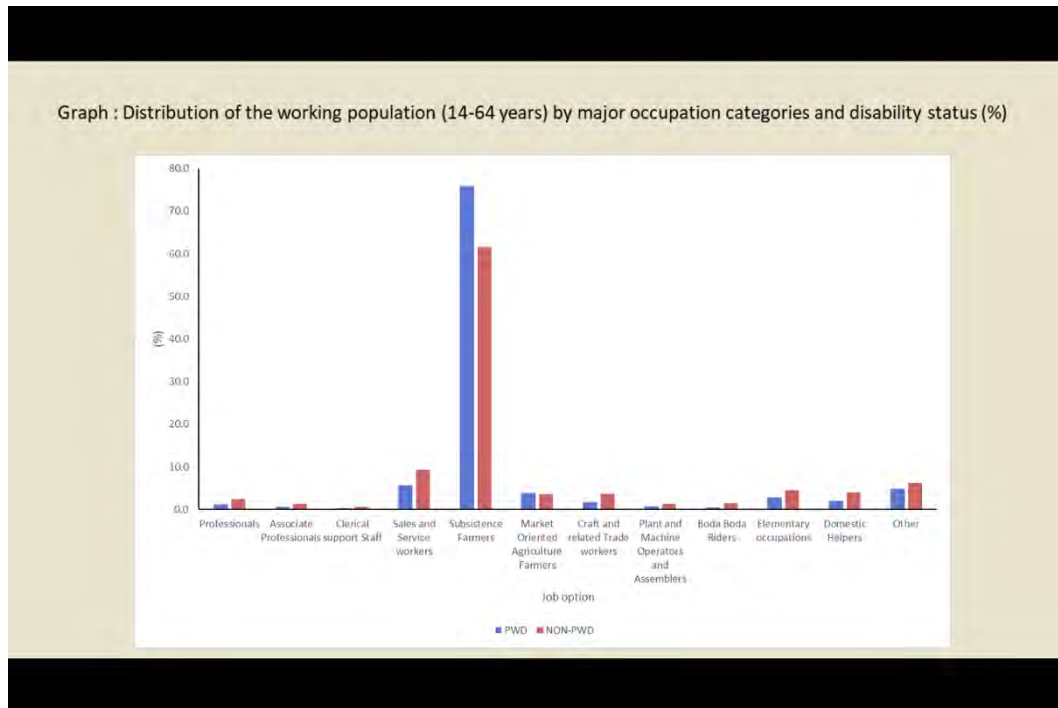
(参考：Persons With Disability BRIDGING THE GAP THROUGH STATISTICS THEMATIC SERIES BASED ON THE NATIONAL POPULATION AND HOUSING CENSUS 2014 より)



グラフ 1 15 歳以上の教育の機会の割合 (PWD:障害者)



グラフ 2 14 歳から 64 歳までの労働人口の割合



グラフ 3 14 歳から 64 歳までの職業別労働人口の割合

グラフ 1 より、31%の 15 歳以上の障害者は教育を一切受けていないという結果が報告された。また、学習レベルが上がっていくにつれて退学者が増加傾向にあった。このことについて、障害者は学校にアクセスすることが困難であることが原因であると考えた。しかしグラフ 2 から、14 歳から 64 歳までの障害者は同年代の健常者に比べて労働人口の割合が高いことが報告された。このことは、学校に行くことができないために労働人口が健常者よりも多くなっていることが考えられた。また、グラフ 3 より、農業や農作物の販売で生計を立てている障害者の割合が非常に多く、そのほかの職業に就いている割合がかなり低いことが分かった。マケレレ大学の講義内でウガンダでは農業をはじめとした第一次産業の従事者が多いとあったが、特に障害者の割合が多い点から、障害が職業の選択の幅を狭くさせており、課題であることが考えられた。

2 つ目の問題点は、高い場所や建物に入れないことである。今回の留学ではカンバラ市内を中心に行動していたが、丘が多く坂道や階段が多い印象を受けたが、道は舗装されていても凹凸や穴が開いている箇所が多く見られた。またスロープを見かけることがなく、車いすの人々はどのように生活し行動しているのかとても気になった。宿泊したホテルでもエレベーターではなく、廊下に 7cm ほどの段差も見受けられた。障害を持っている人には生活しづらそうだと強く感じた。ウガンダは発展途上国で道路整備を進めていると聞いたのに、なぜ階段の横に少しの坂を建設できないのかと疑問に思った。

3 つ目の問題点は差別である。TAさんは、「ハンディキャップについてあまり良く言われていない」と言っていた。このことは市民の障害に対する理解の低さや、未だに田舎の地方に根強く残る偏見などが影響していると考えた。

次にウガンダ政府はどのようなサービスを行っているのかを調べた。その結果、スロープの建設、手話や点字の周知や理解、障害者に対し地域ごとに 1 年に 3,000 万円の補助金、雇用や教育の機会援助など多岐にわたる補助を行っていた。しかし、裕福な人のみサービスを受けることができる現状であった。教育はあまり受けられておらず、点字を街中で見かけることもない点から、援助が不足しているように思えた。TAさんは、「このような規則はあっても実現されていないのが現状」と言っていた。これでは機会の平等ではないし、富裕層と貧困層の間に大きな経済格差が生まれると考えた。政府の行っているサービスは不十分である。

ウガンダ政府は障害者に関する法律を定めており、そこには学習や労働の権利が含まれている。しかしうまく機能していないことに対してもっと行動を起こすべきだと考えた。貧困な障害者に対して経済的な援助を増やすべきである。特に田舎の地方においては十分な情報を得ることができていないため、政府は障害者に関する知識や情報を多く発信するべきであると考えた。案としては、学校の美術の時間に障害者やバリアフリーに関するテーマでポスターを描き、街中(掲示板)に貼っていくというものを挙げた。この案は若者に障害者の理解を促すことができると同時に、市民にもポスターを見てもらい少しでも興味を示してもらうことができるのではないかと考えた。また、ウガンダでは若者が仕事に就くことが困難であるために起業することが多いと聞いた。そのため、日本のように一般企業が障害者を雇用することで一定の補助金を企業側が受け取ることができるサービスを導入する案を考えた。この案は障害者雇用の促進と企業成長、経済循環につながるのではないかと考えた。ウガンダ市民全員がよりよく暮らすために、政府が、社会全体が変わることが大切であると考えた。

④ ウガンダで考えたこと・得たもの

今回の留学を通して、普段の海外旅行とは異なる視点からウガンダという国を見つめることができたと感じる。人間力は知力、気力、コミュニケーション力、体力、実践力の5つのカテゴリーからなるものであるが、そのどれもが今回参加したことにより身についた。特にプレゼンテーションでは「日本から来た自分」がウガンダに実際に訪問して感じたこと・考えたことを踏まえて課題を見つけ、それに対してどのように行動すべきか、解決策は何か、ということを手探りで模索した。また、約3週間一緒に仲間たちと過ごす経験もこれまでの人生で初めてのことであったが、トラブルなく楽しんで生活を送ることができた。適度にお互い会話をし、歌を歌い、体を動かしたことが、ストレスをためずに過ごせた秘訣だと考えた。また、英語に直接触れる機会はめったにないため、毎日TAさんと自話に行くように心がけた。この3週間で過ごした経験は確実に自分の中で何かが変わったと思う。日本に帰国してから、以前より節水するように心がけ、お金の大切さを感じるようになった。また新しい自分のやりたいことが見つかった。ウガンダは子どもの数が非常に多いのに対して遊ぶ場が少ないことが自分の中で引っかかっていたため、児童館をつくってみたいというものだ。おもちゃは高価であるため、なかなか手が出せない家庭でも、児童館にあればおもちゃで遊んだり遊具で体を動かしたりすることができると思った。また、交通量が多い中で安全に遊べる場が少ないように感じたため、児童館が必要だと思った。今は学生でお金がないが、社会に出て資金をためたらもう一度ウガンダを訪れて、未来のある子どもたちに楽しい思い出をつくってほしいと考える。海外の文化や慣習に目を向けるだけでなく、日本のことをよく学習することが大切だと感じた。受動的になるのではなく、自らが積極的に日本の政治や文化、マナーなどを海外に発信していくことが大切であると感じた。

⑤ 最後に

このプログラムは多くの大学関係者の方々やマケレレ大学関係者の方々、そしてTAさんをはじめとする現地の方々のご協力のおかげで、一生に一度のとても良い経験をする事ができた。この感謝を忘れずに、このプログラムで踏まえた経験をこれからの学生生活に活かして有意義なものにしたい。ウガンダの方々の学ぶ姿勢を見習い、私に今一番足りない英語力を伸ばしていきたいと思う。様々なことにチャレンジし、新たな目標に向けて一日を大切にしていきたいと考える。

ウガンダ海外実践教育で学んだこと

農学部生命環境農学科 1 年
芝 玲奈

目次

1. はじめに
2. ウガンダの農業
3. 国立公園
4. プレゼンテーション
5. 最後に

1. はじめに

私は、アフリカの貧困問題に興味があり、将来、貧困で苦しんでいる人々を少しでも手助けできるような職業に就きたいと考えていたので、現地の状況を知るための 1 つの方法として参加しました。

このプログラムに参加する前のウガンダに対しての私のイメージはアフリカの中では治安がいいとはいっても、貧困問題を抱えており、国民の生活は苦しいもので、生きることに苦勞しており、マラリアやエボラなど怖い病気にかかる危険性がある、というようなネガティブなものばかりでした。ですが実際は、確かに貧困問題も抱えており、生活もその日その日を精一杯生きているというようなものでしたが、都市の人々も地方の人々も皆、笑顔で幸せそうに暮らしていました。それを見たとき、幸福という観点において日本よりも豊かな国なのではないかと思いました。また、ウガンダで出会った人たちは皆、疑問に感じたことを質問すればどんな分野においても答えてくれるうえに、政治に対する関心が高く、気後れするほどでした。政治など一つとっても日本にあまり関心を持っていなかったのも、何も知らない自分が恥ずかしいと感じる機会が多々ありました。政治に対する興味、関心、意識の高さなど敵わないものも多くあり、自国のことなどに興味を持ち、大学で学ぶことも含め、勉学に勤しまなければならないことを痛感しました。

このプログラムではマケレレ大学や JICA をはじめとし、いろいろな場所に訪問しました。まずマケレレ大学は、歴史や農業、経済などを学び、最後のプレゼンテーションを発表した、一番思い入れの深い場所です。授業は英語を理解することに必死でついていくだけで精一杯だったので、教授が私たちに質問してくださった内容について真剣に考える時間はとても楽しかったです。経済の授業の際に、GDP について学び、ウガンダの GDP が想像以上に低く驚きました。自分たちと同じように行動してくれていた TA さんたちからは自分たちとの生活水準の差をあまり感じず、より裕福なのではと思うくらいの雰囲気さえあったため、途上国といえどもそこまで貧しい国でないと勝手に思っていました。ですがそれは周りを見ることができていなかっただけで、よく見ると靴すら履けない人もいれば、栄養失調のためにお腹が膨れている子どももいたことに気づき、反省しました。ウガンダは内陸国のため、貿易に多くの費用がかかることが大きな要因であることを学び、日本が発展したのは島国であることも関与していたことを知りました。また、日本から技術を輸出し、その技術を取り入れ、製品をつくったとしても日本はその製品を輸入しないためウガンダの GDP は上昇しないと教えてもらいました。私は今まで途上国が発展できない一番の要因は技術の不足だと考えていました。しかし、この授業を受けたことにより、その考え方は間違いだったことに気づくことができました。技術の不足も大きな要因の一つではあり、それを輸出することも大切ですが、それを収益にするための確かな貿易の航路を整えるまで協力することで、やっと途上国の人々の手助けになるのではないかと考えました。マケレレ大学での授業は刺激的なものが多く、自分が持っていた考え方に対して疑問を持たざるを得ないものばかり

りでした。このように、ウガンダの実情について詳しく教えていただき、改めて考える機会をくださった先生がたには感謝の意しかありません。



1. ウガンダの農業

JICA 訪問の一環で NERICA について学ぶ機会がありました。NaCCRI ではコメの研究がなされており、田植えや脱穀などを体験させてもらいました。私は途上国といえば豆やイモ、バナナを主食としているイメージが大きかったため、コメが主食として存在していることにも驚きました。日本では水稲が主で陸稲はあまり見かけませんが、ウガンダではどちらも行われているそうです。私はコメを育てて販売する学外団体に所属しているので日本のコメとどう違うのかに興味がありました。実際、コメを見ると細長く、ばらばらとしており、視覚的にも日本のコメとは全く違うものでした。種を稲に育て、それを田に植え、脱穀するという一連の流れは全くといっていいほど同じであるように思えました。味や見た目が全く違うのは、天候や土壌により、日本と同じような品種が育ちにくいためであろうと考えると、自然とは偉大であり、不思議なものだと思いました。ウガンダではコメは主食というよりも換金作物として育てるそうなので、比較的余裕のある農家の方しか育てられないことを知り、いつかウガンダの人にも日本のコメのおいしさを知ってもらいたいと思いました。



2. 国立公園

私がこのプログラムの中で最も印象に残った場所は国立公園です。私はウガンダに行く前、国立公園がどんなところか全く知りませんでした。しかし、実際に行ってみると、国立公園に行くまでの森の中で数匹のサルをみることができ、ボートクルーズではワニやカバ、バッファローなどいろいろな動物を見ることができました。去年の学生の方々はワニを見ることができなかったことを聞き、



今回は早々に見ることができたので、運が良かったと皆で盛り上がりました。ボートクルーズの後には滝の上にバスで移動し、滝を間近で見ることができました。そこには幻想的な景色が広がり、言葉では言い表せない感動がありました。現地の方の話によると、そこは数年後に閉鎖されるというので今回、行けたことを嬉しく思うと同時に、あの素晴らしい景色をもう見ることはできなくなるという悲しさでいっぱいでした。

その複雑な感情を抱えたまま国立公園のロッジに行きました。そこは森の中のため、虫もたくさんいれば水も電気も限られており、暮らしやすいとは言えない環境ではありましたが、焚火を焚いてくださっていたので、そこで、夜遅くまで星空をぼんやりと静かに眺めていた時間はとても有意義なものでした。二日目はキリンやゾウ、ウガンダの鹿のような動物など今まであまり見たことのない動物も見ることができました。その鹿のような動物にハイエナが後ろから迫る光景を見たときは感動しました。前日の雨により道路がぬかるんでいたため、バスが横転しかけてし



まいました。しかし、私たちのベストドライバーであるファーロックさんと、皆が泥だらけになりながら力を合わせることで、バスは横転することなく、無事、運転を再開することができました。ですが、このとき、ハイエナが後ろから迫ってきていました。私たちは誰もそのことに気づいていなかったのですが、後ろの観光客の方々が教えてくださいました。そのことを知ったときは驚きと恐怖で鳥肌が立ったと同時に、教えてくださいました方々に対する感謝であふれました。

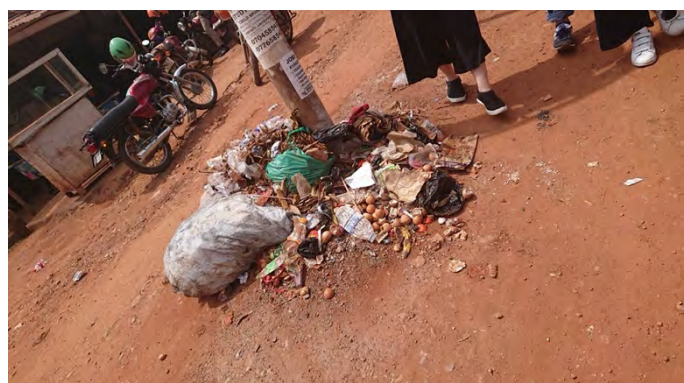
3. プレゼンテーション

私がウガンダに来て衝撃を受けたのが、想像以上のごみの量でした。いたるところに放置されているごみだけでも衝撃だったのですが、ヤギや牛などの動物はまだ想像できたとしても、善し悪しの区別がつかない、何も知らない人間の子どものまでもが道端に放置されているごみを食べてしまうことを聞き、やはりこの問題はより重要視されるべきなのではないかと考えたため、ウガンダにおけるごみ問題についてのプレゼンテーションをしました。

プレゼンテーションでは、日本とウガンダでのごみに対する扱いの違い、なぜウガンダでのごみのポイ捨てが減らないのか、ごみがどう環境に影響を及ぼすか、適切にごみ処理をしたときの利点を発表し、最後に、費用を減らし、きれいな環境を保つために、家で分別できるように基準を作り、習慣化していくことを提案しました。

ムバララ病院に訪問した際、JICAの協力隊員の方が、その病院の部屋が汚かったため、掃除した部屋を見せたところ、現地の病院の方々はそれを基準として部屋を整頓していることや、エボラなどの感染症の患者の衣服や手術などで摘出した内臓など感染の危険性の高いものは焼却処分をされており、それにはお金がかかることを知り、ウガンダには分別の基準がなく、知らないだけでそれさえあればそれをもとにごみを分別するなど適切な扱いをすると同時に環境や衛生をよりよいものにできないかと考えたからです。

ウガンダではごみを捨てることにも



お金がかかるそうなので、国からの補助を得、国民から無償でゴミ処理場に処理してもらうことが最善なのではないかとも考えましたが、それはなかなか実施できるものではありません。私が提案したのも国から補助金をもらうことよりかは容易いことだとも考えられますが、ゴミを区別などする余裕もない人も多く、国民性においても求めるだけで従う人はほぼおらず、ゴミの危険性も知っている人が少ないため、強制し、罰を与えなければ実行、浸透されにくく、ゴミ問題が改善に向かう最良の策とはいえません。いくら考えても思いつく策は行動に移すのは難しいことばかりでした。そのため、私は改善策が見つけることができませんでした。ですが、いずれはどんな人でも、環境のためにも自分たちのためにもゴミが適切に扱えるような改善案を見つけないと考えています。

4. 最後に

私たちは今回、コロナウイルスで世の中が混とんとする中、ウガンダに行くことができました。少しでも予定がずれていれば行くことができなかったところがあれば、そもそもウガンダにすら行けておらず、行けたとしても日本に帰ることもできなかったかもしれません。私たちは本当に運に恵まれており、神様が味方してくれていたのではないかと感じるほどでした。このような奇跡のような経験は忘れたくても忘れられない、一生に残るものでした。

今回、自分の意識の低さや無知さを思い知りました。発展途上国というイメージだけで貧しく、生活に苦しんでいるというような先入観をもってしまっていた自分が恥ずかしく感じるくらい、現地の方々は皆笑顔であふれており、幸せそうでした。いくら貧しい生活をしていようともその人が幸せと感じているのなら貧しさは何の問題にもならないのではないかと思います。このように、今までの考え方を見つめ直すことのできた経験が無駄にすることなく、このプログラムで得たウガンダでの人々の考え方や意識の高さを念頭に置き、自分に何ができるのかを改めて考え、そのできることを一步一步着実に進めていきたいと考えています。

私はあまり英語が得意ではありません。そのためにマケレレ大学での授業を理解することも難しく、TAさんや友だちに迷惑をかけてしまいました。英語が解らないために自分が言いたいこともはっきりと話せず、TAさんたちともあまり話せなかった自分がすごく悔しく、情けなく感じました。海外でも通用する人材になるために、まずは自分の意見がはっきりと英語で話せるようになるまで、英語や世間について勉強しなければならないことを実感しました。

今回、日本人に合わせた行動をとってくれ、私たちの学びのサポートをしてくださったTAさんたちには感謝してもしきれないと考えています。TAさんたちと対等に話せるようになるために、まずは自分の専攻分野をはじめとし、それに留まることなく、幅広い分野の情報を収集し、多面的な考え方ができるような人になりたいと考えています。



鳥取大学ウガンダ海外実践プログラムに参加して

農学部生命環境農学科 1 年
寺田 晃盛

目次

- 1, ウガンダ海外実践プログラムに参加したきっかけ
- 2, ウガンダに来て学んだこと
- 3, なぜウガンダの農家は高収入を得られないか
- 4, ウガンダの教育システムについて
- 5, 解決策
- 6, ウガンダを訪れて感じたこと
- 7, 最後に

1. ウガンダ海外実践プログラムに参加したきっかけ

私は2月26日から3月21日に鳥取大学が主催するウガンダ海外実践プログラムに参加した。この研修に参加しようと思ったきっかけは、私の将来の夢が農業高校の教師であり、大学在学中により多くの国の農業を自分の目で見に行き、そこで得た経験を生徒に伝えたいという思いがあったからである。

私は事前研修で、人口の7割の人々が農業を営んでいるということ、GDPが一人あたり680USDととても低い水準であり、また農業がGDPに占める割合が22%ととても多いことを知った。さらに農業の技術を教えるようなJICAが関連するプロジェクトはないことを知った。私はこのデータからウガンダでは農業がとても盛んであると感じ、農業教育をテーマに参加した。具体的には農業を営んでいる人々はどのようにしてスキルや知識を得ているのか、農業高校や農業大学校のような農業を教えてくれる教育機関は存在するのか、また、農家がどのような問題を抱えているのかである。



2. ウガンダに来て学んだこと

次にウガンダで学んだことを論述する。ウガンダの気候は私が想像していたより遙かに好印象を受けた。乾期と雨期があり、年間1000mm～1500mmの降水量がある。さらに火山があり、火山灰土が降り注ぎ肥沃な土壌があることを知った。これらの恵まれた気候から、作物を定植してから、ほとんど何も管理をすることもなく収穫することができるという。私はこれからウガンダが発展して行くにあたり、この環境は大いに有益であると感じた。



ウガンダの農家は Commercial、Subsistence、Domestic の大きく三つに分けることができる。Commercial は日本語の意味の通り、商業メインであり法人のようなイメージである。Subsistence は全農家の6割を占める。生産物は基本自家消費であり、余った分を市場で売りお金と交換する。Domestic も Subsistence と基本体系は同様である。Domestic と Subsistence の大きな差は、売る量と自

家消費する量の割合の差である。Subsistence は、自家消費より市場に売る量が上回っているのに対し、Domestic は自家消費の方が上回っているのが特徴である。Subsistence の農家は平均 2.5 エーカーの土地を持っている。日本と比べると少しウガンダのほうが上回る広さである。

3. なぜウガンダの農家は高収入を得られないのか

これらの学びから、日本と変わらない土地と気候を持ち合わせながら、なぜ農家の所得が向上しないのだろうかという疑問を持った。23 日間都市や農村を訪れ、バスの車窓を見る限り、日本人には到底農地とは思えないような畑がひろがっていた。作物を等間隔に植えたり、土作りをしたり、肥料や農薬を使っているような光景を見ることができなかった。実際には作物の間隔はぐちゃぐちゃで、下草は生い茂り、耕作をしている土は大きな土の塊が見られ、農村部ではコーヒー、マンゴー、マトケ、バナナ、キャッサバが寄せ植えのように植えられていた。このような状況であれば私は農家の所得は向上できないと感じた。私はこのような現状を前にし、農業教育が重要ではないかと感じるようになった。また、ウガンダの人口は 10 代が大半を占めており、人口ピラミッドはきれいな富士山型である。このことから、現在農業を営んでいる中年層向けではなく、ティーンエイジャーへの農業教育が重要ではないかと感じた。



4. ウガンダの教育システムについて

ウガンダの教育システムは小学校 7 年間、中学校は 4 年間、高校は 2 年間その後大学に進むか、専門学校に進む。また、女子や低所得者は金銭面、体調、家業である農業の作業等により、学校に通うことができず、ドロップアウトしてしまう問題を抱えていた。

私はこの研修で Kennedy secondary school を訪問した。そこで、中学生には農業教育を行っていることを知った。実際に農作物に関する研究発表をしていただき、ウガンダの子ども達の勉強に対する熱意をひしひしと感ずることができた。しかし私はこのような教育を受けていながら、実際の現地の農業に生かされていないと感じた。

この要因には大きく二つの理由があると思う。一つ目は訪問した Kennedy secondary school は中上流階級の家が通学していることである。中上流階級の人々は農業を営まず、サービス業などの第三次産業に携わっていると考える。二つ目は教え方だと考える。Kennedy secondary school で農業関連の研究発表を聞いた際、どの生徒も植え方やその作物の栄養についてはとてもよく知っていたが、その後の管理方法は知らなかった。私はウガンダ人と私とでは農業教育の意味に食い違いがあると感じた。私が考える農業教育とは知識だけではなく、実技を通したテクニックを教えるものであると考えている。しかし、マケレレ大学の TA さんと農業教育について話をしていると、教室での座学の授業をイメージし、実習などの実技をイメージしてくれる人は誰一人としていなかった。また実技をメインとする教育システムを理解してもらうことにとても時間がかかった。



5. 解決策

私が考える農業教育とは前述したとおり、知識だけでなく実習を通したテクニックを教えるものと考えている。具体的には肥料や農薬の使い方や農機具の使い方、畝の立て方、収穫物を高く売る方法などである。

私は以上の問題の打開策として、10代、20代への農業教育が重要であると考え、農業教育を専門にする農業教育機関の設置を提案する。しかし農業高校の有無を調査したが、人により回答が異なり、本当に農業を専門的に学ぶ教育機関があるのかどうかはわからなかった。具体的には日本の農業大学校のようなイメージである。ウガンダの現在の教育事情を鑑みて、中等学校を卒業した者が入学できるものとする。学校は各県に一つ設置し、履修期間は1年とする。学生は肥料や農薬の散布の仕方や種類、量、時期や畝の作り方などの整地の仕方、トラクタや草刈機などの農機具の使い方、農作物を高く売る方法、簡単な英語と数学など実習をメインとしたテクニックを重視する教育を学ぶ。また、学生は学校の農業を他の学生と授業を通して共同で管理する。基本学校では、ウガンダでのポピュラーな作物と家畜の育て方を学ぶことができるが、地域によって特産の作物が異なるため、特に特産の作物や家畜に関することを学べる。最後に一年間所定の単位を修め、卒業要件に達したものには卒業証明書を与える。この学校の設置によって、手厚くより多くの人に高度な農業技術を提供でき、さらなるウガンダの経済の活性化に繋がると考えている。ウガンダでは、一次産業と三次産業は盛んであるが、二次産業はあまり盛んと感じることがなかった。この学校では生産した作物の加工技術も教えたいと思う。



このプロジェクトを成功させるには多くの課題が山積していると思う。一番の課題は教師の人材確保と資金の確保である。どのプロジェクトも遂行するにあたり、まずはじめに乗り越えなければならない課題であり、私は政府や投資家にこの学校設置のメリットを丁寧に説明することで、乗り越えたいと思う。私の希望として、私学の学校ではなく国立か公立の学校とすることで、安価な授業料で多くの Subsistence の農家の人々に学んでもらいたい。また、ウガンダの人々に対して、どのような教育機関であるのか、通うことでどのようなメリットがあるのか、座学ではなくテクニックがメインであることを理解してもらうことが非常に重要であると思う。

6. ウガンダを訪れて感じたこと

●Lecture1,2,3

私たちはウガンダを訪れ、マケレレ大学について、ウガンダとアフリカの歴史、ウガンダの農業についてのレクチャーをマケレレ大学で受けた。

マケレレ大学の名前は昔、大学の前身である技術学校の時に現地語でうるさいという意味のケレレからきているという。22の学部を有し、ロンドン大学の学位に繋がるコースを提供する大学となっている。私は世界中どこでも大学は同じ期間履修すると思っていたが、国によって在学期間が異なることがわかった。日本では基本は四年で、医学部医学科は6年であるが、ウガンダでは学部によって異なるが、3年から5年であり、医学部医学科は5年間であった。また、ウガンダでは法学だけが大学で学ぶことができず、別の教育機関で学ぶことができることにとても驚きを感じた。

ウガンダでは全人口の60%の人々が農業で生計を立てている。地方により特産物が異なり、ムバララではマトケが盛んに生産されているという。ウガンダでは1000 mmから1500 mmの降水量、火山からの豊かな火山灰、気温から作物の管理を怠っても収穫できることが多く、基本農家はあ

まり畑の管理をしないという。そのせいもあってか水路の整備も遅れており、金銭的に余裕のある家庭しか灌漑農業を行うことができないという。

●NaCRRI

NaCRRI (National Resources Economy institute) は、JICA の専門家がネリカ米の品種改良、品質保持、病害虫の研究、農家への指導を行っている施設であった。ウガンダでは米の需要が都市部を中心に高まってきているという。これは、食生活の変化によるものであるという。もともとウガンダで主流の主食であったマトケは調理に手間と時間がかかり、時短できる米の人気の高まってきている。それに伴い毎年米の需要が 6% ずつ上がってきている。また、保存性が高く、高く売買することができお金に換えやすいことから生産者にも多くのメリットがある。最近では米の需要が高まってきていることから、米不足に陥り、中東のパキスタンから大量に輸入している事実もある。私は米を輸入することはウガンダの経済成長の妨げになると感じている。なぜなら、米の輸入に外貨を使ってしまうことにある。ウガンダを含め、発展途上国ではインフラなどの国の発展に関わることに外貨を使うべきである。またウガンダのような米を生産するポテンシャルのある国では食料の輸入に外貨をなおさら使うべきはなく、そのポテンシャルを引き出し、高めることが有効であると思う。



JICA が普及を進めているネリカ米は味がよいアジアの米と、生産性は低い乾燥に強いアフリカ種を掛け合わせてできた米である。私はネリカ米は一品種しかないと思っていたが、いくつかタイプがあるという。アフリカ種の特徴が強く出ている 1 から 18 番と、日本種の特徴が強く出ている 1 から 60 番に分けられる。その中でもウガンダでは 1 番、4 番、10 番の 3 種類が流通している。そのなかでも 1 ヘクタールあたり、3~5 トンの収量が期待でき、成熟まで 110 日で、いもち病に強い 4 番が主流であるという。また、1 番は成熟性で雨期にも対応し、一ヘクタールあたり 3~4 トンで、いもち病に強い。1 番の一番の特徴は香り米であることである。日本米のように香りがした。最後に 10 番は開花するまで 69 日間と極早熟性であり、一ヘクタールあたり、5 トン以上の収量が期待でき、いもち病にも抵抗があるタイプである。3 タイプのなかであると、極早熟性であり、短期間でより多くの収量を得ることができることから、私は 10 番のネリカ米が一番ウガンダでは有用な品種ではないかと考えた。しかしウガンダの気候では、4 番が一番適しているという。ネリカ 4 は 1 や 10 に比べて根が地中深くまでのび、乾期の水の少ないときも、安

定して水分を吸収することができる。これは実験室の中ではわからないことであり、私は現地に自らの足で訪れ、実験することの大切さを再認識することができた。

またここではネリカ米の普及についてもお話を伺うことができた。ウガンダでは農業技術の普及に多くの課題を抱えていることがわかった。一つ目は農業普及員の数が少ないことである。また、数少ない農業普及員は技術、知識、実践力が不足しているという。さらに農業統計のデータが不足しており、ウガンダの農業の現状を数字から確認することができない。最後は普及員の活動管理、評価システムが不十分であることである。私は国の発展には資金と教育が最も大切であると考えており、この話を聞いて発展途上国の農業を農業教育という角度から支援してみたいと感じた。実際に現地の農家さんを訪問した際も、より高い収入を得る方法、作物を知り、子どもの学費やより効率的に農業を営むための機械や肥料、農薬の購入資金に充てたいとおっしゃっていた。

● Mubarara hospital Clinic master

今回の研修で、現地の病院を訪問することでウガンダの医療事情を知ることができた。一つ目に訪問した病院は Clinic master というシステムを採用している。このシステムは電子カルテのことであり、患者一人一人の症状や過去の病気に加え、体重や身長などの情報がオンライン上で病院内で共有できるシステムのことである。今までは電子カルテではなく、紙のカルテであったため、管理が甘かった。しかし、Clinic master を採用することで、より正確により多くの患者を診察できるようになったという。私はこのシステムでウガンダの医療事情が向上すると感じた。しかし、実際にこのシステムを利用している医者に聞くと、より多くの患者の情報を入力できるようにしたい、他の病院とも患者の情報を共有できるようにしたい、という声が上がった。ウガンダでは医療費を払わず、病院を後にしてしまう人がいるため、先に必要なお金を払う。診察の結果より検査が必要であると感じた場合、また検査の前にお金を支払わなければならない。外来の患者はこのシステムでもよいかもしれないが、緊急を要する患者にとってこのシステムはすごく不便であると感じた。

ムバララの病院では JICA の成田隊員と合流して見学した。この病院は国立の病院であり、クリニックマスターを採用している病院に比べて建物は古く、病床も足りていなかった。成田隊員とこの病院を見学して、見えない利益を現地の人に理解してもらうことの難しさがあることがわかった。成田隊員はムバララ病院で 5S の指導をする方であった。この取り組みを通して、散らかった医薬品やカルテを整理し、患者によりスピーディにかつ高度な医療を提供することにつなげることが目的であった。しかしこの取り組みは直接収入と繋がる農業分野の支援と違い、見えない利益が得られる取り組みであるため、現地の人々はあまり乗り気でなく、理解されないことが多いという。私はいかに支援の取り組みが現地の人々に結ぶようか丁寧に説明することが大切であると感じた。

7. 最後に

私はこのプログラムに参加してとてもよかったと思う。実際に JICA の活動現場や農家さんや病院を訪れることで、改めて現地に行くことの大切さを再認識することができた。また英語の学習に関するモチベーションが向上したと思う。私はメンバーの中で一番、英語が不得意であり、友達にはできるが、質問したいときに気軽に質問することができない、TA さんとバスやホテルでたわいもない会話ができないなど英語の壁にぶつかった。この経験を元に、英語力の向上により磨きを掛けたいと思う。

私の将来の夢は農業高校の教員である。今回、自分の目や耳で感じたこと見たこと聞いたことを整理し、教壇に立ったときに、この経験を話しより多くの生徒がグローバルな視点を持てるように指導できるようになりたい。最後に蕪木先生、安藤先生、TA さんをはじめとするすべての関係者のみなさまに感謝する。

ウガンダ海外実践教育プログラムに参加して得たもの

医学部保健学科看護学専攻 1 年

石破 さくら



目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ
2. ウガンダに行く前と行った後のイメージ
3. プレゼンテーションの内容
4. プレゼンテーションを通して感じたこと
5. ウガンダに行って学んだこと、得たもの
6. 最後に

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ

私がこのプログラムに参加したいと思い始めたのは高校三年生の受験生の頃である。鳥取大学を受験しようと決めて大学について調べているときにこのプログラムについて知った。その頃はウガンダについてなにも知識がなく、アフリカ大陸にある国ということしか知らなかった。そのため、ウガンダってどんな国だろう、ウガンダの人はなにを食べているのだろう、どんな生活をしているのだろう、といろいろな疑問と興味がうかんだ。そして、ウガンダという国について調べていくにつれ、インターネットの画像などを通して学ぶのではなく実際に自分の目で見て確かめたいと思うようになった。

大学に入学し、ウガンダに行きたいという気持ちは強くなった。海外青年協力隊でアフリカに行っている人のブログや、このプログラムに参加した先輩のコメントをインターネットで調べ、読んでいるうちに絶対にウガンダに行こうと決めた。両親からは、コロナウイルスのことや、アフリカの国は治安が悪そうという理由から行く直前まで反対され続けたが、何度も説得して無事に行くことができた。

2. ウガンダに行く前と行った後のイメージ

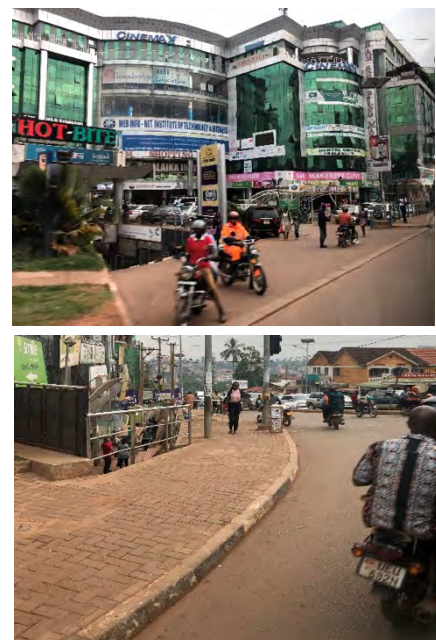
ウガンダに行くまでは、前述のとおりウガンダについて何も知識がなかった。インターネットを通して、緑が豊か、食事は毎食マトケとポショ、気温は年中 20℃以上など少しの情報は得ることができた。国の文化、生活について調べ、ウガンダに対して持っていたイメージは、「危険そうで貧しい人々があふれている国だけど自然豊かでのんびりできそう」だった。危険そうというの

は、一人で出歩けない、携帯電話や財布をひったくられそうというイメージのことである。またウガンダに行くまでは、ウガンダという国はスラム街のような景色が一面に広がっていると思っていたため、貧しい人々であふれているという印象を持っていた。

しかし、実際に訪れてみると、良い意味でも悪い意味でも全くイメージと異なっている部分が多く見られた。まず、食事のことである。ウガンダに行くまでは、ウガンダに行ったら毎食バナナを食べなければいけない生活になるのかと少し恐れていた。しかし実際は全く違っていた。鶏肉や牛肉、ヤギ肉、ご飯にポテト、サラダやパスタなど日本とあまり変わらない食事を楽しむことができた。もちろん日本食を食べたくなることは何度かあったが、特にフルーツやヤギ肉は本当においしくて感動した。



次に、街中をバスで走って衝撃を受けた。実際に見るまでは、貧しい人々がぼろぼろの服を着てそこら中で作物を売っているというイメージを持っていた。しかし、想像していたものよりはるかにきれいなスーパーマーケットやショッピングモールが立ち並んでいた。スラム街が一面に広がっているわけでもなく、綺麗な服を着ている人が多かった。道路も舗装されていない赤土のぼこぼこの道を想像していたが、日本の道路のようにコンクリートで舗装されている道も少なくなかった。このように想像していたものより良かった点が多くあった。しかし、実際に訪れて気付いた悪い点もいくつかあった。例えば、空気の汚さである。一歩外に出れば排気ガスのにおいがひどく、世界的にも上位にランク付けられるほどの空気の悪さという現状に納得できた。また、露店で売られている食べ物や公衆トイレの衛生面についてはかなりの衝撃とショックを受けた。露店では生肉や生魚が常温で包装されることなく売られている。野菜やフルーツは無造作に重ねられ、傷んでいる。このような不衛生で危険な場所から、人々が食料を買っている、買わざるを得ない、という状況にショックを受けた。しかし露店以上に衝撃を受けたのが公衆トイレである。あまりの汚さと管理が行き届いていない現状に驚いた。トイレトペーパーが備え付けられていないのが普通であるし、水が流れないことも珍しくない。トイレを利用したくないという気持ちから、ウガンダで生活している間はトイレを我慢することが多かった。ウガンダにおいて膀胱炎の患者が多いという現状を現地の病院を訪問した際に聞いたが、これらのことからなぜ多いのかということが理解できた。露店、公衆トイレの衛生面にかんしては今後改善していくべき大きな課題であると考えた。





3. プレゼンテーションの内容

私はウガンダの食品衛生についてプレゼンテーションを行った。

ウガンダでは、食べ物や飲み物により引き起こされるウイルス性肝炎や食中毒が日常的に起こり、問題視されている。では、なぜこれらの病気が日常的に引き起こされるのだろうか。この答えが、衛生状況の悪さである。プレゼンテーションでは、特に露店の衛生環境について注目して発表した。

私がこのテーマを選んだ理由は、さきほど述べた通り、ウガンダにきて食品の衛生状態の悪さにショックを受けたからである。特に路上で売られている食べ物は、食べなれている現地の方でも腹痛や下痢を引き起こすほどの状態の悪さだと聞いた。ではなぜ、このような衛生管理が行き届いていない場所で人々は食品を買うのだろうか。現地の方の話によると、このような場所、つまり露店で買い物をするのはお金がない貧しい人々で、スーパーマーケットに行くことができないからだそうだ。露店はスーパーマーケットのように包装や冷蔵保存にお金をかけていないぶん販売価格が安い。お金がない貧しい人々にとっては安く食品を買うことができる露店は日々の生活に欠かせない場所になっているのだ。そのため、衛生環境が悪いからといって露店を禁止するということはできない。だからこそ私は、露店をなくすのではなく衛生環境を改善していく方法の提案をプレゼンテーションで行った。



これらの写真はウガンダの露店の様子である。肉や魚が生の状態ですぐに路上で売られている。当然、肉や魚に虫が触れないようにこれらがショーケースに入れられて売られているというわけでもない。虫はたかり放題であるし、そばでは車やボダボダ（ウガンダのバイクタクシー）が走っているため土埃が舞っている。また、販売者が日本のようにマスクをしていたり、髪の毛が落ちないように帽子をかぶっているということもない。だから販売者がなんらかの感染症になっていれば、おそらく売っている食べ物にウイルスが付着し、感染を広げてしまうという危険性も否定できなくなる。発展途上のウガンダの医療状況においてこのような事態が起これば、集団感染を阻止することはほぼ不可能となる。今世界中で恐れられているコロナウイルスのように、ウガンダ中に感染症が広がってしまうかもしれない。

このような事態に陥らないために食品の衛生状態の改善方法を4つ提案する。一つ目はショー

ケースのような入れ物に野菜や肉、魚などを入れて売ることだ。もちろん日本のようなガラス張りの冷蔵機能があるものを指しているのではない。ウガンダの安く売ることには特化した露店において日本のような高機能なショーケースを導入することは不可能であるからだ。しかしガラスでできていなくても冷蔵機能がなくても、入れ物に食品を入れて売るとは虫から食品を守ったり、野菜やフルーツが傷んだりすることを防ぐことができる。

二つ目は生魚や生肉をラップやプラスチックトレイ、ビニール袋などを使い、個包装にすることである。ウガンダの露店では、一般的に肉や魚は日本のように小さく切ったり加工などしたりせずに、そのままの形で売られている。肉にかんしては、客が買いたい量の肉をその場で切って売るそう。当然買われるまでの間生肉は外気温にさらされた状態で、包装などもなく店頭でぶら下げられている。これは肉の腐敗を進行させ、人々がこの肉を食べた際に食中毒を引き起こす危険性がある。そこで、ラップやプラスチックトレイを使い魚や肉を個包装にすることが重要だと考えた。個包装にすることで虫や土埃などから食品を守るだけではなく、人間の手が直接食品に触れる回数を減らすことができる。今の肉の売り方では客が肉を買うたびに切るという行為が必要なため、食品に直接手が触れる回数が多くなってしまいうからだ。初めから肉を小分けに切って袋などに入れておけば、直接手が触れる回数は一回に抑えることができると考えた。

三つ目はほうきや塵取りを使い、店を綺麗にすることだ。これはごく普通のことであるが、実際に街中をバスで通ると掃除が行き届いていない露店が多く見られた。おそらくウガンダの人々にとっては、毎日掃除をするという習慣が浸透していないのだろうと考えた。では、なぜそのような習慣がないのだろうか。以前、日本で出会った外国人に、日本の小学校や中学校、高等学校で掃除時間というものがあることに驚いたと言われたことがあった。この外国人によると、学校の掃除を毎日生徒がするなんて考えられない、こんなことをするのは日本だけで外国では考えられないそう。私たち日本人には毎日掃除をするという習慣が幼いころから身についていたが外国人にとって、これは当たり前のことではないのかもしれない。だからこそ、私たちにとっては基本的なことかもしれない、ほうきと塵取りを使って毎日掃除をするということを現地の方々が習慣化していく必要があると考えた。

最後に、常温での販売を避けるため氷を使うことを提案する。しかし今のウガンダでは冷蔵庫や冷凍庫を持っている家庭はごくわずかに限られている。そのためこの提案の実現は厳しいのが現状である。そこで私は、ウガンダに氷を作る専門の企業がないかを調べた。すると氷を作りそれをスーパーマーケットや店におろす、食品のパッケージング専門の会社があることが分かった。まだ今の段階では露店のような小さな店と取引をすることはしないようだったが、今後このような会社が増え氷などの保冷材が普及していけば、ウガンダにおける食品の衛生状態への課題は大幅に改善していくだろうと考えた。



これら4つが、私が提案した改善策である。一つ目、二つ目、四つ目に関してはお金がかかる改善策であるため、すぐに露店に取り入れることは不可能かもしれない。しかし三つ目の、掃除をするという策は誰もがお金をかけずに実行できる方法である。まずはお金を必要としない方法で衛生環境の改善を図ることが重要であると考えた。私がこのプレゼンテーションを通して最も

伝えなかったことは、現地の方自身が衛生環境を改善しようという意識をもって少しずつ行動に移していくことが大切であるということだ。今後ウガンダの食品の衛生状態が改善していき、食中毒やウイルス性肝炎により命を落とす人々が減ることを願っている。

以上が私のプレゼンテーションの内容である。

4. プレゼンテーションを通して感じたこと

プレゼンテーションを通して、ウガンダの衛生環境や医療状況について学ぶことができた。ウガンダでは農業や交通などの分野では開発が進んでいるが衛生面や医療面での改善や開発はまだ十分に進んでいないと感じた。衛生面の改善が進んでいないのは、おそらくウガンダの人々の綺麗にしようという意識が低いからであると考えた。私たち日本人からみればウガンダの環境は日本よりもはるかに衛生状態が悪く汚いと感じてしまうが、ウガンダでしか暮らしたことがない人々にとってはそれが普通であり汚いということに気が付かないのだろう。このことから国際協力がいかに重要なことであるかということに気が付くことができた。国際協力があることで、ウガンダのなかの人だけでは気が付かなかった現状、課題に、外国から来た人の指摘により気が付くことができるからだ。だからこそ衛生、医療面での国際協力はウガンダという国にとって不可欠なものである。私たちのような外国人がウガンダに行き、今のウガンダにはどのような課題がありどのようにして解決していけば良いのかということ伝える必要がある。農業分野のように衛生面での国際協力が充実し、ウガンダの人々が今の状況に危機感をもって、改善しようと行動に移してくれることを願っている。

5. ウガンダに行って学んだこと、得たもの

ウガンダでは今まで経験したことがないような素晴らしいことをたくさん経験することができた。毎日が刺激だらけで一日の終わりには疲労でなにもせずに寝てしまう毎日だった。ウガンダ生活のなかで最も印象に残ったのはカルチャーセンターに行き、ウガンダの伝統ダンスを見たときである。このときが一番、ウガンダにいたことを実感できた瞬間だったからだ。ダンスを見ている時間はもちろん楽しくて感動したが、そのあとに観客全員でダンスをしたときはこれがアフリカのノリか、とアフリカ人の気分を味わうことができた気がした。この経験で私は今まで見たことがない自分を見ることができた。今までの日本にいた生活の中では、周囲の楽しい雰囲気に乗って自分も一緒に楽しむということが得意ではなかった。もちろんカルチャーセンターで踊った時のように人前でダンスをすることも苦手だった。しかし、ウガンダでは、どこにいても音楽がかかればみんながリズムをとって踊りだし、歌いだす。初めは、こんなテンションにはついていけないと感じていたが、約三週間ウガンダで生活し、みんなで楽しむことの楽しさを知ることができた。

次に印象に残っていることは、ムバララ病院を訪問した時のことである。私は鳥取大学で看護学を専攻しているため、この日を一番楽しみにしていた。ムバララ病院では、協力隊員としてムバララ病院で働いておられる日本人の看護師の方と病院見学をした。この病院を訪問するまでは、一つの大きな建物（日本でいう体育館のような建物）に様々な科がごちゃごちゃに混ざって診察を行っているのだろうというイメージを持っていた。しかし実際に行ってみると、婦人科、産科、外科、小児科などきちんと建物が分けられており、想像以上に日本の大学病院などと変わらない様子だった。また、患者や家族もきちんと診察の順番を守り待合室で番号札を持って自分の番を待っていた。このように想像していたアフリカの病院とははるかに違う光景を見ることができた。しかし悪い点も当然あった。例えば、患者の家族が病院の敷地内に溢れており、いたるところで食事や昼寝をしていたことだ。この国で日本と違うのは、患者の家族が全員で患者の見舞いや世話をしに来ることだ。そのため病院の外には家族や親戚が地面にレジャーシートのようなものを敷き、そこら中で寝ている様子が見られた。ウガンダの人々が家族や親戚をととても大切にしていることがわかったが、やはり衛生面などからみるとあまり良い光景ではないと感じた。

ほかにも手洗いや手指消毒が病院内であるにもかかわらず浸透していないと分かった。病院見学ではこのように課題がたくさん見つかった。同時に、なにか自分にできることはないのだろうかと考えるようになった。建物を立て直す、病床数を増やすなど大きなことはできないが、正しい手洗いの仕方を伝えたり、病院内の床や窓掃除の大切さを教え一緒に掃除をしたりといった小さなことであればできる。ウガンダを訪れるまではあまり国際協力に興味がなく、将来どこかの国に協力隊員として派遣されたいということも考えていなかった。しかし今回ムバララ病院を訪問して、現地の現状を知り自分もウガンダの発展に貢献することができるかもしれないと考えるようになった。見学の案内をしてくださった看護師の方が、長い人生のうちのたったの1~2年協力隊員として海外で働いてみるのもいいなと思ったと言われていた言葉がとても印象に残っている。この言葉を聞き、自分もいつかアフリカに戻ってこの方のように誰かの力になりたいと思った。この病院訪問が、私が国際協力に興味を持つことができたきっかけになった。

また、私はこのプログラムを通してコミュニケーション能力を向上させることができた。自己紹介をしたり、人前で自分の意見を言うことが得意ではなかったが、自分から進んで質問したり会話に入ろうとしなければ知りたいことをなにも学ぶことができない環境に身を置いていたため、苦手だったが必死に英文を考え会話を成り立たせようと努力していた。さらに、今までできなかったプレゼンテーションを初めて経験し、自分に自信を持つことにつながられた。ウガンダにいた三週間は、なかなか言いたいことが伝わらないもどかしさや、相手が言っていることを聞き取れず理解できない申し訳なさを毎日感じながら過ごしていた。コミュニケーションをとるのは思いのほか難しく苦戦したが、どのように言えば伝わるのだろう、簡単な英単語で言い換えられないかなど常に頭の中で考えながら会話をし、自分の意見を相手に伝えることができた時は本当に感動した。今では、英語で会話することを恐れていた初めの約一週間が懐かしく感じる。もちろん自分の英語力に自信がついたというわけではないが、人前で話すこと、英語で話すことへの恐れがなくなった。しかし、会話をする事への恐れがなくなったと同時に、自分の英語力の低さにショックを受けた。日本で英語を習い始めた中学生のころから、苦手科目を聞かれるたびに「英語です」と答えてきたほど英語が苦手だった。中学生、高校生のころは英語から逃げ続け、あまり勉強をしてこなかった。おかげで今回のプログラム中も、全く何を言っているのか聞き取れないことや、急な質問に答えられないことが何度もあり、悔しい思いをたくさん経験した。どうして今まで英語から逃げてきたのだろう、もっと勉強していればよかったと何度も後悔し、帰国したらすぐに勉強に取り掛かろうと考えていた。日本に帰国した今、レポートなどしなければいけないことに追われまだ実行できていないが、ウガンダで味わったこの悔しさを思い出し必ず行動に移していきたいと思っている。このプログラムに参加するまで、英語なんてと言って逃げ続けてきた私が、もっと英語を話せるようになりたい勉強しようと思うことができたのは、ウガンダで出会ったTAの方々や滞在先で仲良くなったホテルの方、訪問したケネディセカンダリースクールの子供たち等々、本当にたくさんの方々とかかわり、コミュニケーションをとることができたからであると思う。

6. 最後に

ウガンダに行き学んだこと、得たものはこれらのほかにもたくさんあった。一生に一度の大学一年生の春休み、このプログラムに参加しウガンダで過ごすことができて本当に良かったと思っている。今まで知らなかった自分を知ることができ、ウガンダの医療の発展に貢献するためにまたアフリカに戻りたいという新たな夢も持つことができた。そのために、もっと英語を勉強し英語力を向上させ、自分の意見を自分の力で現地の方々に伝えられるようになりたい。

また、今回見てきたウガンダの姿、魅力を日本の家族、友人にしっかりと伝えウガンダという日本人にとって未知な国をもっと多くの人に知ってもらいたい。私が看護師になりウガンダに協力隊員として貢献し恩返しできる日はおそらくまだまだ先になるだろうが、今回目に焼き付けた光景はすぐにでも日本人に伝えることができるからだ。これがウガンダへの恩返しになるか

はわからないが、実際に行って感じたこと、良いところ悪いところなど実際に行って見た者にしかわからないことを伝えていきたい。そして、一人でも多くの人がウガンダという国に興味を持ち、行ってみたいと思ってくれる人が増えればと思っている。

このプログラムは大学の先生方、現地の方々等々多くの方のサポートで無事に終了させることができた。コロナウイルスの大流行という現状の中で最後までスケジュール通りに終了させ無事に帰国できたということは奇跡である。今までにない貴重な経験をし、充実した三週間を過ごせたということに感謝をして、この経験をこれからの学びに生かしていきたい。看護師になるという夢に加え、国際協力という新たな夢に向かって、今後さらに努力を続けていきたい。



最後まで読んでいただきありがとうございました。